

# 浜 遺 跡

大分市大在浜所在遺跡の調査

大分県文化財調査報告

第 48 輯

1980

大分県教育委員会

# 浜 遺 跡

大分市大在浜所在遺跡の調査





巻首図版 遺跡周辺の空中写真（白矢印が発掘地点）



## 序 文

浜遺跡は古くから4本の細形銅剣を出土した遺跡として知られておりました。銅剣の発見は、偶然的の出土によるものでありましたが、今回の発掘調査は大分市の新産業都市としての拡大にともなう背後地の整備が直接の原因でありました。

大分市の東部に位置する大在から坂ノ市さらに佐賀関にかけての一带は、「風土記」の時代には佐尉郷、佐加郷などと呼ばれ海部郡の一部をなしていました。この地域が独自の文化圏を形成していたことは、銅剣、銅矛などの青銅製品が多数発見されている事実や、亀塚古墳・築山古墳など県下最大の規模を有する前方後円墳が所在することなどによって知ることができます。これらの文化を築いた人々は、航海術にたけ早くから海上活動を主要な生業としていた人々で、古墳時代になると大和朝廷のもとで活躍した「アマベ」であろうといわれております。今回の発掘調査は弥生時代から古墳時代におよぶ埋葬遺跡を明らかにすることができましたが、今後の「アマベ」文化の考古学的研究にとって少なからず寄与するものと考えております。

最後に調査にあたって終始協力をいただいた新産業都市開発局大在土地区画整理部はじめ関係者、地元の方々に対して深く謝意を表します。

昭和55年3月

大分県教育委員会教育長

江 藤 博

## 例 言

- 1 本書は大分新産業都市大在土地地区画整理事業にともなう江川第1放水路の建設工事において事前に実施した埋蔵文化財緊急発掘調査の報告書である。
  - 2 発掘調査は大分県教育委員会が調査主体者となって、昭和50年2月12日から51年12月10日まで2次にわたって調査を行った。
  - 3 本書の執筆は調査担当者が下記のとおり、それぞれ分担した。
    - I 序説……………渋谷
    - II 遺跡の調査
      - 1 1区の調査……………渋谷
      - 2 2区の調査……………清水・村上
      - 3 祭祀遺物……………真野
    - III まとめ……………渋谷・村上・真野
- 土器観察表
- 1 区出土土器……………真野
  - 2 区出土土器……………村上
- 4 出土遺物の実測は坂本・牧尾義則（県文化課）・村上・讃岐和夫（県文化課調査員、現在大分市教育委員会）・真野が行ない、図面の整図は清水・真野・村上・永松みゆき（県文化課文化財整理作業室勤務）が担当した。写真については遺構写真は調査担当者がそれぞれ撮影し、遺物は渋谷が担当した。

# 目 次

序 文	
I 序 説	1
1 調査の経過	1
2 遺跡の立地と環境	2
II 遺跡の調査	5
1 1 区の調査	5
(1)石 棺	6
① 1 号 2 棺	6
② 2 号石棺	6
③ 3 号石棺	8
④ 4 号石棺	10
⑤ 5 号石棺	11
(2)その他の遺構	12
2 2 区の調査	34
① A 区以北	34
② A－1 区の遺構	34
③ B－1 区の遺構	35
④ C－1 区	35
⑤ A－2 区の遺構	35
⑥ B・C－2 区第 1 集石群の遺構	35
⑦ B－2 区第 2 集石群の遺構	37
⑧ B－2 区第 3 集石群の遺構	39
3 祭祀遺物	56
III まとめ	58

## 図 版 目 次

巻首図版	浜遺跡周辺の空中写真
P L . 1	遺構(1) 1区2号石棺
P L . 2	遺構(2) 1区3号石棺
P L . 3	遺構(3) 1区3号壺棺・4号石棺
P L . 4	遺構(4) 1区5号石棺
P L . 5	遺構(5) 1区第1集石遺構
P L . 6	遺構(6) 1区第2集石遺構・第3土器群出土状態
P L . 7	遺構(7) 1区第4土器群・第5土器群出土状態
P L . 8	遺構(8) 1区2号壺棺・3号壺棺出土状態
P L . 9	遺構(9) 2区全景
P L . 10	遺構(10) B-2区・集石13
P L . 11	遺構(11) 2区およびG地点遺物出土状態
P L . 12	遺物(1) 玉類・鉄器
P L . 13	遺物(2) 土器①
P L . 14	遺物(3) 土器②
P L . 15	遺物(4) 土器③
P L . 16	遺物(5) 土器④
P L . 17	遺物(6) 土器⑤
P L . 18	遺物(7) 土器⑥
P L . 19	遺物(8) 祭祀遺物

## 挿 図 目 次

- 第 1 図 浜遺跡周辺の遺跡分布図
- 第 2 図 遺跡周辺の地形と調査区
- 第 3 図 1 号石棺実測図
- 第 4 図 2 号石棺実測図
- 第 5 図 2 号石棺出土玉類実測図
- 第 6 図 3 号石棺実測図
- 第 7 図 出土鉄製品実測図
- 第 8 図 4 号石棺実測図
- 第 9 図 5 号石棺実測図
- 第10図 2 号・3 号石棺間の壺形土器出土状態
- 第11図 5 号石棺周辺の土器群
- 第12図 第 3・第 6 土器群出土状態
- 第13図 2 号・3 号壺棺出土状態実測図
- 第14図 壺棺実測図
- 第15図 1 区出土土器実測図 (1)
- 第16図 1 区出土土器実測図 (2)
- 第17図 1 区出土土器実測図 (3)
- 第18図 1 区出土土器実測図 (4)
- 第19図 1 区出土土器実測図 (5)
- 第20図 1 区出土土器実測図 (6)
- 第21図 1 区出土土器実測図 (7)
- 第22図 1 区出土土器実測図 (8)
- 第23図 1 区出土土器実測図 (9)
- 第24図 鉄剣出土状態
- 第25図 B-2 区主要部の遺構(1)
- 第26図 B-2 区集石13下層
- 第27図 B-2 区主要部の遺構(2)
- 第28図 2 区出土土器実測図 (1)
- 第29図 2 区出土土器実測図 (2)
- 第30図 2 区出土土器実測図 (3)
- 第31図 2 区出土土器実測図 (4)
- 第32図 2 区出土土器実測図 (5)
- 第33図 2 区出土土器実測図 (6)
- 第34図 2 区出土土器実測図 (7)
- 第35図 2 区出土土器実測図 (8)
- 第36図 祭祀遺物実測図

別添付図 浜遺跡遺構遺物配置図



# I 序 説

## 1 調 査 の 経 過

大分市大在地区では、大分臨海工業地帯の後背地として土地区画整理事業がすすめられている。その事業計画に対応して県教育委員会では、昭和49年度にこの地区の遺跡の分布調査を実施し、その結果を関係各機関に周知するとともに遺跡の取扱いについて協議をしてきた。

昭和50年度の事業計画については、周知遺跡4ヶ所が工事予定地に含まれており、6月23日から6日間にわたって、その地域の試掘調査を実施した。

しかし砂丘遺跡という地理的条件から、遺構検出面は深く人力により深く掘り下げることは危険で、遺物をわずかに採集したのみで遺構等の確認はできなかった。

翌年2月18日、浜遺跡を東西に分断する江川第1放水路に架設する切戸橋下部構築工事にさいし立合い調査を行った結果、地表より1.5～2mの深さに遺物の包含層を確認した。(以上の調査を予備調査とした)。

2月24日切戸橋西南側で、江川第1放水路と並行する道路取り付け工事によって石棺が発見され、その後発見された二基の石棺等を加えて、2月26日～3月12日の期間で発掘調査を実施した。

一方、切戸橋下部工事の現場では、土砂搬出のための取り付け道路より、石棺二基、壺棺、土器群があらたに発見され、この地域の発掘調査を3月13日から3月31日まで行った。(この調査を第一次調査一第一区一とした。)

つづいて、第一次調査区に接する北側で、江川第1放水路掘削工事の予定地でも調査を行なった。調査は10月25日から12月10日まで行われ、集石墓や弥生～古墳時代の土器群数ヶ所が検出された。また調査期間中、周辺地域の宅地造成工事で発見された遺構についても合わせて調査をした。(これを第二次調査一第二区一とした。)

なお、調査にあたっては大分県新産都開発局、大在土地区画整理事務所をはじめ工事関係者、地元大分市教育委員会、地元の方々にひとかたならぬ御協力を賜わった。

調査員の構成は次のとおりである。

1 調査主体 大分県教育委員会

2 調査員

予備調査 後藤宗俊 真野和夫 渋谷忠章 牧尾義則 (県文化課)

第一次調査 真野和夫 渋谷忠章 坂本嘉弘

讃岐和夫 (県文化課調査員、現大分市教育委員会)

橋爪啓史 (県文化課調査員、現竹田高等学校)

(調査補助員) 江藤恭丞 (国士館大学学生)

第二次調査 清水宗昭 村上久和 (県文化課)



## 2 遺跡の位置と環境

浜遺跡は大分市大字浜字西に所在し、別府湾に面する砂丘遺跡である。昭和38年、現大分市に合併する以前は、北海部郡大在村に属した。

遺跡の西には大野川、東には丹生川が流れ、南側には標高20m前後の低丘陵が海岸部へ伸び、豊後水道に突き出す佐賀半島の基部にあたる。

浜遺跡は、中細銅剣4本の出土地として注目されていた遺跡であり、また東国東郡武蔵町内田遺跡、同郡国東町重藤遺跡と相似た県下でも数少ない砂丘遺跡のひとつである。

中細銅剣については賀川光夫氏<sup>(1)</sup>によって報告されているが、復原形で最長のものが全長44.5cm、最小が41cmとなっている。中細銅剣の分布は瀬戸内海沿岸を中心に広範囲に分布を示すが、九州には浜遺跡のほか例がなく、しかも浜遺跡の中細銅剣は近畿地方かその近辺で鑄造された可能性が強いともいわれている。

古代における海部郡は四郷に分かれ、『豊後風土記』海部郡の条に丹生郷、佐尉郷、穂門郷がみえ、『和名抄』ではこれに佐加郷が加えられている。

このうち穂門郷を除く三郷には多くの古墳が分布しており、県下では宇佐市川部・高森地区、日田市周辺地域とともに最も注目される地域である。

佐加郷は佐賀関半島の東端にあたり、猫塚・馬場・築山・中ノ原古墳など4世紀から6世紀にいたる古墳があり、ひとつの有力な地域集団の推移をたどることができる。

浜遺跡の所在する佐尉郷は、『和名抄』に佐井の字をあてている。範囲について『箋釋豊後風土記』に

案在郡之北。作東恐誤写耳。倭名鈔所謂佐井與此同。今廢為村稱大西小西。又有細村。盖佐井転訛。今呼曰保曾村。

とあり、旧大在村と坂ノ市の海岸部一帯の地域が考えられる。

丹生川左岸の丘陵上には、県下で最大の規模を誇る亀塚古墳が位置し、さらにその北西600mには大蔵古墳が存在する。共に別府湾を一望する景勝の地に営まれた前方後円墳である。

丹生郷は大野川右岸の台地から遠く臼杵市までふくんだ地域とみなれている。この丹生郷の一角にあたる大野川右岸の野間地区には、前方後円墳3基を含む10基の古墳群が所在し、臼杵市には下山古墳、臼塚古墳といった前方後円墳が所在している。

このように、旧海部郡下にみられるこれらの古墳の被葬者は、いわゆる海人系の地域集団の首長とみられている。そして彼らは瀬戸内海の海上交通に重要な役割をなし、また畿内文化と北部九州の文化の交流にも大きな位置を占めていたものとみられている。

今回の調査にかかる浜遺跡は、これら海人系の集団につらなる人々の遺跡とみられるものでその意義は大きい。又ここに出土した土器は東九州の土器編年の空白を埋める上で貴重な発見であった。

(1) 賀川光夫「大分県浜遺跡」(『日農耕文化の生成』日本考古学協会篇昭和36年)



第1図 遺跡周辺の地形と調査区



第2図 遺跡周辺の地形と調査区



## II 遺 跡 の 調 査

### 1 1 区 の 調 査

#### 第1次調査の概要

1次調査は、江川第1放水路とそれに並行する道路工事に伴うもので、切戸橋の北側にあたる。調査区の面積は約 500㎡でほぼ全域にわたって遺構や遺物が検出された。

大在地区の砂丘一帯は、海岸線の後退によりいくつかの波状の微高地が形成されており、今回の調査区もその一つにあたる。調査区域は海岸線からの比高が 6.5mで、北側にむかってやや低くなる。したがって遺構や遺物は南側で地表より約 1.5m、北側で 1 m の深さで検出した。

最初は調査区の西側で、道路工事によって3基の石棺と集石遺構が、主軸を北西～東南にむけて、ほぼ南北に 5～7 m の等間隔で発見された。

一方、江川第1放水路の工事区で、調査区の中央部から東側にかけては、石棺2基と壺棺3基、集石遺構1基が検出された。

石棺は、佐賀関半島の先端部附近に産出する緑泥片岩を棺材として用い、床にも丁寧に板石が敷かれていた。

石棺内からの遺物は、2号石棺で多くの玉類が検出された他は、鉄鏃や玉類が1～2点認められた程度である。

また3号石棺は、蓋石より約50cmの高さに人頭大の礫石が楕円形状にとり囲んでおり、墓域や墓標としての役割を果たしていたものと考えられる。

集石遺構は、1区の場合は現状からすれば円形や長円形を呈した列石遺構と呼ぶ方がより適切かと思われる。人頭大からそれよりやや小さめの礫で、石英岩、蛇紋岩を用いている。

第一集石遺構では、口縁部が朝顔状に開く二重口縁壺が、第二集石遺構は甕形土器などが検出されており、前者の年代は4世紀代と考えられる。

壺棺は3基が発見された。3基とも頸部から口縁部にかけて打ち欠き、2号は合口、3号は他の土器片を用いて蓋にしている。3号壺棺より管玉とガラス小玉それぞれ1点が検出されており、これらの壺棺の年代は土器形式から弥生時代終末期と考えられる。

これらの遺構の他に、弥生時代中期から古墳時代前半に至る土器が、単独あるいはある程度のまとまりをもって検出され、大きく6群に分けられる。壺形、甕形、脚付鉢形、脚付壺形、高坏、器台、鉢形土器など器種は豊富で、そのほとんどが胴部や底部近くに穿孔がみられ祭祀に関する土器である。

以上のように、1次調査区では石棺、集石遺構、壺棺などの遺構と豊富な土器群が検出された。そして土器の形式から弥生時代中期から古墳時代にいたる埋葬遺構およびそれに伴う供献土器群と考えられるが、砂丘遺跡という制約上弥生中期の明確な埋葬遺構は今ひとつ明らかではない。

さらに、調査区の南側にあたる切戸橋の下部構築工事では、若干の土器を発見したにとどまり、

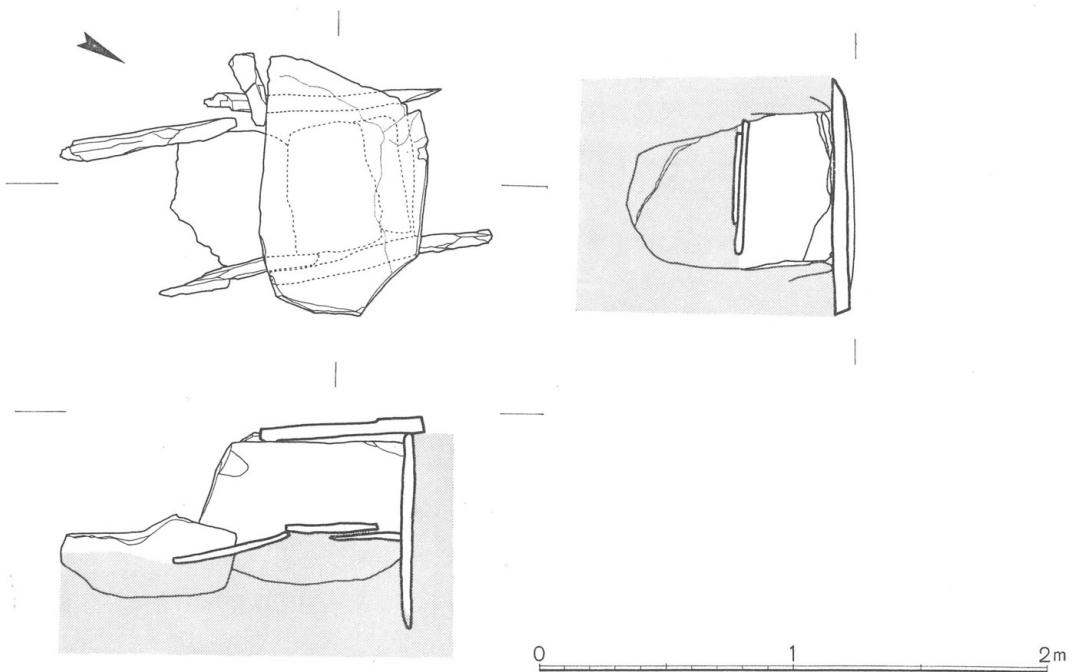
砂丘の海岸側斜面のせまい波状の微高地を東西方向に利用していたようである。

### (1) 石 棺

#### 1 号 石 棺

2号石棺の北側約2m付近で最初に発見されたが、すでに約3分の2を破壊されたあとであった。2号石棺とはほぼ平行してつくられており、蓋石や側壁はそれぞれ3枚程度の板石で構成されていたものと思われる。棺内は幅50cm、深さ35cmを測り、床面に厚さ2～3cmの板石を使用している。

副葬品は発見されなかった。



第3図 1号石棺実測図

#### 2 号 石 棺

N-42°-Wの主軸方向をとる。蓋石は6枚の板石を用いているが、そのうちの1枚はやや小さめの板石で、接合部を覆っている。

棺内は長軸180cm、幅45cm、深さ45cmを測り、床面は3枚の板石が敷かれている。東西の小口は各1枚をたて長に用い、その長さは120cmである。

側壁は、それぞれ2枚の不整形な板石を用い、床面の高さは側壁の組合せを考慮して構築している。

壁面や棺内の土砂には朱が認められ、副葬品として勾玉、水晶製算盤玉、碧玉製管玉、不明鉄

製品が検出した。

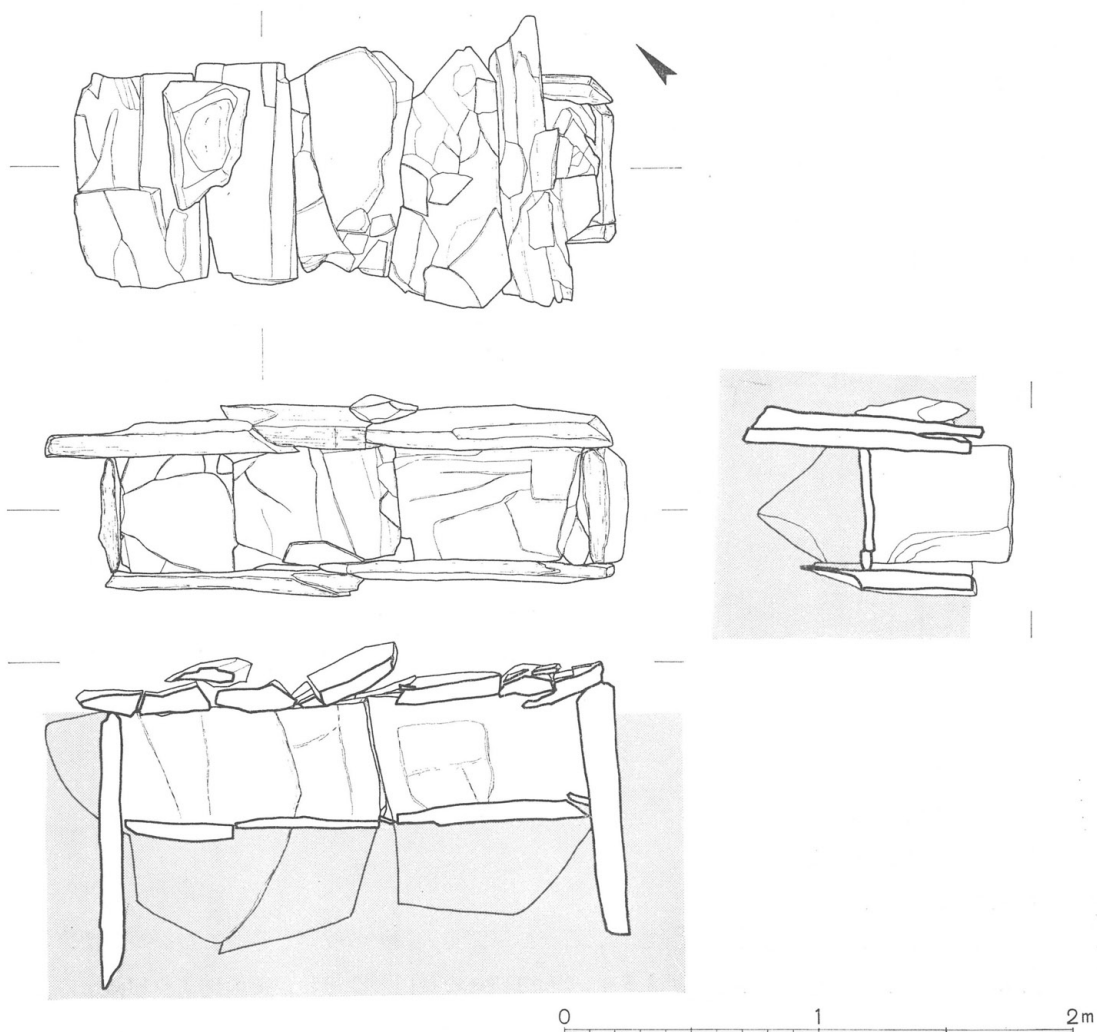
### 勾玉

2個出土した。材質は1つが硬玉製、他の1つは不明である。硬玉製の勾玉は頭部と尾部の大きさに差がなく、全長1.3cm、幅0.6cm、厚さ0.6cmを測る。孔は両面から穿孔しているが、0.35cmと勾玉の大きさの割には大きい。

他の1つは乳白色を呈するが、表面が粉状に剝離して、白く付着するほど風化がすすみ軟質である。全長1.4cm、幅0.4cm、厚さ0.4cmを測る。

### 水晶製算盤玉

1個出土した。最大0.8cm、厚さ0.7cmを測る。両端を平らに仕上げたのち一方より穿孔する。水晶製の算盤玉は県内では初見である。



第4図 2号石棺実測図



### 碧玉製管玉

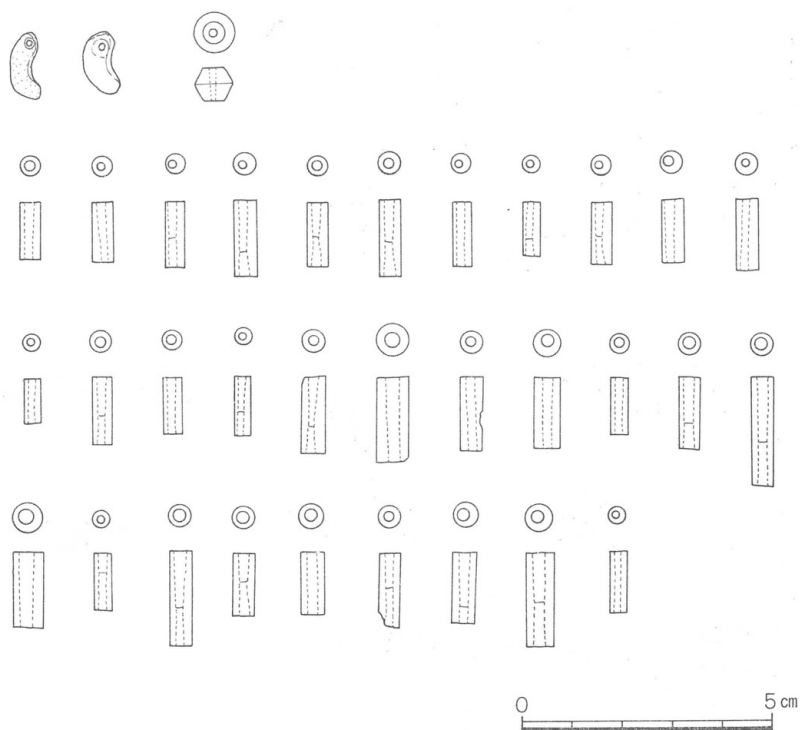
管玉は計31個が出土した。色は濃緑色と淡緑色を呈する。細身のものとやや太めのものがあり、全面研磨によってよく整形されている。最長のもので22mm、最短のもので9mmである。径は最大が6.5mm最小径3.5mmを測る。孔は両端から穿たれているものが多い。

### 小玉

285個と碎片約20個分を検出した。そのうち2個が赤味を帯びた石質で、他は全てガラス製である。径は1.5～6mm、孔径0.5～4mmとまちまちで、断面の形状および厚さはばらばらで斉一性がない。色は水色、淡緑色、薄い紺青色に大別され、水色が圧倒的に多い。

### 不明鉄製品

4.3×2.5cm、厚さ0.15cmの薄い鉄片である。端部の2ヶ所に小さな折り返しを持つが、何に使うものか不明である。



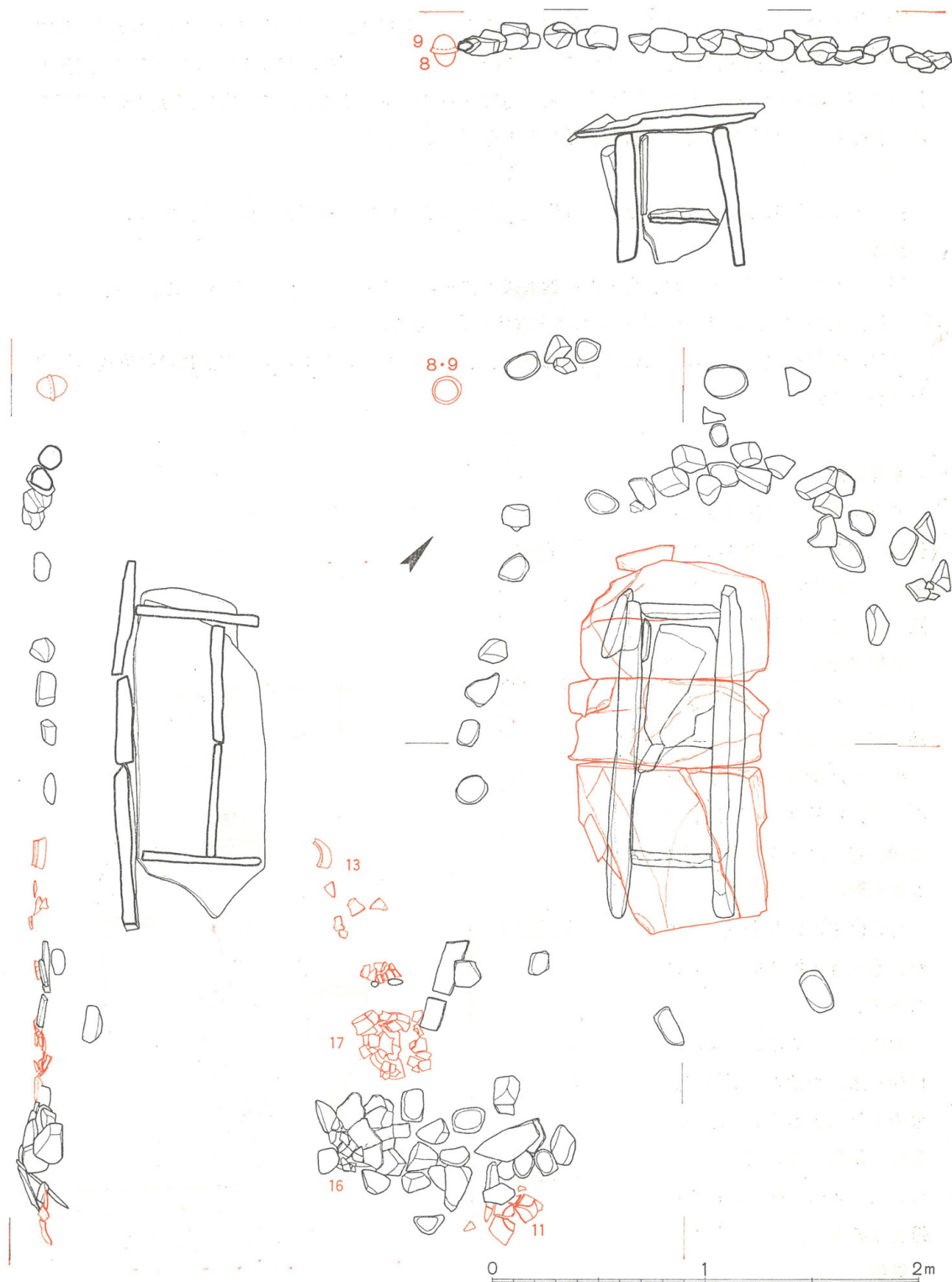
第5図 2号石棺出土玉類実測図

### 3号石棺

2号石棺の南側6.2mの位置で発見され、石棺の周囲を人頭大の礫がとりかこむ。礫群は東側と南側にかけて一部を欠損するが、東西2.5m、南北1.8mの長円形を呈し、その礫より約30cmの深さで石棺の蓋石が露呈した。

石棺は主軸をN-49°-Wにとり、蓋石は三枚の板石からなる。





第6図 3号石棺実測図

石棺内部の大きさは、長軸 1.1 m、幅 35 cm、深さ 35 cm を測り、東西の小口は各 1 枚の板石をたて長に用いて側壁の内側にはさまれている。側壁はやや厚手の板石それぞれ 1 枚からなるが、南側の側壁は西側で 35 cm × 45 cm 大の板石を小口との間に置いて空間をうめている。床はほぼ同大の板石 2 枚を使用して床面とし、碧玉製管玉、鉄鏃が 1 点ずつ出土した。

#### 管玉

長さ 6 mm、径 3.5 mm、孔径 1.2 mm、孔は片面穿孔である。材質は碧玉製で緑色を呈する。

#### 鉄鏃

刀部と茎の先端部を欠くが、有茎の柳葉式に属する。身の長さは復原で 8 cm となり、身幅 1.85 cm、厚さ 0.4 cm を測る。断面は凸レンズ状をなす両丸造りである。

茎は先端部を欠くが、幅 0.4 cm、厚さ 0.3 cm で、断面は長方形をなす。茎の表面には桜皮状の樹皮が巻かれている。

#### 4 号石棺

発見する過程で蓋石や東側側壁等がかなり破壊された。他の石棺群とはやや離れた位置で D-2 区にある。

主軸方位 N-58°-W で、棺内部の大きさは長軸 185 cm、幅 30~35 cm、深さ 35 cm を測る。

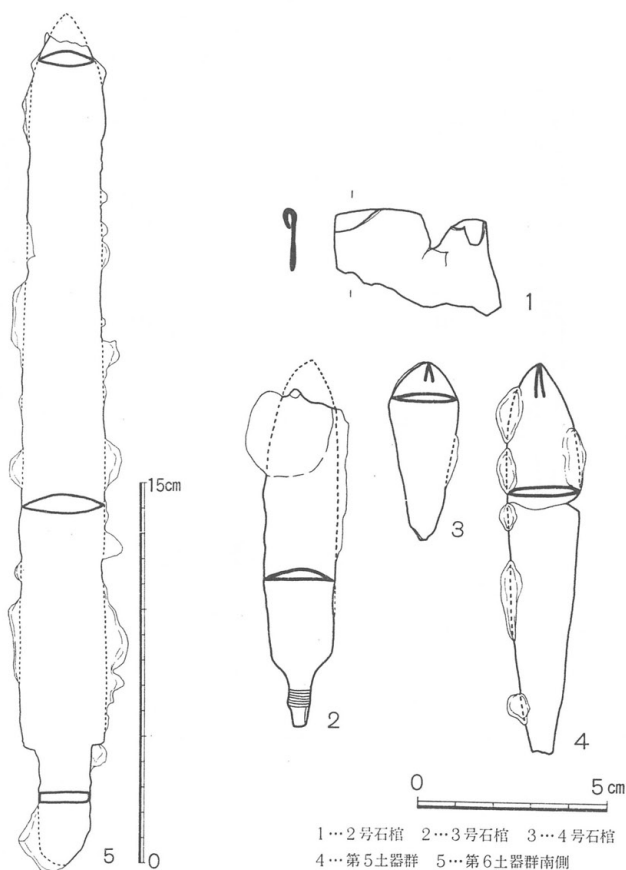
小口石は東西各 1 枚の石材をたて長に用い、側石は北側で 60 × 40 cm のほぼ同大の石材 6 枚をたて長に用いている。

棺床は 2 枚の石材を残すが、本来は 3 枚を用いたものである。

頭位については、西側の小口や棺床、側壁等の石材が、東側より大きめでやや厚手のものを使用していることから、西側頭位と推測される。遺物は鉄鏃 1 点が出土した。

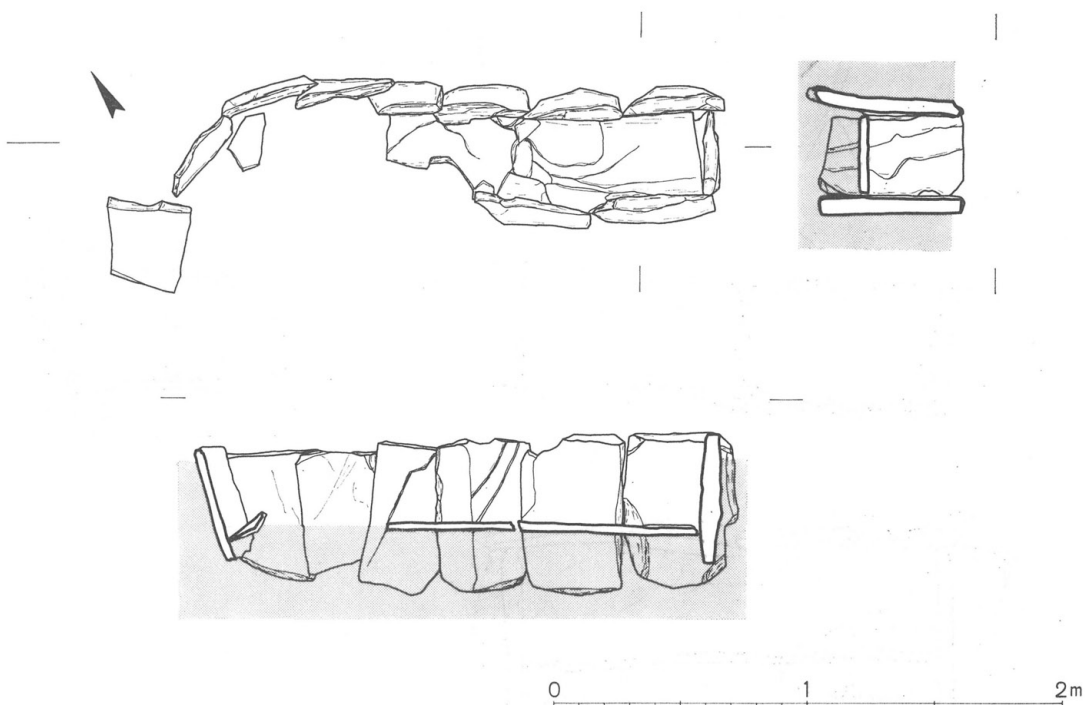
#### 鉄鏃

先端部近くに最大幅をもつ



第 7 図 出土鉄製品実測図

平根式鉄鍔である。断面形は薄い凸レンズ状をなす。茎は折損している。刃部長4.6cm、最大幅1.9cm、最大厚0.2cmを測る。



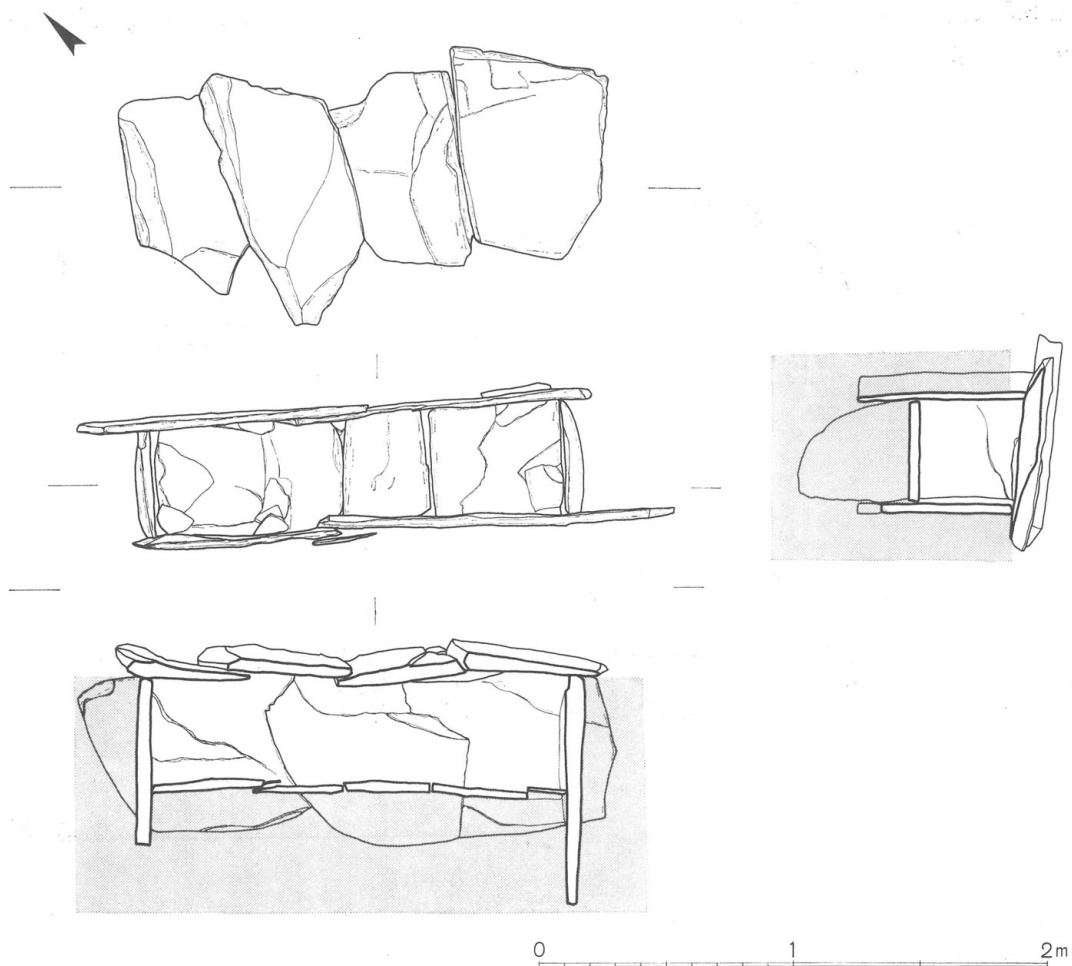
第8図 4号石棺実測図

### 5号石棺

4号と2号石棺のほぼ中間D-1区で検出され、主軸方位N-46°-Wである。

蓋石は、厚さ5～8cmの板石4枚からなり、棺の規模は長軸1.6m、短軸40cm、深さ40cmを測る。小口は側壁の内側にはさまれて、それぞれ1枚をたて長に用いている。側壁は各2枚からなり、南側の接合部は25×40cm大の板石で補強している。

床は4枚の板石が整然と敷かれていたが、遺物は発見されなかった。



第9図 5号石棺実測図

## 2 その他の遺構

### (1) 第1集石遺構

2号石棺と3号石棺のほぼ中央部で検出された。集石は石英岩の礫に若干緑泥片岩が混り長軸2m短軸1mの規模で楕円形に近いが、西側で途切れる。集石内の空間は1m×60cmを測り、礫の途切れた西側で二重口縁壺形土器が出土した。この集石遺構については2号石棺と3号石棺のほぼ中間であり、石棺の配置は相互に意識したものとみられることから、1号・2号・3号石棺などの埋葬主体の一環をなす遺構である可能性が強い。

### (2) 第2集石遺構

5号石棺の東北側2mで検出された遺構で、列石遺構と呼ぶ方が適切かもしれない。列石は一見長軸2m、幅70cmの長方形を呈しているが、南側で径50cmほどの空間をもつ円形を呈し、それに接

して北側に向って徐々に幅広になる二条の列石が連なる。そして円形部より鉄鏃1点を検出し、さらにその西側で供献用と思われる甕形土器が出土した。列石の状況および遺物の出土状態からみて、円形部に土墳墓を設け、それに連なる列石は一種の墓前の区画を示すものと考えられる。

#### 鉄鏃

身部長10.3cmの平根式鏃で、矢先部にややふくらみをもつ、断面は薄い凸レンズ状を呈する。最大幅2cm、最大厚0.25cmを測る。

#### (3) 1号壺棺

5号石棺と第2集石遺構の中間のやや北側寄りで検出された。壺は横置された状態にあり、その上半部は重機によって損壊をうけた。口縁部を打ち欠いた壺形土器で器高は53cmを測る。また胴部のやや上位には穿孔がみられ、単独の出土からも壺棺と考えるべきであろう。

#### (4) 2号壺棺

壺形土器と鉢形土器の組合せで、口縁部を打ち欠いた壺形土器を口縁部が大きく外反する鉢形土器が覆う。傾斜角は31度である。壺内からの遺物は検出されなかった。

#### (5) 3号壺棺

大形の壺棺で、ほぼ水平に横置されていた。2号壺棺の東側1mにあり、口縁部を打ち欠いて蓋には他の土器の破片を用いている。胴部に刻目を施す突帯をもち、底部は丸底の傾向を示す壺で、内部より管玉と小玉がそれぞれ1点検出された。

#### 管玉

碧玉製の管玉で、濃緑色を呈する。長さ1.1cm、径3.8mmを測る。孔は両端から穿たれている。

#### 小玉

ガラス製の小玉で、透明度のよくない青緑色を呈する。径6mmで、厚さ2mmを測る。

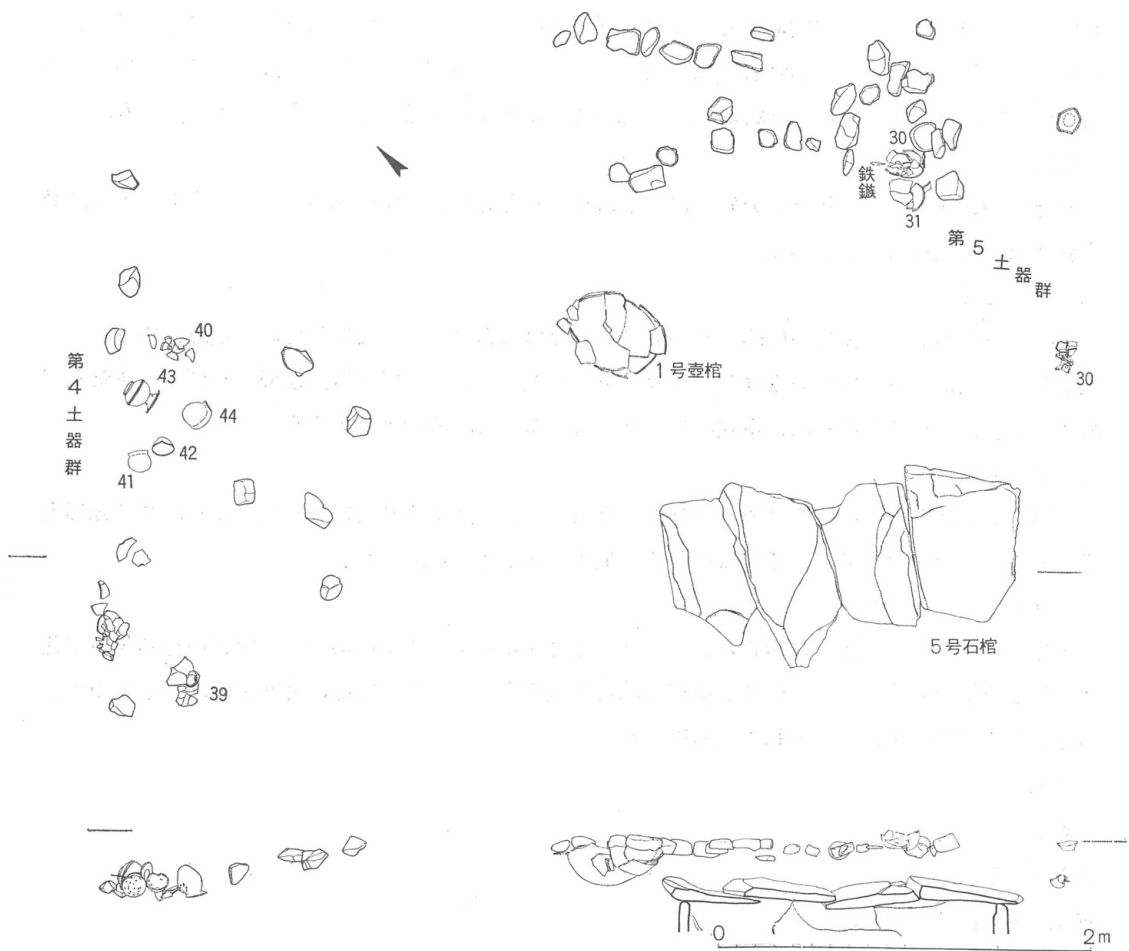
#### (6) 土器群

土器は出土状態から6群に大別される。

第1群は3号石棺の南側で礫に混って検出された。調査区の南西端であったために、拡張が不可能で全体的な広がりは不



第10図 第1集石遺構



第11図 5号石棺周辺の土器群

明であったが、二重口縁壺形土器、高坏、鼓形器台等が出土した。また、1群の北側では、丹の入った鉢に口縁部の開く鉢形土器を蓋とした土器が単独で検出された。これらの土器は、位置からして3号石棺に伴う可能性が強い。

**2群**は弥生中期の土器を主体としたもので、壺形土器や脚付鉢形土器等が出土している。

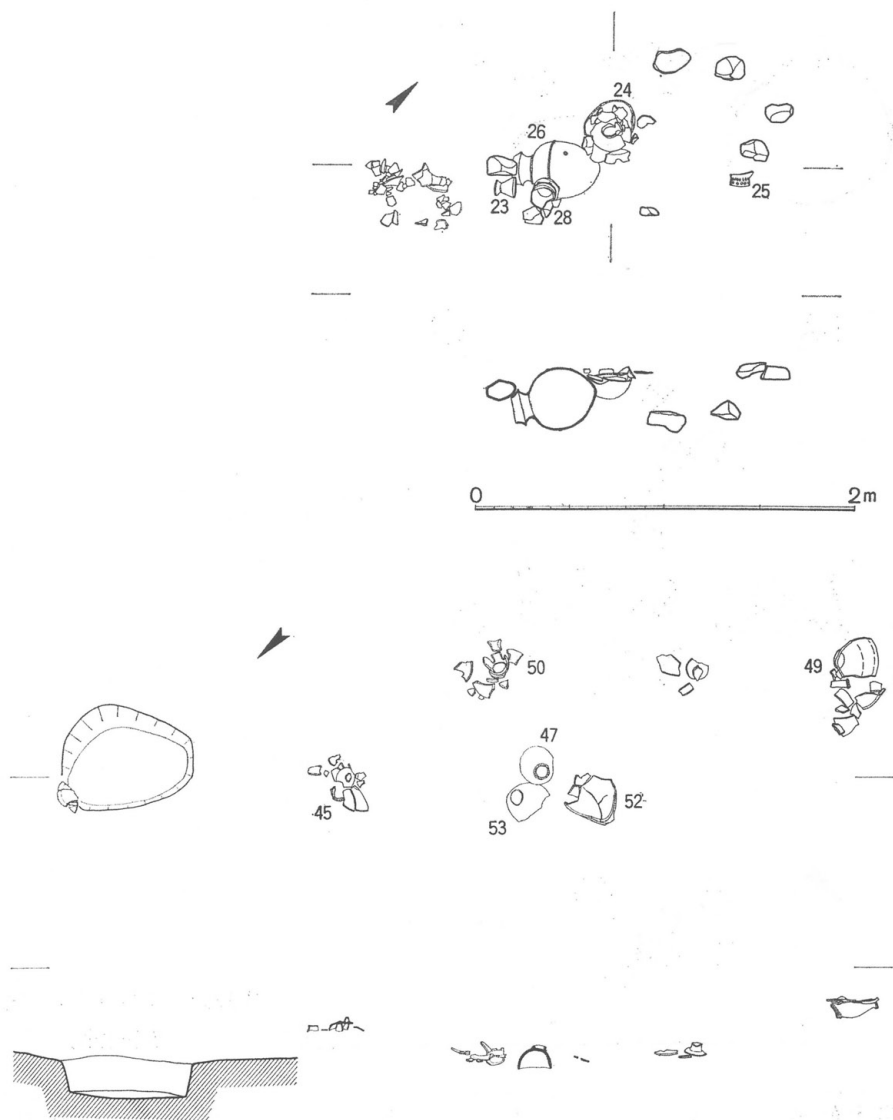
**3群、4群**からは多数の土器が出土した。3群では砲弾形の二重口縁を呈する壺形土器や脚付壺形土器、小形器台等があり、壺形土器は胴部に穿孔がみられる。

**4群**は短く直口する口縁を呈し、胴部に二条の突帯をもつ脚付壺や甕形、鉢形、小形壺形土器等多種類の土器がみられる。

**5群**は調査区のほぼ中央部にあたり、南側で鉢形土器や壺形土器がセットとして出土した。

**6群**は脚付鉢形土器や平底をなす壺形土器など弥生中期に属する土器が多く出土している。

**7群**は工事中に出土したものを採集した土器で、二重口縁壺形土器、高坏などが出土し、3群、4群とほぼ同時期と考えられる。

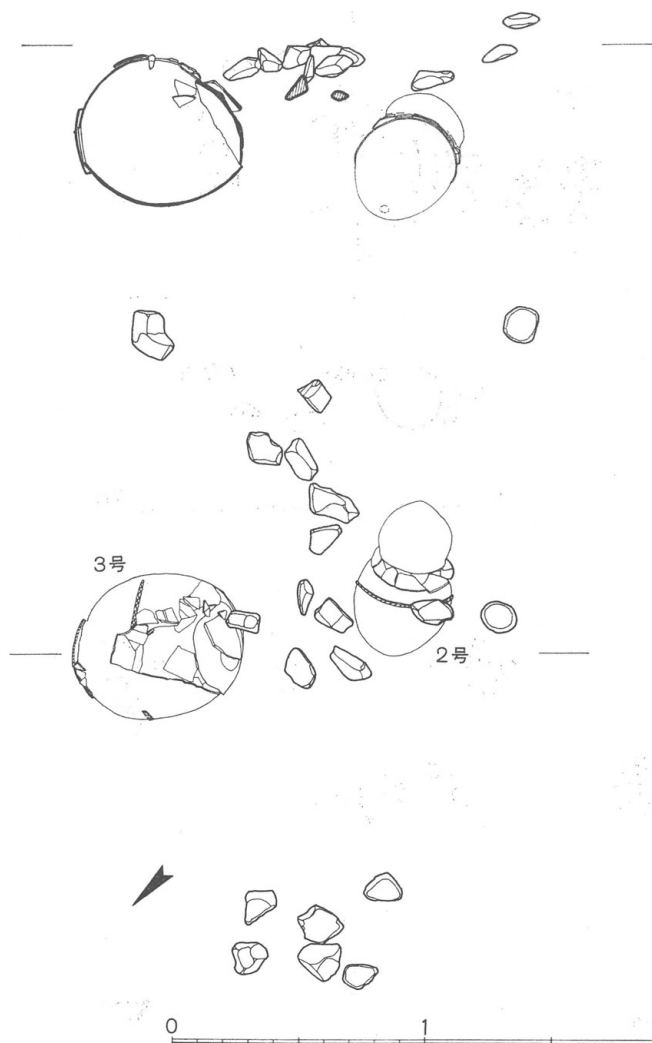


第12図 第3・第6土器群出土状態

なお、第6土器群の南側で鉄剣が単独で検出されたが、土壌等は確認できなかった。

#### 鉄剣

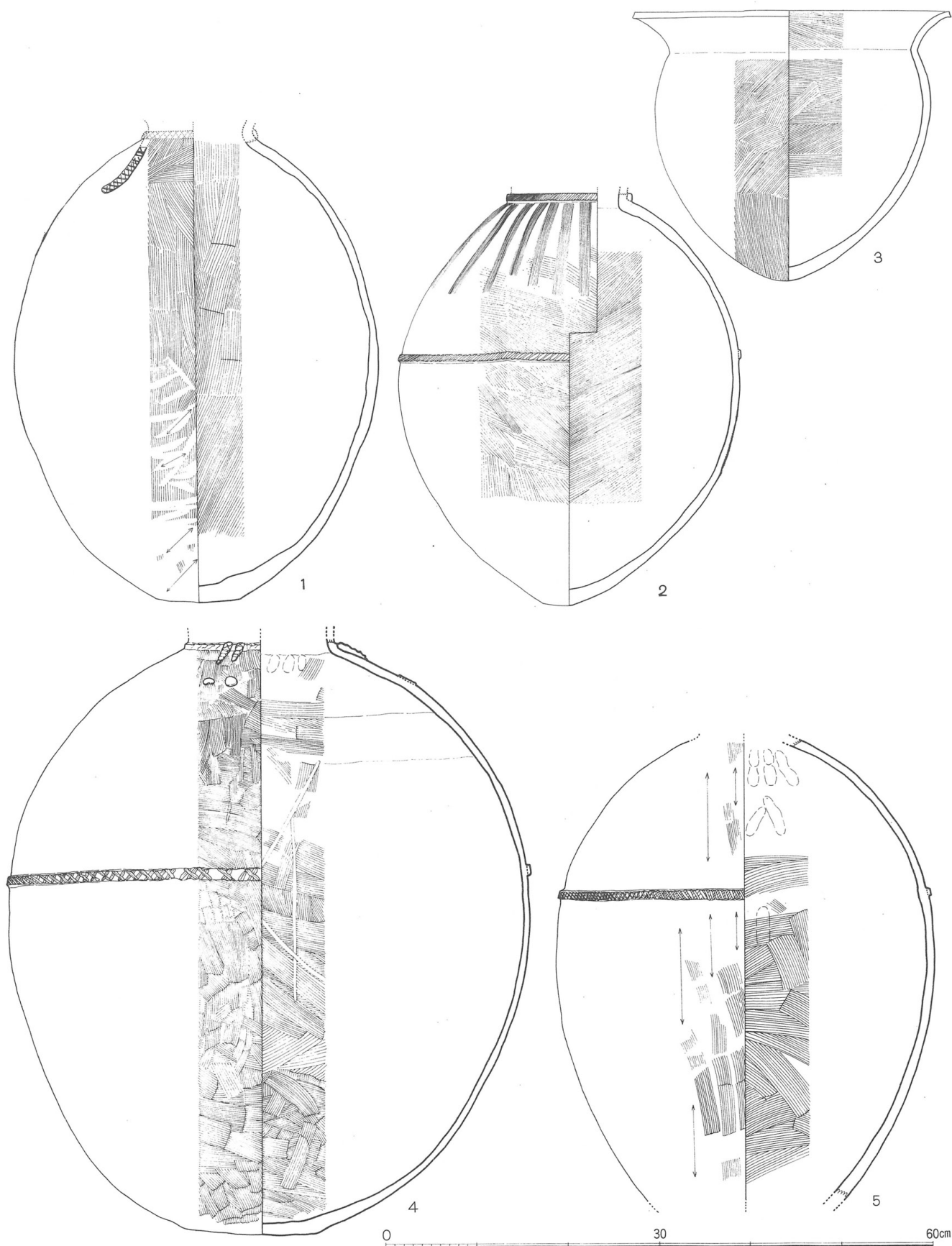
銹化が著しく、鋒先を欠損する。全長 33.8 cm、刃部長 29 cm、茎部長 4.8 cm を測る。幅は関部で 3.2 cm、茎部付根幅 2.1 cm を測り、関部端は明瞭に茎部と区別されている。鎬は認められない。茎部断面は長方形を呈し、目釘穴は不明である。



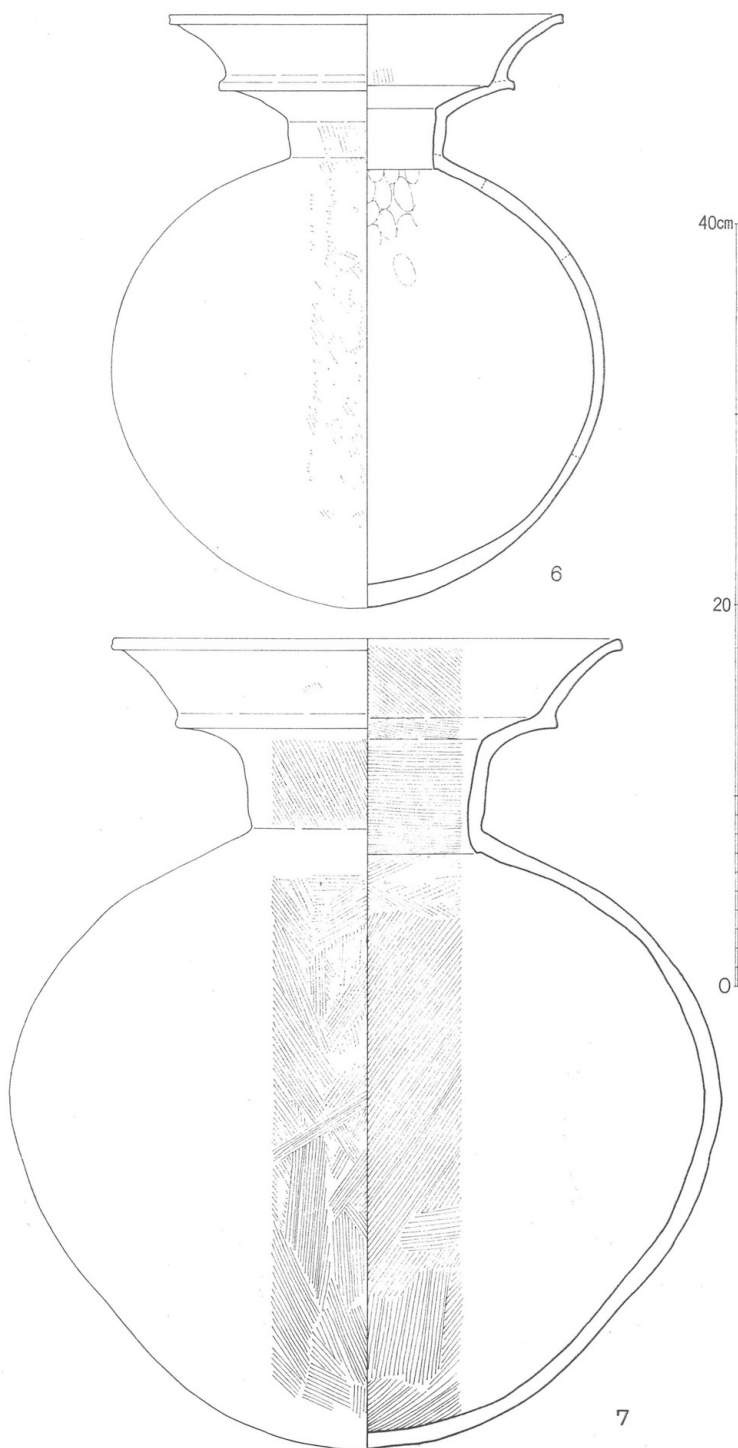
第13図 2号・3号壺棺出土状態実測図

番号	出土位置	形態	手法	胎土・色調	図版
1	D-O <sub>1</sub> 1号壺棺	長楕円形胴部で底部は若干平底が残る、頸部は刻目突帯が剝落 胴中位に焼成後の穿孔あり	内外面ともハケ目、外面下半部はヘラ研磨	砂粒を含む、黄褐色、堅緻	
2	D-1 2号壺棺	胴部ややふくらみ底部はほぼ丸底、胴部肩に装飾的ハケ目（3とセット）	内外面ともハケ目、外面縦方向のヘラ研磨、底部付近はヘラナデ状	砂粒を含む、黄褐色、堅緻	
3	〃	口縁が大きく開く鉢形土器（2とセット）	内外面ともハケ目	砂粒を含む、黄褐色、堅緻	3
4	D-1 3号壺棺	胴部がふくらむ大形壺、頸部は刻目のない三角突帯で4ヶ所に小棒状および円形の貼付がある 底部やや平底が残る	内外面ともハケ目、内面はやや粗い、内面上半にヘラ工具のナデ痕	砂粒を含む、黄褐色、堅緻	
5	〃	4の口縁部を覆っていた土器片の復原図、長楕円形胴部	内外面ともハケ目、外面は縦方向のヘラ研磨	砂粒を含む、黄褐色、堅緻	





第14図 壺棺実測図 (1/6)



# 土器説明

出土位置 D-O<sub>2</sub> 第1  
集石遺構

形態 二重口縁壺形土器  
(24)と酷似する、口縁部立  
上りと頸部との接合部が  
鏝状に張り出す。胴部は  
球形に近い

手法 口縁部外面ハケ痕  
内外面ナデ、胴部外面は  
ハケ調整ののち部分的に  
ナデ、内面はヘラナデ、  
肩部内側指圧痕

胎土色調 砂粒を含む、  
黄褐色、堅

出土位置 2号石棺付近

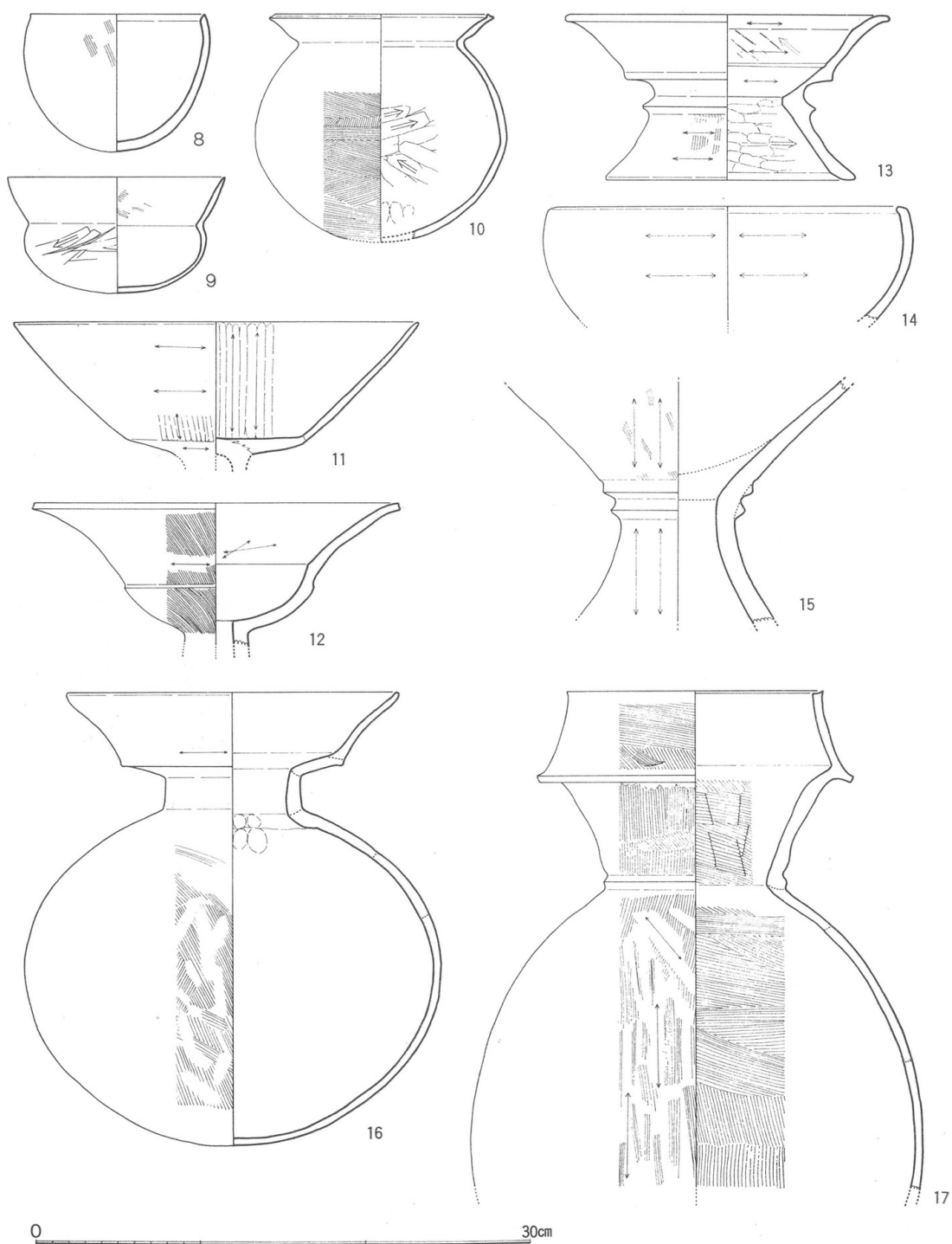
形態 大形2重口縁壺形  
土器、頸部はやや上に開  
き気味、扁球形胴部

手法 内外面ともハケ目

胎土色調 砂粒多混、黄  
褐色、堅

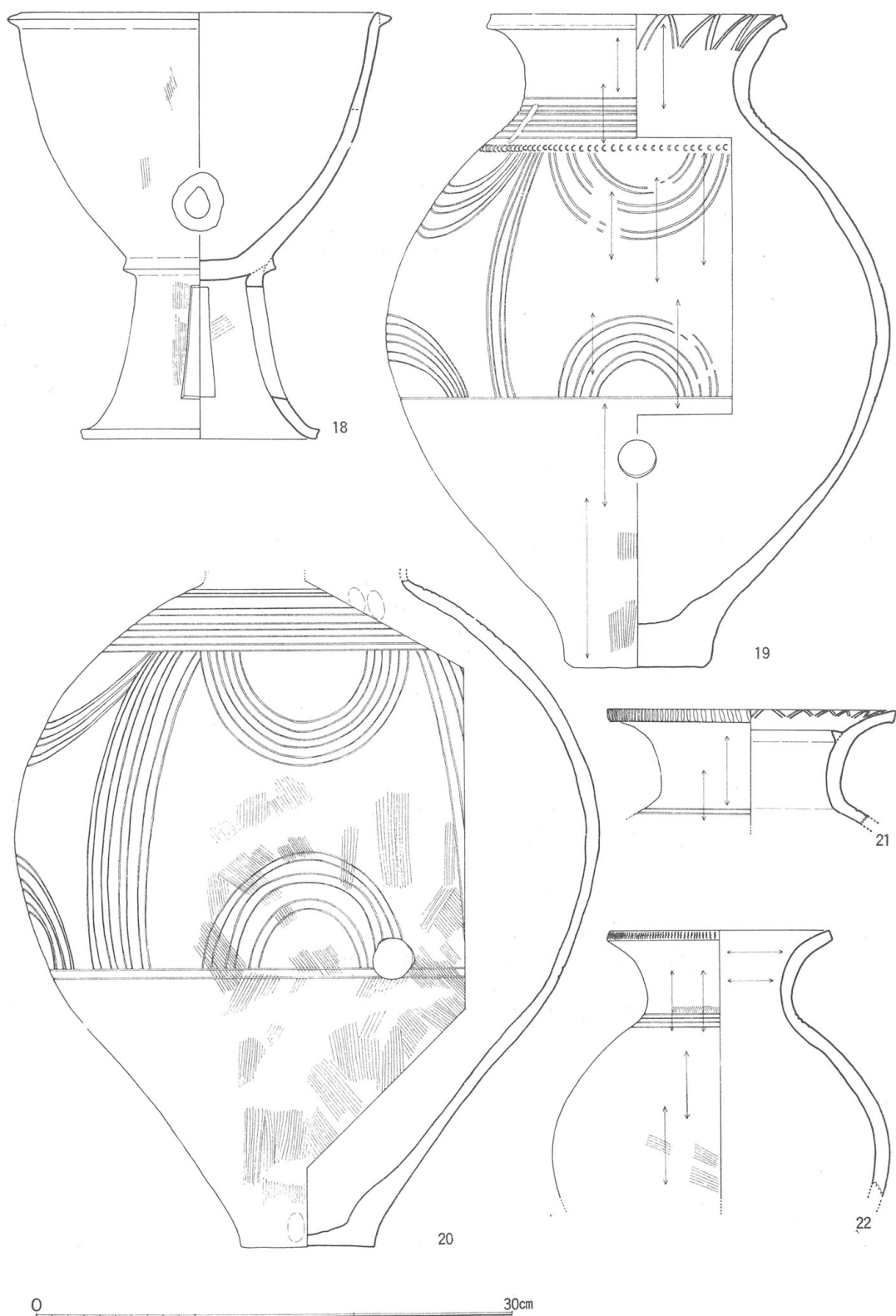
図版 13

第15図 1区出土土器実測図(1) (1/4)



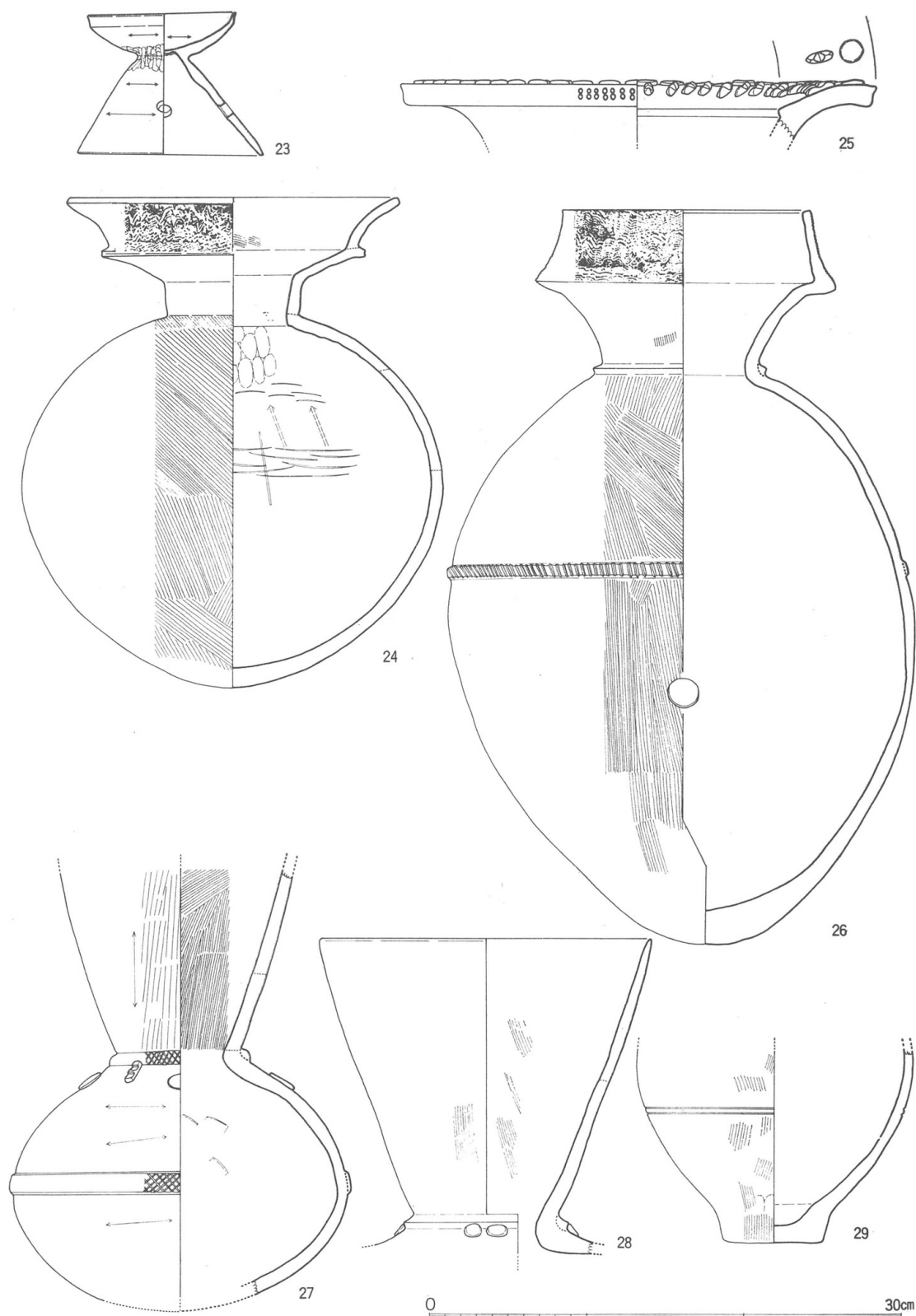
第16图 1区出土土器实测图(2) (1/4)

番号	出土位置	形態	手法	胎土・色調	図版
8	3号石棺周辺 第1土器群	口縁部でやや内湾する小形鉢形土器（9とセット）	外面ハケ目残る、ヘラ先端による細いヨコ条痕、内面ナデ	砂粒若干含む、黄茶色、堅、外面丹塗り	13
9	〃	口縁部の開く鉢形土器、器壁は薄くつくりは丁寧	内面は口縁部のみハケ目が残り全体ナデ調整、体部外面はヘラ削り	砂粒若干含む、黄褐色、堅	13
10	〃	球形胴部をもつ小形甕形土器、口唇端上面に小突出部	胴部内面はヘラ削りしたのち上半はナデ仕上げ、底部付近指圧痕、外面は肩部までヨコナデ、以下はハケ目	砂粒若干含む、黄褐色、堅	
11	〃	薄手で直線的に開く大形坏部をもつ高坏、口径24.5cm	坏部内面は広幅（3～4mm）のヘラ研磨、外面は広幅ヘラ研磨のあとヨコ方向の細い条痕状研磨、坏部外底はその逆	胎土精良、茶色堅	13
12	〃	半球形状の底部と外反する長い口縁部によって坏部が構成される、坏底部は本来閉塞があったもの	内面はヨコナデのあと外反する口縁部のみ粗雑な細い条痕状研磨、外面はハケ目、口縁部・坏部の境のくびれ部のみヨコ条痕状研磨	砂粒若干含む、茶色、堅	13
13	〃	鼓形器台、口径19.6cm、高さ10cm	内側上半部は中途をわずかに削ったのちヨコナデし、雑なヨコ方向研磨を施す、下半部はヘラ削りのまま、外面はハケ目調整のあとヨコナデし部分的にヨコ研磨	胎土精良、黄茶色、やや堅	13
14	〃	口径21.6cmの半球形鉢形	内外面とも横方向のヘラ研磨	胎土精良、内外面丹塗り、堅	
15	〃	脚台のつく鉢ないし壺形土器、脚台と体部は連続してつくられくびれ部に粘土を充填して底部をつくる	外面ハケ目のあとタテ方向ヘラ研磨	砂粒を含む、外面丹塗り、堅	
16	〃	二重口縁をもつ壺形土器、口縁部はやや外反し、頸部は短かく直立する、胴部はわずかに扁球形となる、口唇端部上面に部分的に突出部あり	口縁部は内外面ともヨコナデ、胴部は外面が8ケ目のあと粗雑なヘラ研磨、内面はヘラ削りのあとナデ	砂粒を若干含む、黄褐色、堅	13
17	〃	内傾する口縁部をもつ二重口縁壺形土器、頸部と胴部の境に三角突帯の痕跡をとどめる。口縁端部と屈曲部はシャープな仕上げをする	内外面ともハケ目調整を行う、のち口縁端付近はヨコナデ、胴部外面は粗雑なヘラ研磨を施す	砂粒を含む、黄褐色、堅	



第17图 1区出土土器实测图(3) (1/4)

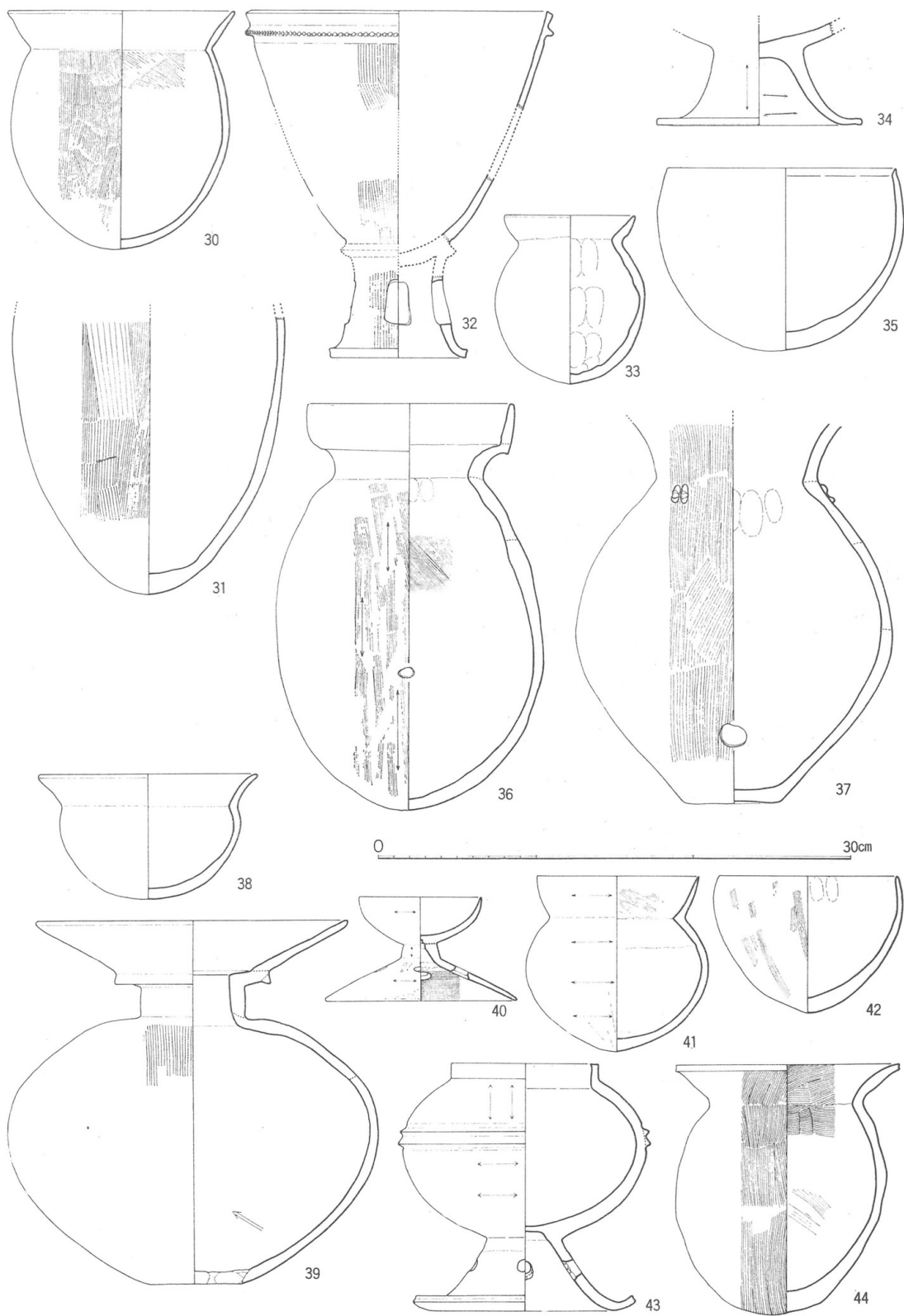
番号	出土位置	形態	手法	胎土・色調	図版
18	E-O <sub>1</sub> 第2土器群	脚台付鉢形土器、胴部下位に焼成後の穿孔あり、脚台の方形透しは4孔	外面はハケ目調整、あと研磨か、内面はナデ	石英大粒砂粒を含む、黄褐～赤褐色、堅	13
19	〃	胴部最大径を中位にとる壺形土器、外反する口唇内側・頸部・胴上半部に半截竹管による複線鋸歯文、平行文、先端による刺突文、弧文を配す、胴下半に焼成後の穿孔あり	外面はハケ目調整半截竹管による施文ののちタテ方向ヘラ研磨、内面は口縁部を研磨するほかはナデ調整	砂粒を含む、赤褐～茶褐色、堅	
20	E-1 第2土器群縮	胴部最大径をほぼ中位にとる壺形土器、胴部径に比して胴部下半～底部にかけて縮減率が大きい、半截竹管による平行文、弧文を描く、胴下半に2～3の焼成後の穿孔がある	外面ハケ目、底部周辺に指圧痕、内面ナデ、肩部に指圧痕	石英大粒砂粒を多混黄褐～赤褐色、堅	
21	E-O <sub>1</sub> 第1土器群	壺形土器の口頸部、外湾しやや伸び気味、口縁内側に半截竹管による複線鋸歯文を施し、そのやや下位に三角の突帯を貼付してめぐらし一方のみ注ぎ口を設けている、口唇端部には木口押捺を行う、肩部には平行文がある	外面はタテ方向のハケ目調整ののちヘラ研磨、内面はヘラナデ状を呈す	砂粒を若干含む黄褐色、堅	
22	〃	小形壺形土器、口唇端部に半截竹管文先端による刺突文、肩部に平行文を施す	外面ハケ目調整ののちタテ方向ヘラ研磨、内面は口頸部がヨコ方向のヘラ研磨、胴部はナデ	砂粒を若干含む茶褐色、堅	



第18图 1区出土土器实测图(4) (1/4)

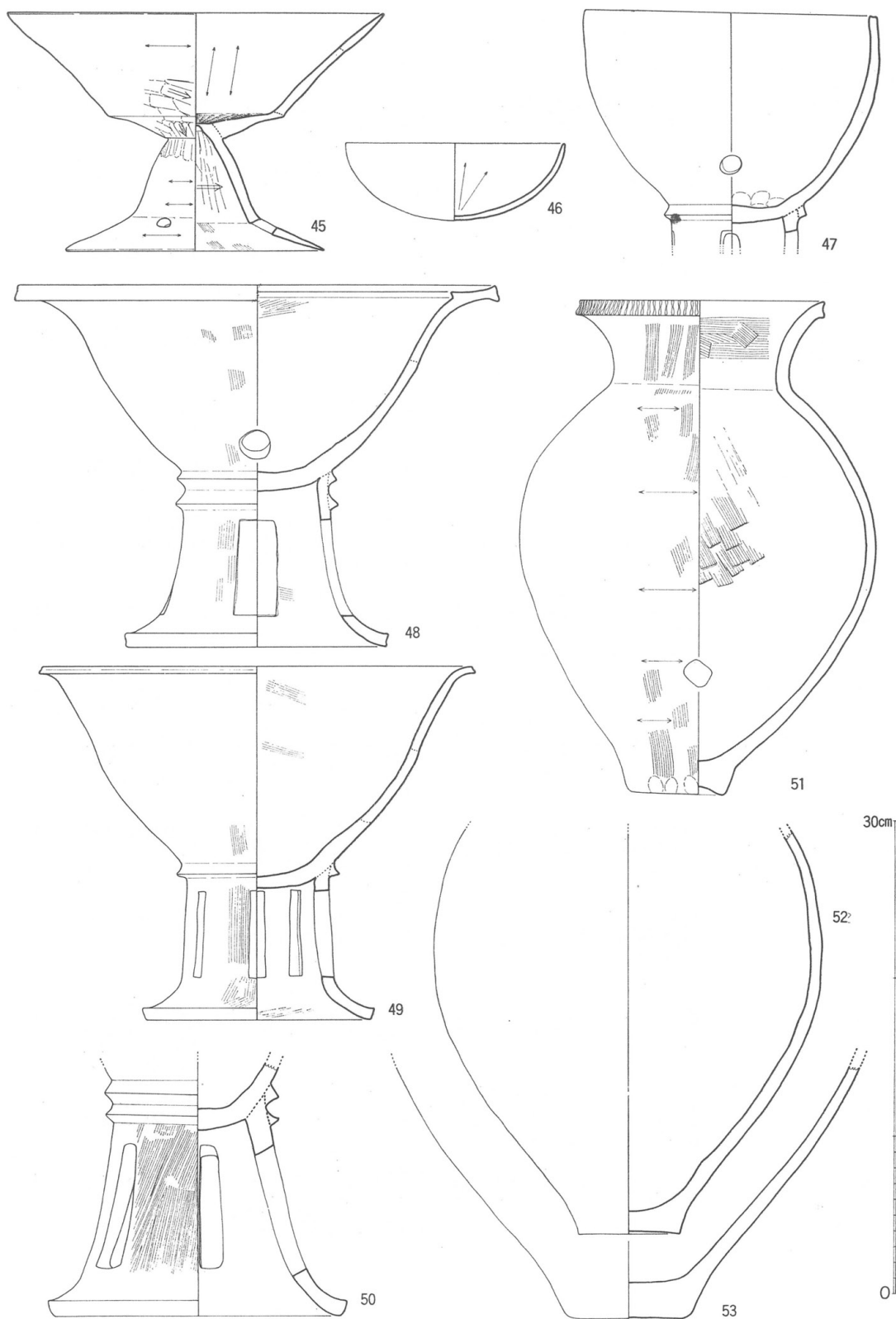
番号	出土位置	形態	手法	胎土・色調	図版
23	E-O <sub>1</sub> 第3土器群	小皿に円錐台形の脚合がつく小形器台形土器、脚合にやや歪みがあるがつくりは丁寧、脚合中位に円孔4	外面は皿部と脚合の接合ヶ所付近は上下からへら削り他はナデ仕上げののち細い条痕状の研磨、皿部内面はナデのあと中位～上位を粗雑に条痕状の研磨を施す脚合内面はナデ	胎土に砂粒をほとんど含まない黄褐色、堅	13
24	〃	二重口縁壺形土器、頸部は上に向ってやや開く、外反する口縁部は外側に波状文が上下2単位めぐらされる口縁の接合部位が外側に鐙状に突出する、球形に近い胴部はやや厚手、つくりは丁寧である。(6)と酷似する	外面は口頸部はナデ、胴部はハケ目、内面は口縁部ハケ目痕をのこすナデ、胴部は幅広のへらナデ(中位の上下にへらの止め痕あり)肩部内側に指圧痕	細砂粒多混、赤褐～黄褐色、堅	13
25	D-O <sub>1</sub> 第3土器群	壺形土器口縁部、鋤先状をなす口縁部の上面に二種の貼付文をめぐらし、口唇端面に上下2連の小円文刺突がある	内外面ヨコナデ	砂粒を含む、黄褐色、堅	
26	E-O <sub>1</sub> 第3土器群	二重口縁壺形土器、倒卵形の胴部最大径よりやや上に刻目突帯頸部との境いに低い三角突帯をもつ、頸部と口縁立ち上りの高さの比はほぼ1:1、口頸部の屈曲端部および口縁端部の仕上げは鈍い、胴下半部に穿孔1	外面は頸部から胴部にかけてはハケ目、底部付近はへらによるナデツケ、内面および口縁部はナデ、口縁外面に施した波状文は上下3単位	砂粒を含む、黄褐～赤褐色、堅	
27	第3土器群	長頸壺形土器、扁球形胴部に上部に広がる円筒形の口頸部をもつ、胴中央・頸部と境いに刻目突帯をめぐらし、肩部に円形・小棒状貼付文各4を施す	外面へら研磨、内面は頸部・胴部ともハケ目のあとナデ	細砂粒・輝石多混、丹塗り、堅	14
28	E-O <sub>1</sub> 第3土器群	長頸壺形土器の口頸部、上部にしたいに直線的に広がる、胴部との境いには低い三角突帯がめぐり2個単位の円形貼付が4つ配される	内外面ハケ痕、外面はのちへら磨きか	細砂粒多混、丹痕、黄褐色、堅	
29	第3土器群	小形壺形土器の底部、平底胴部中位よりやや下に平行沈線がめぐる	外面はハケ目のあとへら研磨、内面ナデ	砂粒を含む、暗赤茶色、堅	





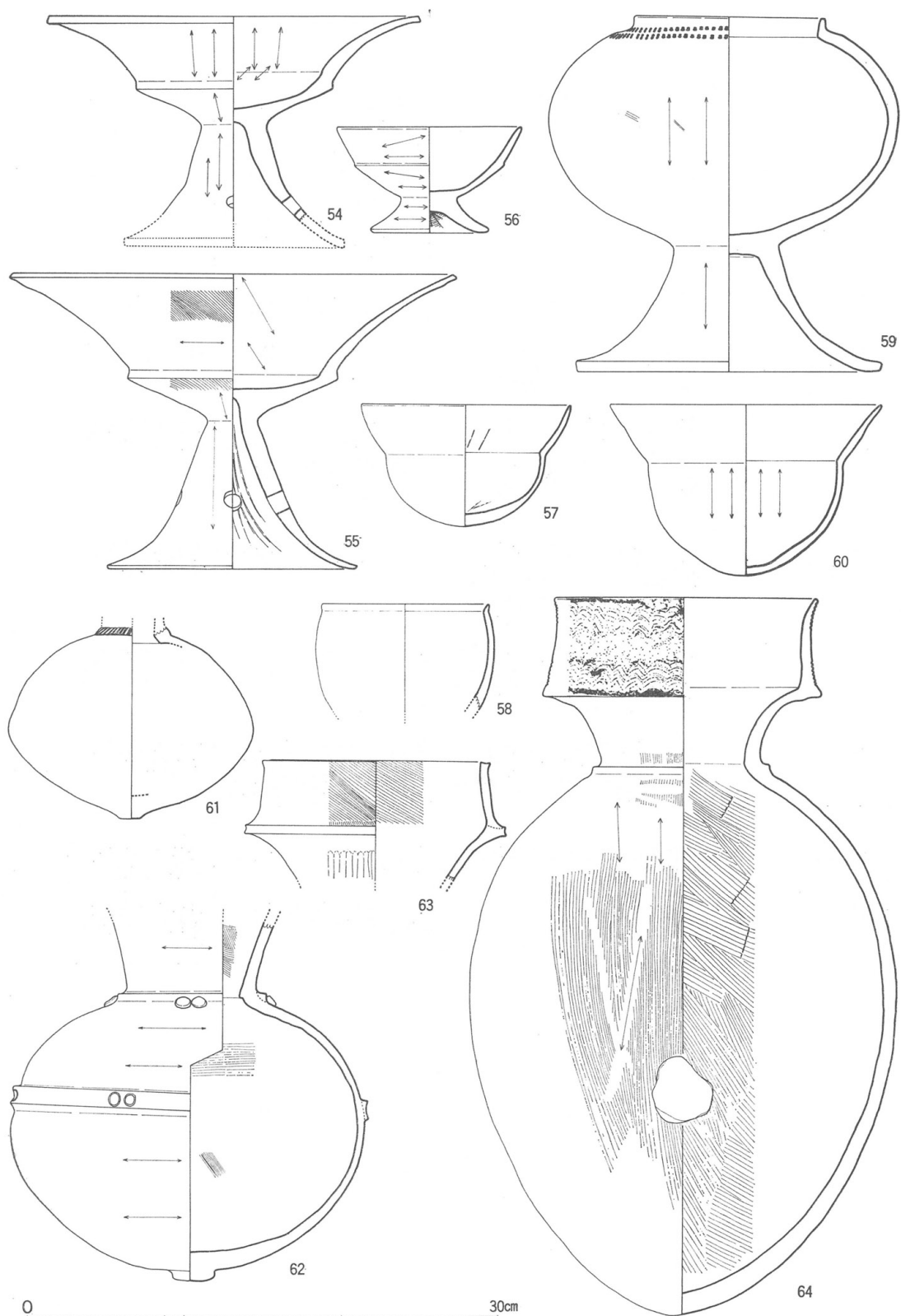
第19图 1区出土土器实测图(5) (1/4)

番号	出土位置	形態	手法	胎土・色調	図版
30	D-O <sub>1</sub> 第5土器群 31と同位置	小形甕形土器、楕円形の胴部にやや立ち気味のくの字口縁がつく	内外面ともハケ目、内部下半部はナデ、口縁部はヨコナデ	砂粒を含む、黄褐色、堅	13
31	〃	甕形土器胴下半～底部、丸底	外面ハケ目、底部付近ナデ 内面ナデ	砂粒を含む、黄褐色、堅	
32	D-O <sub>1</sub> 第5土器群	下城タイプの甕形土器の下部に低い脚台をつけたもの脚部の方形透しは4	外面ハケ目、内面ナデ、口縁下位の突帯の形態・刻みとも下城タイプの甕特有のもの	細砂粒含む、赤褐色(一部黒色)堅	
33	D-1 第5土器群 37まで一括	小形甕形土器、凹凸が多い	内外面ともナデ、内面指圧痕多	砂粒を含む、黒褐色(一部黄褐色)堅	14
34	〃	脚台部	内外面とも細い条痕状ヘラ研磨	細砂粒を含む、黄褐色、丹痕、堅	
35	〃	鉢形土器、口端部斜め仕上	内外面ともナデ	砂粒多混、赤褐色、堅	14
36	〃	長胴の二重口縁壺形土器、口頸部短かく、口縁部やや開き気味に立ち上がる、胴部下位に穿孔	胴部は内外面ともハケ目調整のち外面は粗雑なヘラ研磨、内面はナデ、口頸部は内外面ともナデ	砂粒を含む、黄褐色、堅	14
37	〃	壺形土器、胴部最大径がやや下位にある、底部近く穿孔、肩部に2個単位の貼付文5ヶ所	外面はハケ目、内面はナデ 内面肩部指圧痕多	砂粒を含む、黄褐色、堅	14
38	〃	小形鉢形土器	内外面とも平滑仕上げ、口縁ヨコナデ、つくり丁寧	砂粒を含む内外面丹塗り、堅	14
39	〃	二重口縁壺形土器、扁球形胴部と外傾度の強い口縁部の形態に特徴、底部に焼成後の穿孔	口頸部は内外面ともナデ、胴部は外面ハケ目痕、内面は下半部に削り痕あと平滑ナデ	砂粒を含む、茶褐色、やや堅、器面あれる	14
40	D-O <sub>1</sub> 第4土器群 44まで一括	小形高杯、小形の皿に大きく開いた脚台がつき安定感がよい、つくりが丁寧、脚台部円孔4	皿部内面ナデ、脚台部内外面細いハケ目のち、外面は皿・脚ともヘラ研磨、脚柱部付近ヘラ削り痕	胎土精良、赤茶色、堅	14
41	〃	鉢形土器、口縁部やや内湾する底部はわずかに尖り気味、つくりが丁寧	外面は細い条痕状ヨコ方向研磨、胴部下半はヘラ削り痕、口縁内側は細いハケ目 胴内面は平滑仕上げ	胎土精良、赤茶色、堅	14
42	〃	鉢形土器、口縁やや内湾し先端丸くおさめる、底部若干尖り気味	外面ハケ目のちタテ方向ヘラ研磨、内面ナデ、指圧痕	細砂粒多混、内側口縁付近から外面全体に丹塗り、黄褐色、堅	14
43	〃	脚台付短頸埴、均正のある姿・シャープなつくりの特徴がある脚台端反り上る、円孔4	外面タテ又はヨコ方向に細いヘラ研磨、内面ナデ	細砂粒多混、外面丹塗り、黄褐色、堅	14
44	〃	甕形土器、凹凸の多い長胴に大きく開いた口縁部をもつ、丸底	外面上部は細いハケ目、下部はやや粗いハケ目、一部ナデ、内面ハケ目、中～下部はナデ、底部指圧痕	砂粒多混、赤褐色、堅	14



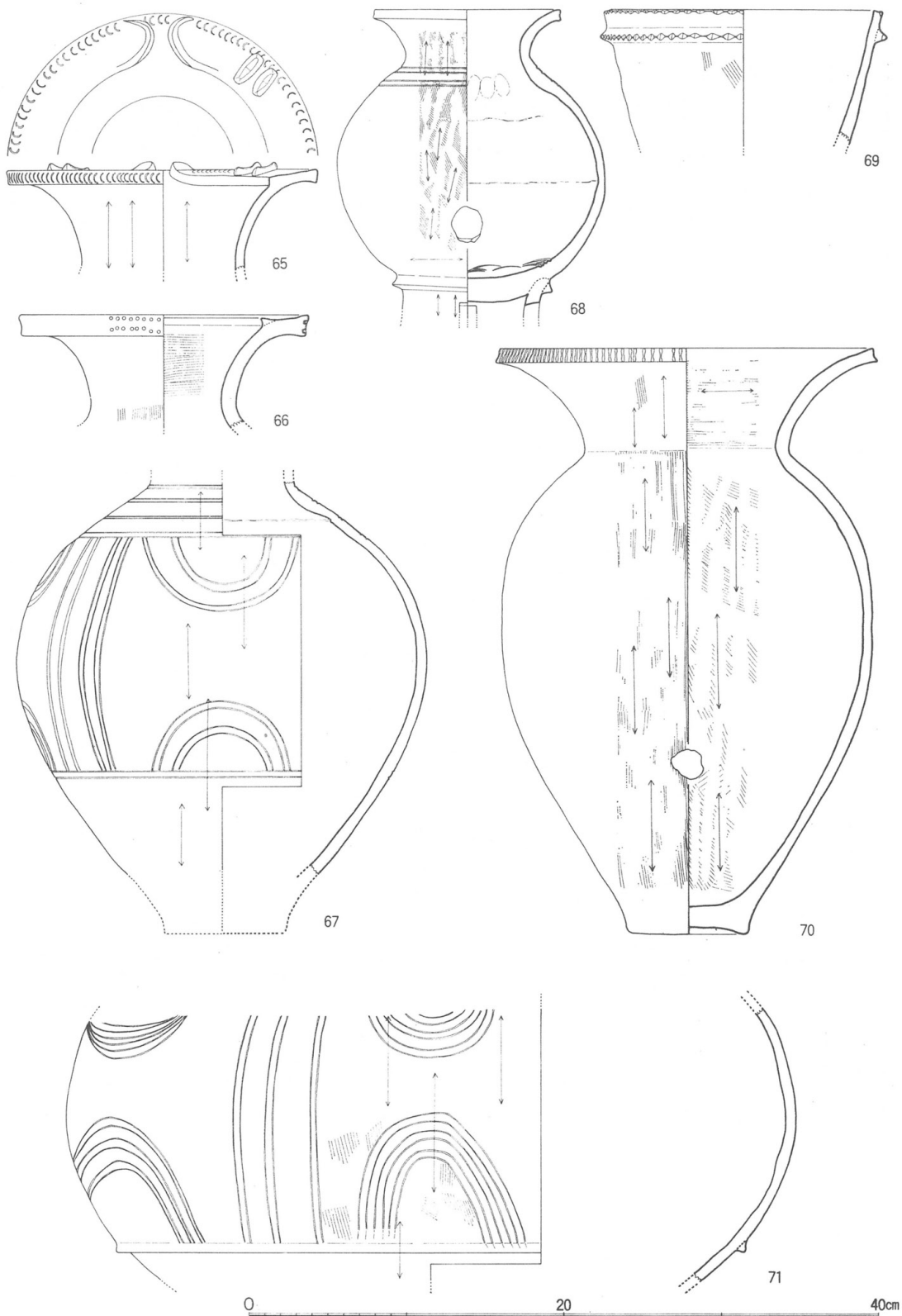
第20图 1区出土土器实测图(6) (1/4)

番号	出土位置	形態	手法	胎土・色調	図版
45	D-1 第6土器群	立ち上りの高い大形坏部を有する高坏、脚柱部は中位にややふくらみのある円錐台形によく開いた脚裾部がつき安定感がある 円孔3、口径24cm、高さ15.2cm	坏部内底はクモ巣状にハケ目あと放射状にヘラ研磨、立ち上り部は内面タテ方向ヘラ研磨、外面ヨコ方向に細い条痕状研磨、坏部下部と脚台との接合付近にヘラ削り、脚台外面はヨコ方向に細い条痕状ヘラ研磨内側は脚柱部が削り、裾部は細いハケ目あとナデ	胎土精良、赤褐色、堅	
46	C-1	薄手のつくりの坏	内外面ともヘラ研磨、内面は中心から放射状に行う	胎土精良、赤褐色、堅	
47	D-1 第6土器群	脚台付鉢形土器、脚台との接合部位に三角突帯をつける、胴部下位に穿孔、脚台に方形透し4	鉢内外面ともナデ、鉢内底は指圧痕	砂粒を含む、黄褐色、堅	15
48	C-1	脚台付鉢形土器、鋤先状口縁をもつ大形の鉢に安定感ある脚台がつく、接合部位に二段に三角突帯をめぐる、鉢下位に穿孔、脚台に方形透し4、口径30.9cm	内外面ともハケ目調整のちヘラナデ状の仕上げ、鉢内面は凹凸が多い、鉢外面上半部はヨコ方向ヘラ研磨、口縁鋤先状突出部のつくりが雑	砂粒・大粒砂粒を含む、茶褐色堅	
49	D-1 第6土器群	脚台付鉢形土器、47と形態上類似点が多い、外反する通有の口縁部をもつ大形鉢に脚台がつく、接合部の三角突帯は一条、穿孔は不明脚台の方形透しは6	内外面ともハケ目調整のち外面はヘラナデ状の仕上げ内面はナデ	石英砂粒多混、赤褐色、堅	15
50	〃	脚台付鉢形土器につく大形脚台部、脚裾に向って徐々に広がる形態をとる、接合部の三角突帯2条、方形透しは5	外面ハケ目調整	大粒砂粒多混、黄褐色、やや堅	15
51	C-1	壺形土器、胴部最大径をほぼ中位にとる、底部やや上げ底となる。胴部下位に穿孔、口縁端面に木口押捺	内外面ともハケ目調整、のち外面は丁寧なヨコ方向ヘラ磨き、底部指圧痕、内面中位は、ハケ目が削り状につくあと研磨か	砂粒若干含む、茶褐色、堅	
52	D-1 第6土器群	壺形土器胴部、胴部最大径ほぼ中位にとる	外面タテ方向ヘラ研磨、内面ナデ	砂粒若干含む、黄褐色、堅	
53	〃	大形壺形土器底部	外面ハケ目調整ののちヘラ研磨、内面ナデ	砂粒を含む、黄褐色(一部黒色)堅	



第21图 1区出土土器实测图(7) (1/4)

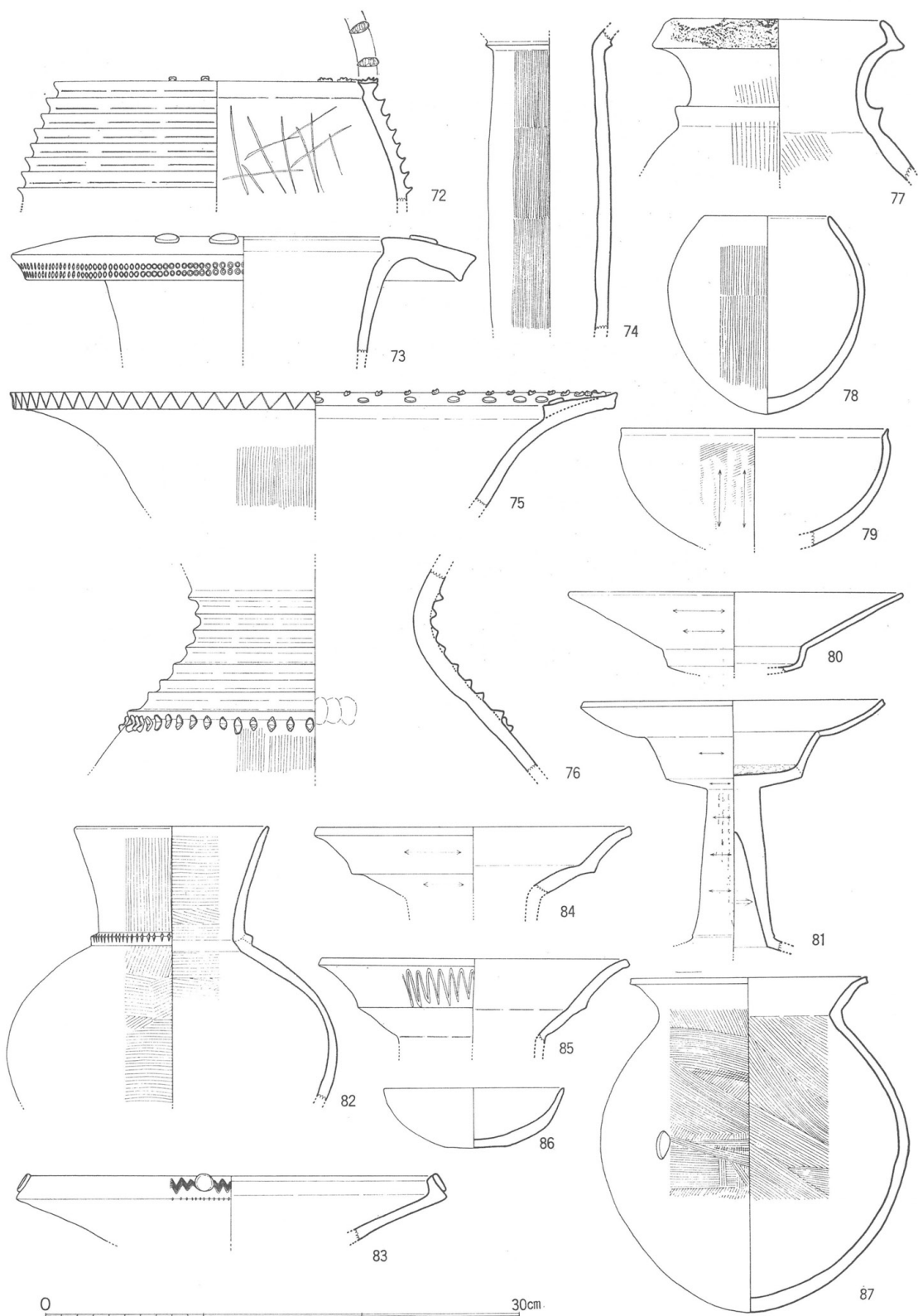
番号	出土位置	形態	手法	胎土・色調	図版
54	D-O <sub>1</sub> 第7土器群	高坏、外反するやや長目の坏部立ち上りと脚端までラッパ状に開く脚をもつ、脚に円孔4、口径23.8cm	坏部内外面とも各方向ヘラ研磨、坏内底にはハケ痕、脚外面はタテ方向ヘラ研磨内側ナデ	細砂粒を含む、脚内側を除いて丹塗り、黄褐色堅	15
55	〃	53とほぼ同形・やや大形の高坏、口径28.5cm、坏口縁部立ち上りが長い、脚部円孔4	坏部内外面ともヘラ研磨、外面はハケ痕残る、脚内面はしぼり痕がみられる	砂粒を含む、脚内側を除いて丹塗り、黄褐色、堅	
56	〃	小形高坏、口径11.8cm、高さ6.7cm、内湾する坏部外面中位に段をつくる、脚は短かく厚手	外面坏部、脚部とも細い条痕状ヘラ研磨、坏部内面はナデ、脚内側はクモの巣状のハケ目	砂粒を若干含む赤褐色、堅	15
57	〃	小形鉢形土器、口縁部やや内湾気味、薄手でつくりが丁寧	内外面ヘラナデ仕上げ、ヘラの止め痕がところどころにみられる	胎土精良、赤褐色、堅	
58	〃	小形鉢形土器・口縁端部を斜めに仕上げわずかに外反	内外面ともナデか	細砂粒多混、外面丹塗り、茶褐色、堅	
59	〃	脚台付無頸壺、扁球形の胴部にラッパ状に広がる脚台がつききわめて均正がとれて安定感がある、肩部に上下2連の小円文の刺突を2条めぐらす、つくりが丁寧	胴部ハケ目のあとタテ方向のヘラ磨き、内面ヘラナデ脚台外面タテ方向ヘラ研磨内側ヨコ方向ナデ	細砂粒含む、外面丹塗り、暗茶褐色、堅	15
60	〃	鉢形土器、外開きの口縁部は直線的で長い。	口縁外側ナデ、内面はヘラナデ、体部外面は上位がタテ方向ヘラ研磨、下位はタテ方向削り状、内面タテ方向ヘラ研磨	砂粒含む、赤褐色、堅	
61	〃	長頸壺胴部、扁球形胴部、小さい平底がつく、頸部との接合部に刻み目突帯をめぐらす	外面研磨、内面ナデ	砂粒を含む、外面丹塗り、堅	
62	〃	長頸壺、扁球形胴部、底部に円形突出部をつくる、胴部中位に6ヶ所の円文押捺がある平突帯頸部との接合部に三角突帯をめぐらしその下側に円文2個単位4を貼付する、薄手	外面ヨコ方向の細い条痕状研磨、頸部内面は細いハケ目、胴部内面はハケ調整のちナデ	砂粒を含む、外面丹塗り、堅	15
63	表 採	二重口縁壺形土器の口縁部、シャープなつくりで仕上げが丁寧	口縁立ち上りは内外面ともハケ目、頸部外面はタテ方向ヘラナデ、内面ハケ目あとナデ	砂粒若干含む、黄褐色、堅	15
64	D-O <sub>1</sub> 第7土器群	二重口縁壺形土器、倒卵形胴部に直立して長くのびた立ち上りの口頸部がつく、頸部と口縁立ち上り部の比率は後者が大きい胴部との接合部に三角突帯をめぐらす、胴下半部に穿孔	口頸部外面はナデ、内面はハケ痕、胴部は内外面ともハケ目、のち外面はヨコ又はタテ方向に粗雑なヘラ研磨、下半部はヘラナデ	砂粒を含む、黄褐色、堅	15



第22图 1区出土土器实测图(8) (1/4)

番号	出土位置	形態	手法	胎土・色調	図版
65	表 採	壺形土器の口縁部、口縁内側を鋤先状につくり注ぎ口を設けている、口唇端面と上面に半截竹管による刺突文、口縁上面に小棒状貼付2個を並列する	内外面とも研磨	石英・結晶片岩砂粒を含む、黄褐色、堅	
66	〃	壺形土器の口縁部、口縁内側を鋤先状につくる、口唇端面に上下2個の小刺突をめぐらす	外面ナデ、頸部下半にハケ痕、内側ヨコ方向ハケ目	砂粒を含む、黄褐色、堅	
67	〃	壺形土器の胴部、半截竹管による平行文、弧文を施す	外面タテ方向にヘラ研磨、内面ナデ（内面剥落多し）	砂粒多混、赤褐色、堅	
68	〃	脚台付壺形土器、ほぼ球形の胴部に短かく外湾する口縁部がつく、肩部に半截竹管による平行文を描く、脚台との接合部には三角突帯を一条めぐらす、方形透しは4	外面ハケ目のあと部分的にタテ方向ヘラ研磨、内面はヘラナデ、内底には脚台接合時の押さえ痕が残る、肩部内側は指圧痕、口縁部はナデ	砂粒を含む、茶褐色、堅	15
69	〃	下城タイプの甕形土器、口縁直下に三角突帯をめぐらし口唇部といっしょに刻みを施す	外面ハケ痕、内面ナデ	砂粒を含む、赤茶色、堅	
70	〃	口縁部が大きく開く長胴の壺形土器、口径24cm、高さ37.2cm、底部はやや上げ底で胴部下半部に穿孔がある	内外面ともハケ目、あとヘラ研磨	砂粒を含む、茶褐色、堅	
71	〃	胴部のはった壺形土器胴部、最大径46cm、半截竹管により平行文と弧文を描く、下部に三角突帯をめぐらす	外面ハケ目あと研磨、内面ナデ、指圧痕多し	砂粒多混、黄褐色、堅、丹痕跡	





第23图 1区出土土器实测图(9) (1/4)

番号	出土位置	形態	手法	胎土・色調	図版
72	表 探	鉢形土器の口縁部、外面全体を突帯で飾る、口唇上面に芋虫状の貼付をめぐらす	内面ヘラナデ	砂粒を含む、黄褐色、外面丹塗り、堅	
73	〃	鋤先状口縁部、口唇部がやや垂れ下る、上面に円形貼付、口唇端面に上下2連の竹管刺突文をめぐらす	内外面ナデ	石英砂粒含む、赤褐色、堅	
74	〃	長い脚柱部、中央部でややふくらむ、皿部との接合部に小さい三角突帯をつくる	外面ハケ目、内面ナデ指圧痕	砂粒を含む、丹塗り、堅	
75	〃	壺形土器口縁部、鋤先状につくり円形・楕円形貼付をめぐらす	外面ハケ痕、内面ナデ	砂粒を含む、黄褐色、堅	
76	〃	壺形土器頸部付近、三角突帯を8条めぐらし最下段に接するよう楕円形貼付を密にめぐらす	外面ハケ痕	砂粒を含む、黄褐色、堅	
77	〃	二重口縁壺形土器の口頸部肩部から頸へとなだらかに連続し、口縁立ち上りは短かく内傾度が著しい	内外面ハケ目、口縁部ナデ	砂粒多混、黄褐色、堅	
78	〃	鉢形土器、口縁部が大きく内湾する	外面ハケ目、内面ナデ	砂粒を含む、黄褐色、堅	15
79	〃	鉢形土器、口径17cm、口縁わずかに外湾させる	外面ハケ目のちタテ方向ヘラ研磨、内面ヘラナデ	砂粒を含む、淡黄褐色、外面丹塗り、堅	
80	〃	高坏、坏部が段皿状に屈曲し、口縁が直線的に長くのびる、薄手で極めて丁寧	内外面ともヨコナデののちヘラ研磨	胎土精良、赤褐色、堅	
81	〃	79と同タイプの高坏、口縁部が若干上方に湾曲する、脚柱部は長く、裾部で大きく屈曲し広がる、屈曲部に小さい段がつく	口縁部内面ヘラナデ、坏内底は中心部から外側ヘラナデ、脚柱部外面はタテ方向のケズリをしあと外面全体をヨコ方向の細い条痕状ヘラ研磨脚柱内側はヨコ方向削り	砂粒多混、茶褐色、堅	
82	〃	長頸壺形土器、口頸部は比較的短い、胴部との接合部に刻み目のある三角突帯をめぐらす	内外面ともハケ目、胴内部中位以下はナデ	砂粒を含む、赤褐色、堅	
83	〃	高坏形土器の口縁部、口縁端に短かい立ち上りを設け、その外面に波状文、円形貼付を施す	内外面ナデ	砂粒を含む、丹塗り、堅	
84	〃	二重口縁壺形土器の口縁部	外面ヨコ方向ヘラ研磨内面ナデ	砂粒を含む、茶色、堅	
85	〃	二重口縁壺形土器の口縁部屈曲部がなだらかに連続、一本線の波状文をめぐらす	内外面ともナデ	砂粒多混、茶色外面丹痕、堅	
86	〃	小形环形土器	内外面ナデ	砂粒を含む、茶褐色、堅	
87	〃	甕形土器、胴部やや長目の球形口縁端つくりシャープ	胴部上～中位は内外面ともハケ目、下位はナデ	砂粒を含む、茶褐色、堅	15

## 2 2区の調査

### 第2次調査の概要

浜遺跡では昭和50年度より継続されている大在地区区画整理事業に伴って、これまで弥生～古墳時代のカメ棺、石棺群とそれに共伴する多数の完形の土器が出土した。

第2次調査は、第1次調査の北側の江川放水路予定地を主としたもので、昭和51年10月25日から12月10日まで実施した。調査面積は800㎡にわたり、主として墓壙を覆ったとみられる礫群と若干のカメ棺および土器群を検出した。予備調査第一次調査で発見された組合せ式の箱式石棺は今回は、原位置では検出されず、わずかに移動した棺材の一部が見つかったにすぎない。

礫群は調査区中央の南から北東に弧状に分布するもので、砂丘の裾部に貼りつくように配置している。これらの礫は、大在海岸には産しないが、東部の佐賀関半島の北海岸に分布する小頭大の石英岩、蛇紋岩、結晶片岩の三種であり、いずれも外観が美しい石である。礫群はこれらの礫をとり混ぜて用い、十数個から数十個を単位とし、径1m内外の集石状、あるいは円～長円形の列石状をなしている。さらに土器は単独のカメ棺とされるものもあるが、そのほとんどはそれらの礫群に接して出土しており、供献用とみられる配置を示すものである。

以上の状況からして、第2次調査で検出された礫群は、砂丘のため明確な墓壙は検出できなかったが第1次調査で確認された、弥生時代中～後期の墓域の一部とみられる。その構成は、墓壙を覆ったとみられる集石群、墓壙を囲ったとみられる列石群に大別できるであろう。そしてあるものは壺形土器を内部主体とするものがあり、土器が供献されたものとみられる。

また、第2次調査区内の北側では、原位置をとどめる埋葬遺構が発見されなかったことからみて、ほぼ墓域の北の限界を示すものとみられる。

### (1) A区以北

近世以降の墓地あるいは、ミカン畑によって攪乱されており、人骨や土器が若干発見されたが、土器は流れ込みであり、人骨は、近世以降のものと考えられる。

### (2) A-1区の遺構

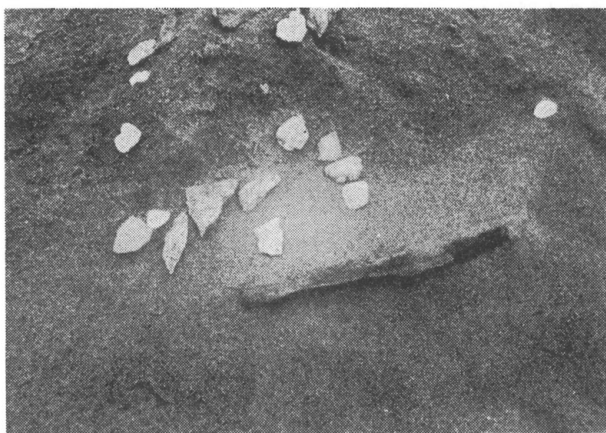
**第21土器群**はA-1区とA-2区を区画するクイより西側に2m、南側に2mの位置に、東西約1mの範囲に散乱した状態の土器群が検出された。器種は、口縁部に浮文を配した壺片、L字口縁の甕片などである。土器群は攪乱をうけている。

**第11～20号土器群**はA-1区とA-2区を区画するクイより北側に1mと4mの範囲で、西側に約6mの中で散乱した状態で検出された。器種は、L字口縁の甕脚付広口壺、鋤先口縁の高坏、壺、鉢などである。甕(97)は臥甕として使用されたと考えられ、他の土器は、臥甕の供献用と考えられる。

### (3) B-1区の遺構

石棺材の破片とみられるものでB-1区とB-2区を区画するクイより南側に4m、西側に1mの地点に散布する。散乱した棺材の西端より鉄剣が1口出土した。

第22号土器群はA-1区とB-1区を区画するクイより、北側に3mの地点に、東西1m、南北0.5mに散乱している。器種は、鋤先口縁の高坏の坏部、「下城式土器」の甕形土器口縁部などであり、土器群は二次的な攪乱を受けているようである。



第24図 鉄剣出土状態

### (4) C-1区

この区画はすでに大半が土取りをされており遺構の検出はできなかった。

### (5) A-2区の遺構

第8土器群はA-2区とA-3区B-2区とを区画するクイより1mの地点に、東西1m、南北1mの範囲に散乱しており、器種は、高坏、小型丸底壺などであり第7土器群とは隣接している。

第7土器群は、第8土器群の北側にあるが、時期差があり一括資料とは考え難い。器種は頸部に一条と胴部に二条の凸帯をもつ壺が出土した。

第9土器群は第7土器群の西側20.3mの位置に東西1.5m、南北1.8mの範囲に土器片が散乱している。器種は、鋤先口縁の高坏の坏部、平底の底部などであった。

第10土器群は第9土器群の北西側1.5mの位置する。東西1.7m、南北1.3mの範囲に土器が散布する。器種は完形の平底の長頸壺、平底の底部などである。

### (6) B・C-2区の第1集石群の遺構

発掘区の南西側で人頭大の礫（石集）群が多く発見された。これらは列石墓あるいは集石墓の可能性が十分あるが、砂丘であるために墓墳の検出は不可能であった。

第1集石は発掘区の南西端に位置し20数個の人頭大の礫石によって囲まれている。長辺1.2m、巾0.5mで中央に7個の礫の集石が見られる。

第2集石群は、1号集石群の北隣りに位置し北東-南西に「コ」字状に人頭大の礫石がならぶ。長軸1.0m、巾0.5mを測る。2号列石内より浮文のある壺形土器口縁片が検出された。

第3集石群は、第2集石の北東1.0mの所に位置し、西北-東南に人頭大の礫石20数個が方形にならぶ。長軸1.0m、巾0.6mを測る。東西端に集石が認められる。

第4集石群は、第3集石の北西隣にあり東-西に人頭大の礫石30数個が楕円形にならぶ。長径1.5

m、巾1.1mを測る。西端、東端にそれぞれ10個前後の集石がみられる。

第2土器群は、第4集石の西隣に位置し高杯片、坏片、小形壺形土器などが出土した。時期は弥生時代中期後半～末に比定される。

第5土器群は、第1集石の西側0.7mの所で発見された。東西に0.6mの範囲で広がった土器群である。器種は小形の壺、大形の朝顔状口縁壺、無頸壺、底部丸底の壺、下城式甕、脚付甕の脚部などである。レベルは、丸底壺が他の土器に比べて10cm程高い。器形も他の土器に比して新しいものである。

以上のほかにも若干の集石が認められたが規模も小さく不明確であった。

第1集石群は以上のことから4基以上の列石・集石墓として使用された礫群と、その供献土器として第2、第5土器群を認めることができた。



第25図 B-2区第1集石群主要部の遺構

(7) B-2区第2集石群の遺構

B-2区の中央～東北側に第1集石群よりもやや大きな集石群が発見された。この内には列石墓として考えられるものもある。

**集石19**は、15個の人頭大の礫石を長方形に配している。長軸は、南東―北西で長さ1.0m、短軸長0.6mを測る。長軸南側石列は若干くずれている。中央に甕の胴部片が検出された。石のレベルは、ほぼ同じである。中央より外面へう研磨した壺の胴部片が検出された。

**集石13**は、内部主体が安国寺系の丸底壺でその回りに16、12個の人頭大の礫石を「ロ」字状に二重に廻している。巾は1.8mである。壺は胴部より上は欠損しておりそれを若干斜めにおきその下に20数個の礫石を敷いている。

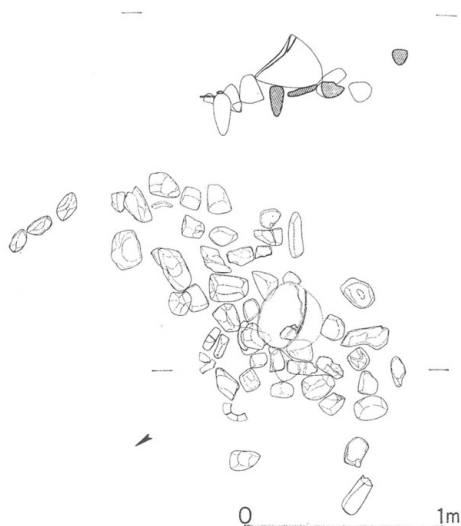
**集石16**は、集石13の東側1.2mの所に位置し、北東―西南に30数個の礫石群を長方形にならべる。長辺は1.4m、巾0.7mを測る。

**第1土器群**は、集石19の南側約1.0mの所に位置し西50cm、南北80cmの土器溜りである。器種は、朝顔状に開く大型壺と下城式土器の甕の口縁部であった。

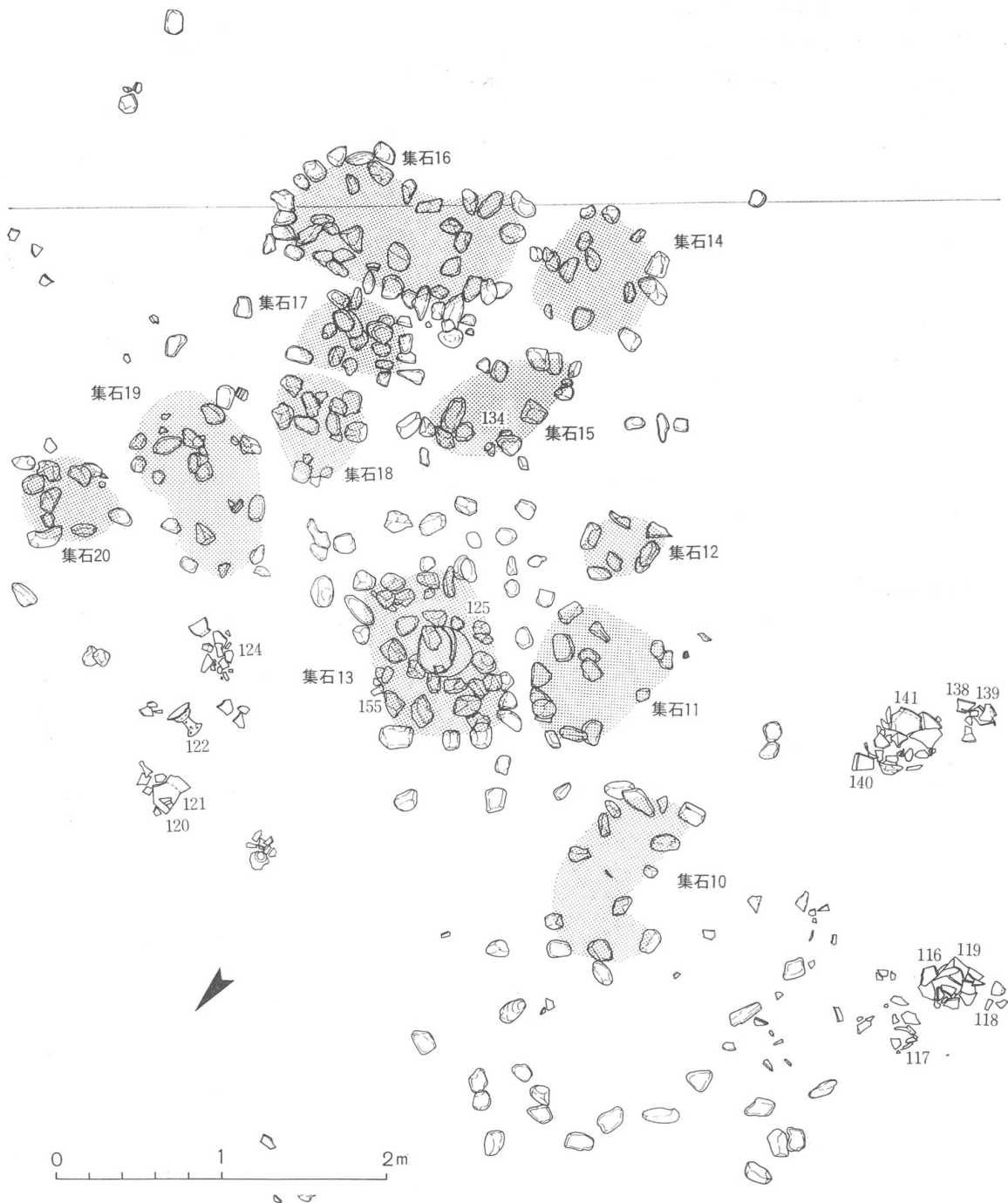
**第3土器群**は、第1土器群の約1m南に位置し東西0.5m、南北1.0mの範囲に散布する。器種は、朝顔状口縁をもつ大形壺である。

**第4土器群**は、集石13の北側1.1mの所に東西1.1m、南北0.7mを測る。土器群は、 $\mathcal{N}6.1$ と $\mathcal{N}6.2 \sim 4$ の二つの群に分けられると思われる。 $\mathcal{N}6.1$ は、朝顔状に開く口縁と胴部に二条の刻目凸帯を持つ壺、と下城式土器の口縁部である。 $\mathcal{N}6.2 \sim 4$ は、脚部が「ハ」字状に開く高坏、くの字に開く口縁の甕である。 $\mathcal{N}6.2 \sim 4$ は、時期的にも集石13の供献用と器として使用されたと考えられる。

以上のことから、第2集石群は、3基以上の列石・集石墓からなり、第1・3・4の供献土器群を伴うと考えられる。しかしながら第1・3土器群は、第1集石遺構とも距離は近く、その供献土器の可能性もある。



第26図 B-2区集石13下層

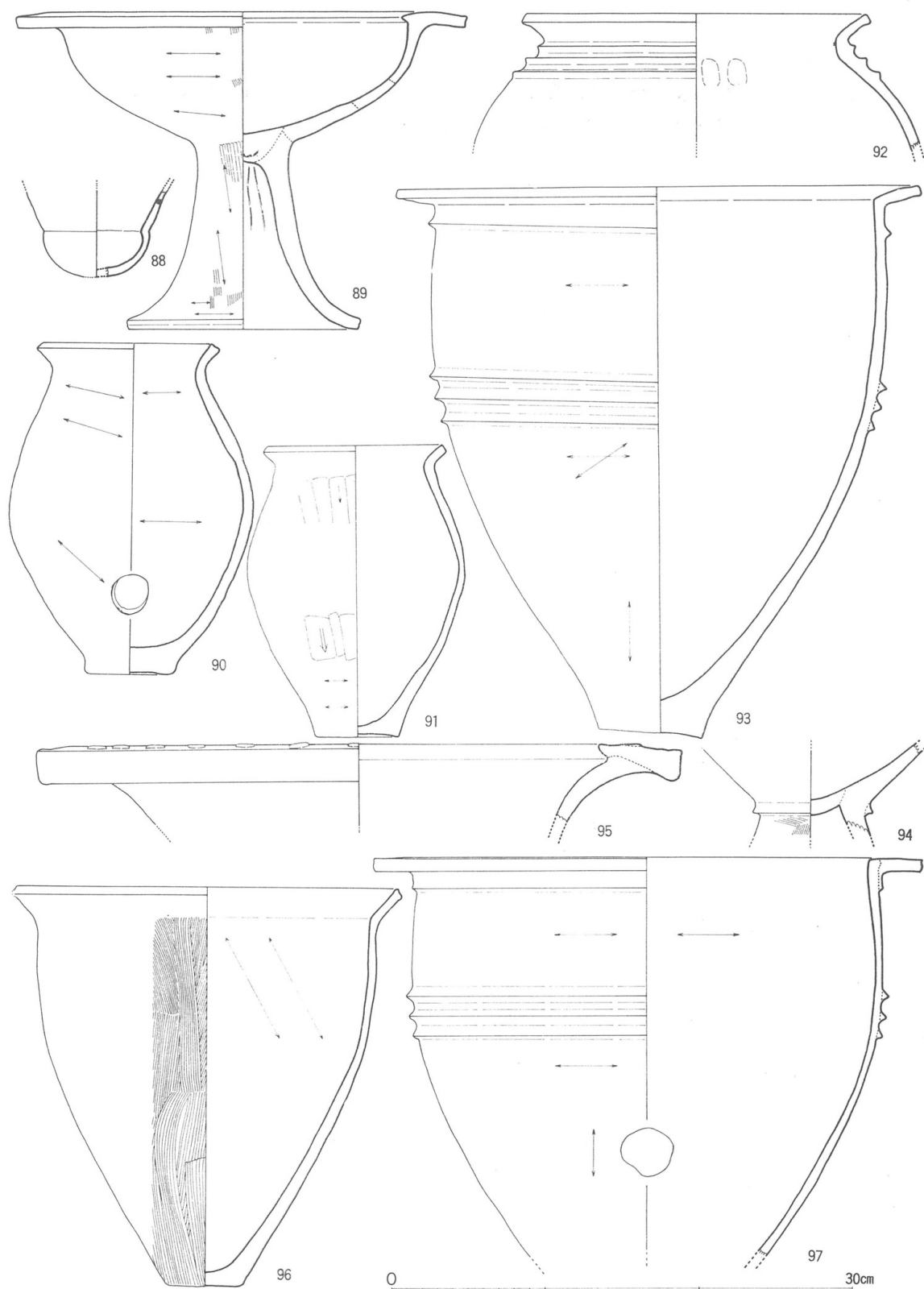


第27図 B-2区主要部の遺構(2)

(8) **B-2区第3集石群の遺構**

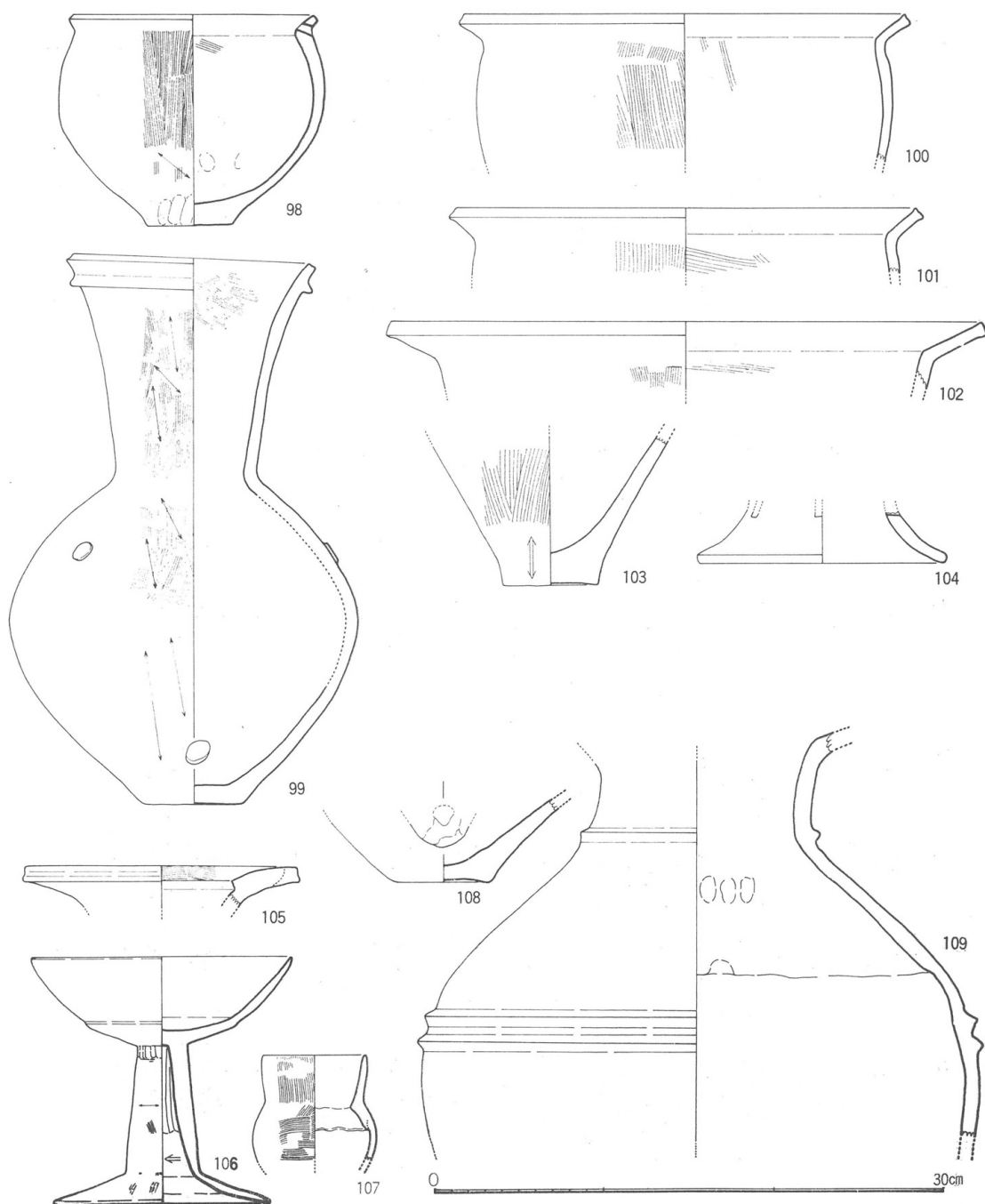
B-2区の西端に位置し、東一西に20数個の列石がほぼ方形にならぶ。長軸 $1.8m$ 、巾 $0.8m$ を測る内部より、鋤先状口縁の高坏の坏部片が検出された。





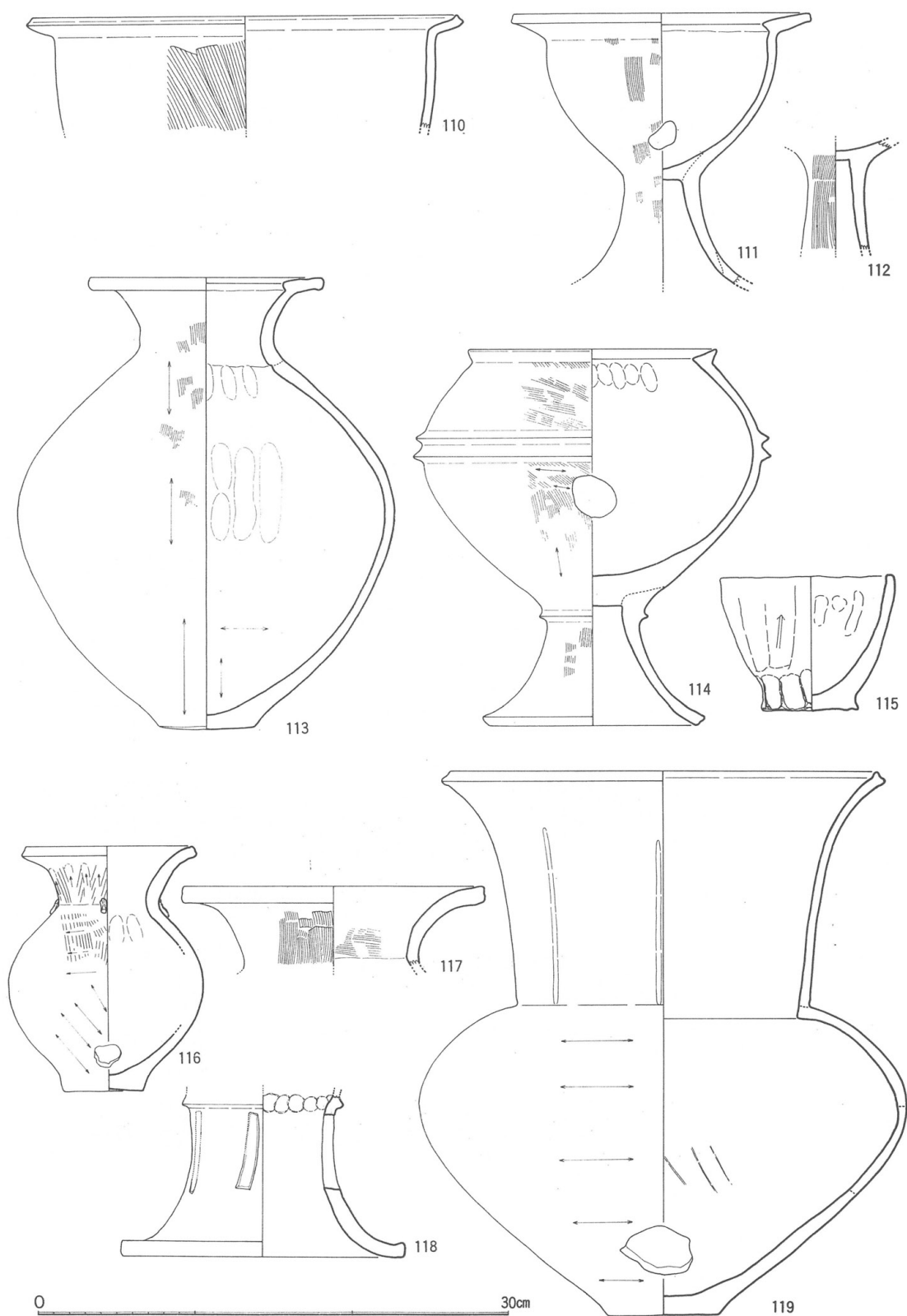
第28图 2区出土土器实测图(1) (1/4)

番号	出土位置	形態	手法	胎土・色調	図版
88	表 採	小型丸底壺底部、丸底で口縁部はく字状に大きく開く。	口縁～胴部上半外面はナデ磨き、下半はヨコ方向のナデである。内面は全体にヨコ方向のナデである。	色調茶色、胎土は精良で焼成堅緻	16
89	A-1 第13土器群	高坏形土器 口径 26.4 cm、高さ 20.6 cm。口縁は鋤先状を呈す、胴部下半に焼成後の穿孔あり脚部はラッパ状に開く脚長は、やや短い。	坏部・脚部の外面、坏部内面はていねいなヘラ磨き、脚付内面はシボリ、他はナデ	色調茶褐色、胎土は、大粒砂粒を含み堅緻	16
90	A-1 第18土器群	壺形土器 口径 11.0 cm、高さ 21.8 cm。口縁部はゆるやかに「く」字に外反胴部最大後は中位、下半に焼成後の穿孔あり、底部はやや上げ底気味の平底。	胴部内外面共に巾広のヘラ磨き、内面下半はナデ。	色調茶黄色、胎土は砂粒を若干含み堅緻	16
91	A-1 第21土器群	壺形土器、口径 12.0 cm、高さ 19.0 cm を測る形態はほぼ 89 と同じ	胴部上半はナデ、大半はヘラ削り底部付近は横方向のヘラ磨き、内面はナデ	色調赤褐色、砂粒を若干含み堅緻	16
92	A-1 第20-22土器群	壺形土器、口縁部はく字状に開く、胴部上半に断面三角の突帯を 3 条めぐらす	口縁～胴部上半外半はヨコナデ下半はナデ。内面はナデによる平滑仕上げ	色調黄褐色、胎土は輝石粒を含み焼成堅緻	
93	A-1 第12土器群	甕形土器、口径 34.0 cm、高さ 35.5 cm、口縁部は、L 字状口縁かやや立ち上がり気味になる。胴部上端と中央に断面三角の突帯を一条と三条めぐらす。底部はやや上げ底気味の平底である。	口縁部～胴部外面上半はヨコナデ。その他はヘラ研磨である。内面はナデ	色調黄褐色、石英粒の砂粒を多く含み堅緻	16
94	A-1 第15土器群	脚台付鉢形土器あるいは甕形土器の一部、鉢部と脚部のつなぎ目に断面三角の突帯をめぐらす。	内外面共にヨコナデ	色調黄褐色、石英輝石粒を多く含み、焼成は余りよくない	
95	A-1 第21土器群	壺形土器口縁部、頸部は大きく外反し、口縁部は鋤先状をなす。端部は下方のたれる。口縁上面に円形付文をめぐらす。	口縁部はヨコナデ。頸部はヘラ状工具による平滑仕上げ。	色調淡黄褐色、胎土石英砂粒を多く含み、焼成堅緻	
96	A-1 第22土器群	甕形土器、口径 25.4 cm、高さ 26.0 cm を測る。口縁部はく字状に外反し端部は上方につまみ上げている。胴は張らず、平底の底部へと続く	口縁部は内外面ともにヨコナデ。胴部外面は上部が細かいハケ痕、下半は巾広のハケ内面は、ナデ仕上げ。	色調黄茶褐色、胎土は砂粒を若干含む、焼成堅緻	16
97	B-2 第 3 土器群 (表土層)	甕形土器、胴部下半～底部は欠損している。口径 36.0 cm 口縁部胴逆く字状をなし口縁下に方形の突帯を一条、胴部に三角突帯を三条めぐらす。胴部下半に焼成後の穿孔あり。	口縁部上端はヘラ研磨下端はヨコナデ。胴部上半は、横方向のヘラ研磨、下半はタテ方向のヘラ研磨。内面はヨコナデ。	表面は全面丹塗り、胎土精良、焼成堅緻	



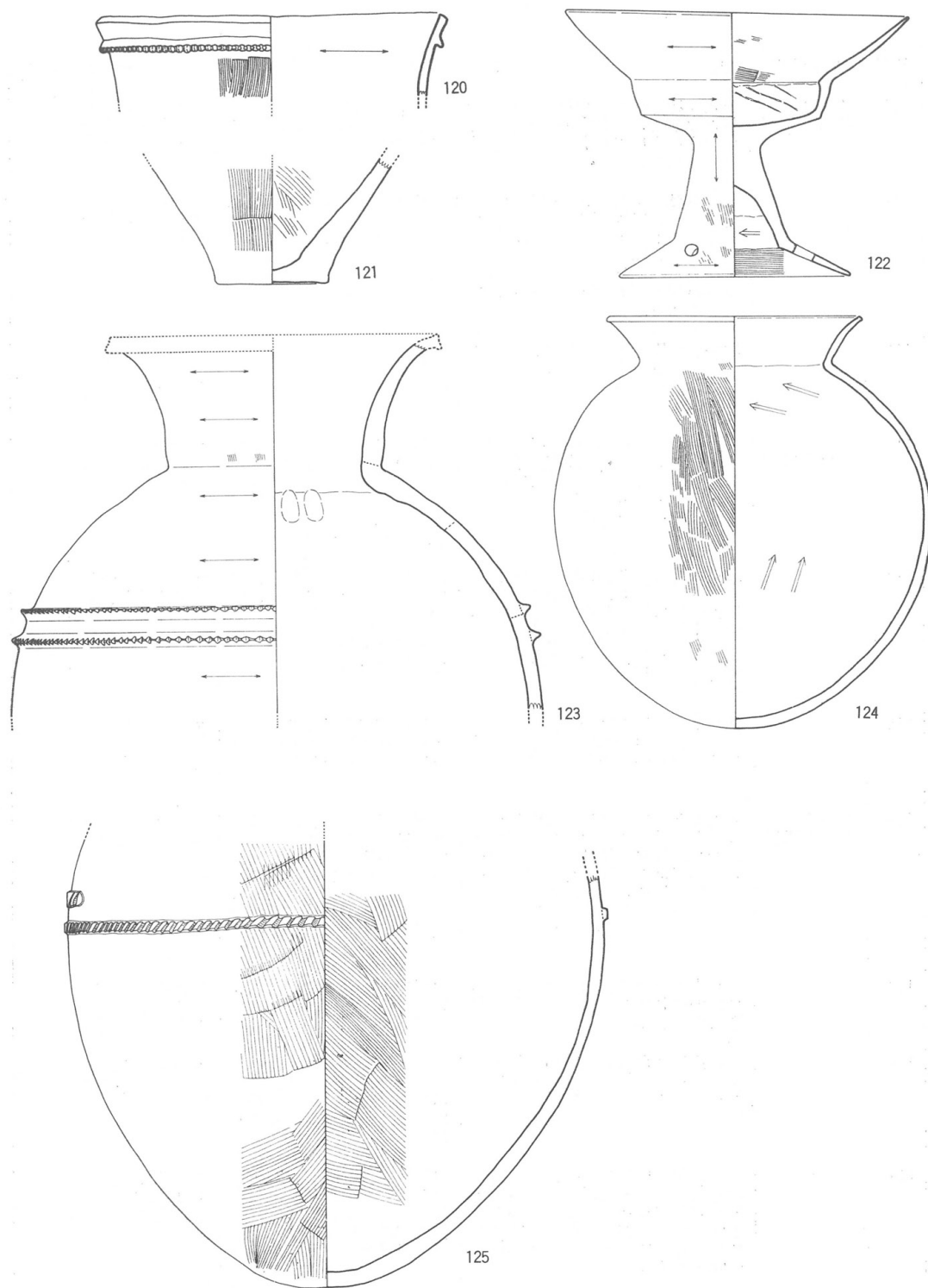
第29图 2区出土土器实测图(2) (1/4)

番号	出土位置	形 態	手 法	胎 土・色 調	図版
98	A-2 第10土器群	壺形土器、口径14.8cm、高12.4cm、口縁は短かく「く」字状に外反、端部は方形、口縁下端に穿孔あり胴は張り下半に二次的の穿孔あり、底部は平底。	口縁部内外面ともヨコナデ胴部外面上半は細いハケ目下半はハケ目後荒いヘラ研磨。内面はハケ目後ナデを施す。	色調茶黄色、胎土大粒砂粒を含み堅緻	16
99	〃	長頸壺、口径15.0cm、高さ32.2cm、頸部は長く直線的に外方へのび口縁端部下に三角突帯を一条めぐらす。胴部は球形で上半に円形付文を5個配す、下半に焼成後の穿孔がある。底部は平底。	口縁部外面ヨコナデ、頸部外面ハケ調整後に雑なヘラ研磨、胴部上半外面ハケ調整、下半外面でいねいなヘラ研磨、内面口縁付近はハケ目、他はナデである。	色調黄褐色、胎土は砂粒を少量含み、堅緻	16
100	〃	甕形土器、口縁は「く」字状開く端部は上方へつまみ上げる。胴部は張らない。	口縁部内外面ともにヨコナデ胴部外面ハケ目、内面ナデ一部ハケ目あり	色調明茶褐色、胎土は礫粒を含み焼成やや軟	
101	〃	甕形土器、99と同様	99とほぼ同様であるが内面にハケ目あり	99と同じ	
102	〃	甕形土器、99、100とほぼ同じであるが口縁部が長い	100と同じ	100と同じ	
103	〃	甕形土器底部、底部は上げ底気味の平底	ハケ目であるが、底部付近はヘラ研磨	色調黄褐色、胎土は礫粒を含みやや軟質	
104	〃	脚台部、長方形の透しが6ヶ所ある、脚端部は丸くおさめる。	内外面共にナデ	色調茶褐色、大粒砂粒を含み軟質	
105	A-2 第8土器群	壺形土器口縁部、口縁は朝顔状に開き口縁部は若干ではあるが鋤先状を呈す。	口縁内面はハケ、外面はヨコナデ他はナデ	色調黄褐色、胎土は輝石、長石粒を含み、やや軟質	
106	〃	高坏、口径15.5cm、高さ14.5cm。坏部は若干内湾気味に外方へのびる底部との境に段がつく。脚柱部は若干エンタシス状にふくらむ、裾部は「ハ」字状に開く。	坏部上半は、外面ヨコナデ下半は断面ヘラ削りの後雑に研磨、内面はヨコナデ脚柱部は、外面の接合部には、ヘラ削、脚柱部細いヘラ磨裾部は、ハケの後ナデ。内面裾部はナデ。脚柱部上半は、シボリ、下半はヘラ削り	色調黄褐色、胎土は砂粒をわずかに含む、焼成は堅緻	16
107	〃	小形壺形土器、底部欠損、口径6.6cm。口縁部は内湾気味に直口する胴部は丸味を持つ	口縁上半、内外面ハケ目のあとヨコナデ他は外面ハケ目、内面ナデ	色調茶黄色、胎土は砂粒をわずかに含む、焼成堅緻	
108	A-2 第7土器群	壺形土器底部、底部は上げ底気味の平底、穿孔あり	内外面ともにナデ	色調黄褐色、胎土砂粒を含み、焼成やや軟質	
109	〃	壺形土器、頸部はゆるやかにのび口端付近で急に外反する。頸部に一条と胴部中央に二条断面三角の突帯を持つ。肩はナデ肩。	内外面共に頸部から胴部にかけてはナデ仕上げ。突帯付近のみヨコナデ。	色調淡黄褐色、胎土石英砂粒を含みやや軟質	



第30图 2区出土土器实测图(3) (1/4)

番号	出土位置	形 態	手 法	胎 土・色 調	図版
110	A-1 第17土器群	甕形土器口縁部、口径27.6cm、口縁部は鋭く「く」字に外反し、端部はつまみ上げている。胴部は、余り張らない。	口縁部内外面ともにヨコナデ、胴部外面若いハケ目内面はナデ	色調茶褐色、胎土は長石輝石粒を含み焼成堅緻	
111	〃	脚台付鉢形土器、脚部欠損、口径19.0cm、口縁部は逆L字状より若干立ち上がる。口縁端部は鋤先状をなす。胴部は深く、下端に焼成後の穿孔あり。脚部は若干短くラッパ状に開く脚下半にも焼成後の孔あり。	口縁部は、ヨコナデ。鉢胴部～脚部外面はハケ調整後ナデ。鉢内面はナデ	色調黄褐色、胎土精良で焼成は堅緻	17
112	〃	脚部、小片である。脚部は、小さくラッパ状に開くと考えられる。	脚部外面は細かなハケ目、他はナデ	色調茶褐色、胎土は砂粒若干含焼成はやや軟質む	
113	A-2 第11土器群	壺形土器、口径15.0cm、高さ28.7cmを測る。頸部は朝顔状に開き口縁部は、鋤先状を呈す。胴部は球形で下半に焼成後の穿孔がある。底部はいびつな平底	口縁部は横方向のヘラ研磨頸部外面は、ハケ調整後ナデ、胴部外面ハケ調整後タテ方向のヘラ研磨、内面はナデ、頸部にシボリ痕有、底部は雑なヘラ研磨	色調赤褐色、胎土は砂粒若干含むで、堅緻	17
114	〃	脚台付鉢形土器、口径15.8cm、高さ23.8cmを測る。頸部はしまり、口縁端は外方に肥厚する、胴部は張り中央に三角突帯を二条めぐらす脚部は、短くラッパ状に開く、脚部との接合部に三角突帯を一条めぐらす	口縁部はヨコナデ鉢胴部外面はハケの後ヘラ研磨、脚部外面はハケの後ヘラ研磨脚部外面は、ハケ調整後にナデ。鉢部内面はナデ、脚部内面はヨコナデ	色調茶色、砂粒を若干含む、焼成は堅緻	17
115	〃	鉢形土器、口径11.0cm、高さ8.5cmを測る。口縁端部は、若干内傾し端部は丸い。底部は平底である。	口縁～胴部内外面共にナデ底部付近に指おさえ痕あり胴部に一部削り風なものあり	色調茶褐色、胎土、砂粒を多く含む。堅緻	
116	B-2 第3土器群	壺形土器、口径11cm、高さ15.5cm、頸部はしまり口縁部は朝顔状に開く。頸部に棒状の浮文をつける。胴部は若干長い球形で底部に近い所に焼成後の穿孔をする。底部はやや上げ底気味の平底	口縁部はヨコナデ、頸部外面は荒いハケの後タテ方向のヘラ研磨、胴部上半は、ハケの後ヘラ研磨、下半はヘラ研磨、頸部内面はヨコナデの後ヘラ調整、胴部内面は、ナデによる平滑仕上げである。	色調黄褐色、胎土は、若干砂粒土を含み、焼成は堅緻	17
117	〃	壺形土器口縁部、口径19.2cm、頸部は朝顔状に開き、口縁端部は肥厚し方形を呈す。	口縁部はヨコナデ、頸部外面タテハケ目。内面ヨコハケ目	色調茶褐色、胎土は良好で、やや軟質	
118	〃	脚台片接合部付近に三角突帯を一条めぐらす。脚中央には長方形の透しを6ヶ所にしている。	脚部上下端は内外面ともにヨコナデ、脚外面は、ハケ後にたて方向のヘラミガキ内面はハケの後に平滑仕上げ。	色調黄褐色、胎土は砂粒を含む堅緻	
119	〃	壺形土器、口径28.0cm、高さ34.5cmを測る。頸・口縁部は立ち気味に拡がり口縁端部は上方につまみ上げている、胴部は張り扁球形をなし底部平成底である。底部付近に焼後の穿孔	口縁部はヨコナデ。頸部外面はナデで数ヶ所に暗文状にヘラミガキ、胴部外面は横方向のていねいなヘラ磨き、他は全てナデである。	色調黄褐色、胎土は砂粒若干含む、焼成は堅緻	17

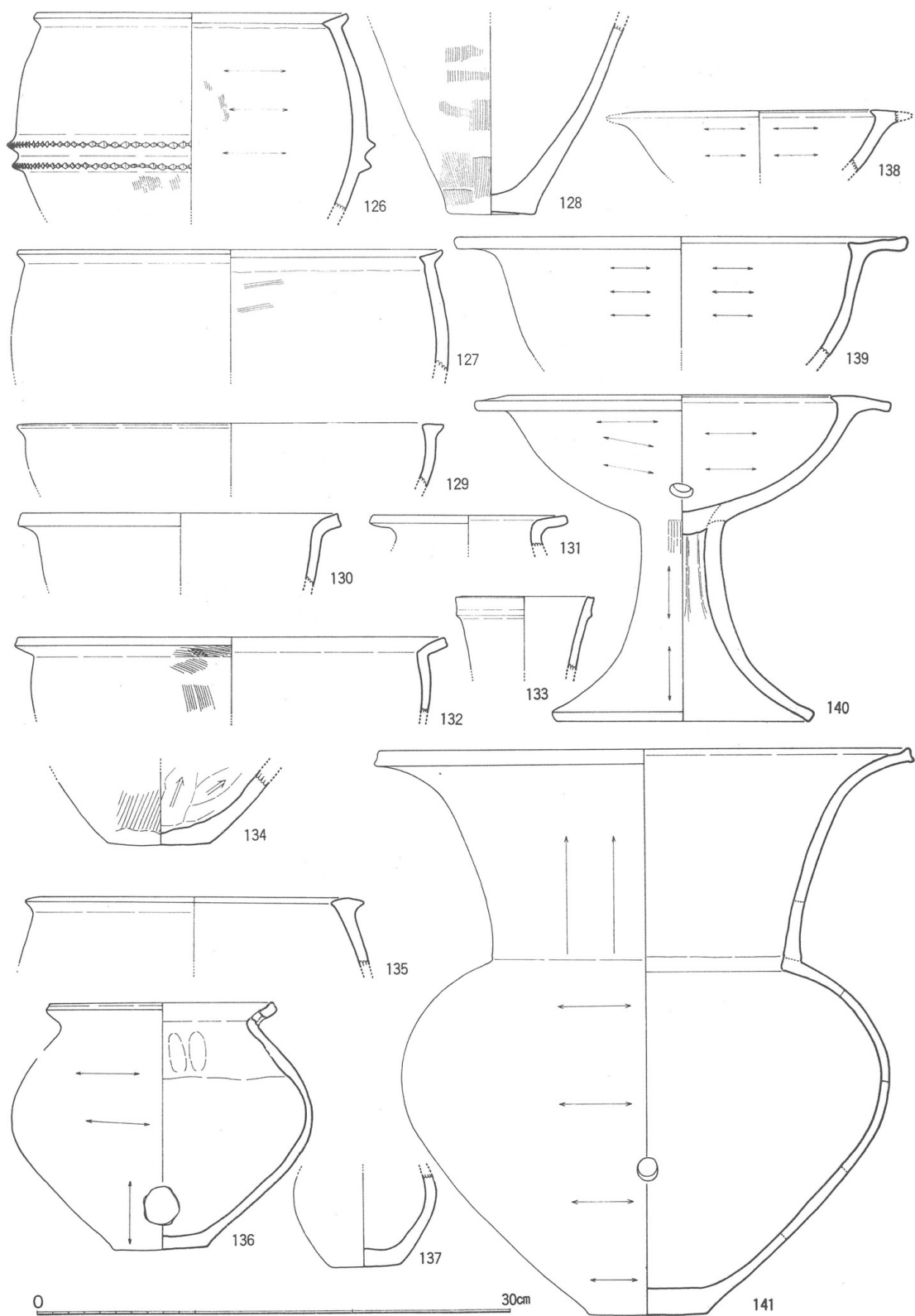


0 30cm

第31图 2区出土土器实测图(4) (1/4)

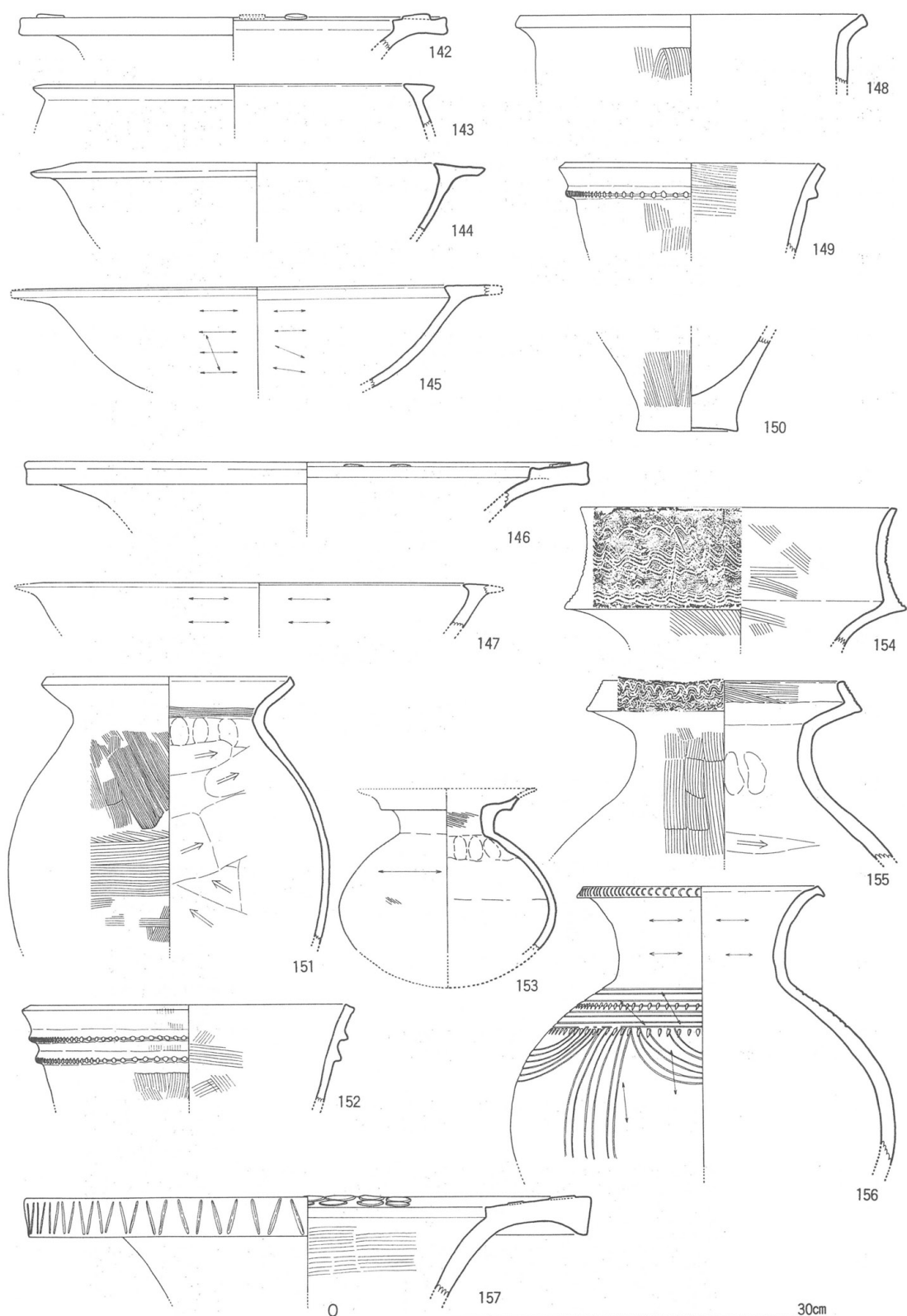
番号	出土位置	器種 形 態	手 法	胎 土・色 調	図版
120	B-2 第4土器群	下城甕形土器の口縁部、口径21.5cm、口縁下部に若干垂れ気味の刻目突帯をめぐらす。	口縁部ヨコナデ、胴部外面は、細いハケ目、内面は平滑ナデ仕上げ	色調黄褐色、胎土は輝石などの砂粒を含み堅緻	
121	〃	甕形土器の底部、119の底部か。底部は若干上げ底気味の平底である	外面は細かなハケ、内面はハケの後に平滑ナデ	色調茶褐色、胎土は若干礫交りやや軟質	
122	〃	高坏形土器、坏部は、底部と口縁部に明瞭な段を有す。口縁部は若干内湾しながら外方へのびる。脚部は短く裾部は「ハ」字状にひらく。脚柱部上半は中空としない。裾部に焼成前の円孔が、3ヶ所穿たれている。	坏部外面は、細いヘラ研磨脚部外面はハケの後ヘラ研磨。坏部内面もヘラ研磨、脚柱部内面上半は、ナデ下半はヘラ削り、裾部は細いハケ目。	色調黄茶色、大粒の石英砂粒を含む焼成は堅緻	17
123	〃	壺形土器、頸部～口縁部はゆるやかに大きく外反し、頸部はしまる。肩部になで、胴張りである。中位に刻目の三角突帯を二条めぐらす	頸部外面はハケの後、横方向のヘラ研磨胴部外面は、横方向のヘラ研磨、内面は頸部は不明、胴部ナデである。	色調黄茶色、胎土は良好、堅緻	
124	〃	壺形土器、口径15.5cm、高さ25.5cm、口縁部は「く」字に鋭く外反し口縁部内面にわずかに肥厚する。頸部はしまり、胴部は張る。底部は丸底である。	口縁部はヨコナデ、胴部外面に上半に細いタテ方向のハケ、下半はナデ、内面は上半はヘラケズリ、下半はナデ、全体に薄手でていねいである。	色調茶色、胎土は、石英砂粒を多く含む堅緻	17
125	B-2 集石13 主体部	壺形土器、口縁部～胴部上半は欠損、胴部は丸く張り中央に断面「コ」字状の刻目突帯を一条めぐらす。底部は丸底である。	胴部内外面ともに荒いハケ目であり、突帯周辺はヨコナデ。	色調淡黄褐色、胎土は大粒の石英砂粒を含み堅緻	





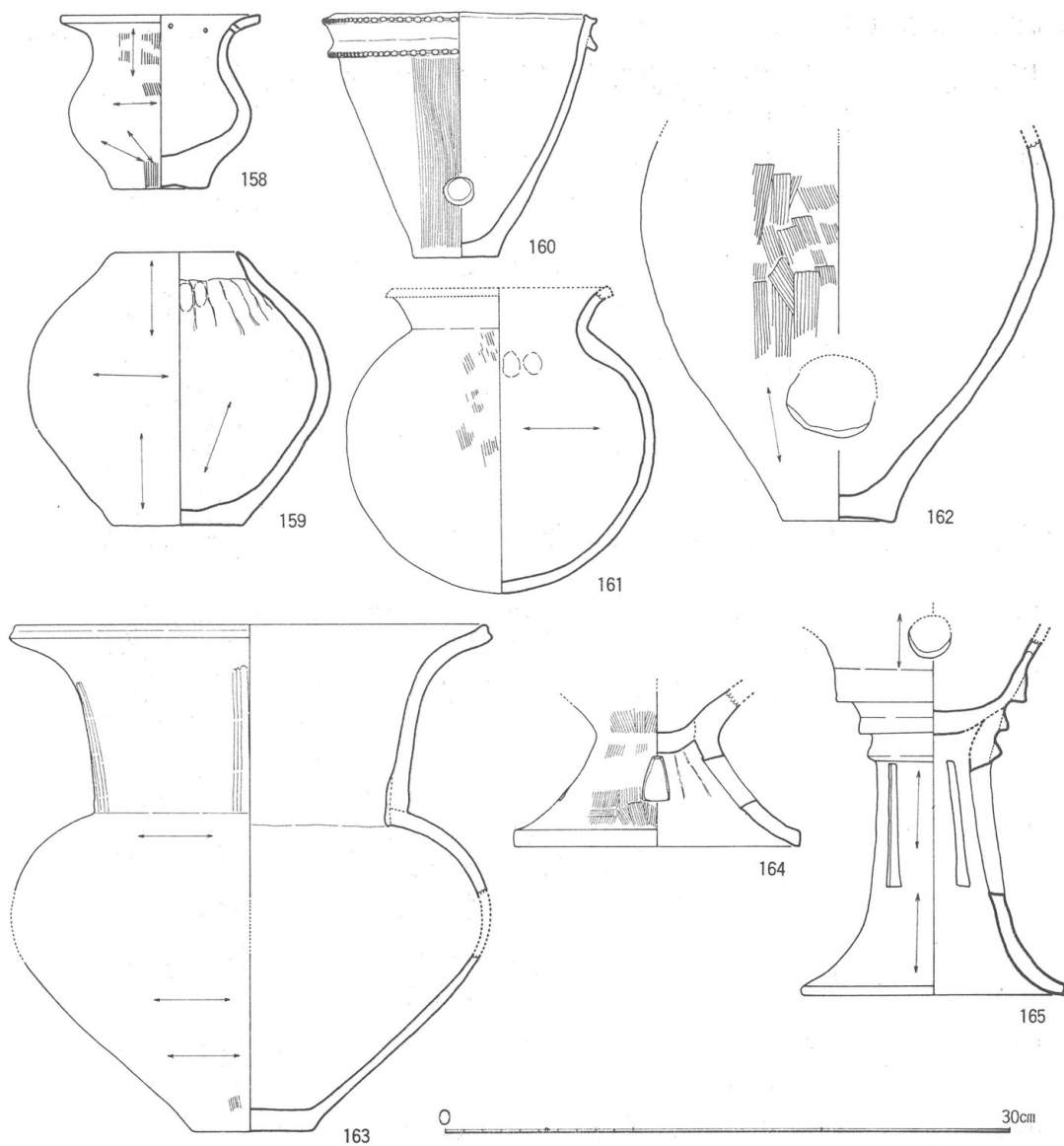
第32图 2区出土土器实测图(5) (1/4)

番号	出土位置	形 態	手 法	胎 土 ・ 色 調	図版
126	A-1 第15土器群	脚付鉢?、口径19.8cm、口縁は内傾する短い逆L字形で内側もやや突出する。胴部中位に断面三角の刻目凸帯を2条めぐらす。	口縁部ヨコナデ、胴部内面はハケ調整ののちナデ、その後ヘラ研磨、外面はハケ調整後にナデ。	色調黄茶色、胎土は砂粒を若干含むが良好、焼成は堅	
127	"	脚付鉢?、鉢底部～脚部欠損、口径26.8cm口縁部は125と同様、胴部は余り張らない。	口縁部ヨコナデ、胴部外面はナデ、内面はハケの後	色調黄茶色、胎土は砂粒を含み焼成は堅	
128	"	甕底部胴張りのない胴部に上げ底気味の平底底部がつく	胴部外面は、細いハケの後ナデ。内面はナデ平滑仕上げ。底部下半に指圧痕あり。	色調黄褐色、胎土は砂粒を若干含むやや軟質。	
129	B-2 集石6	脚付鉢?、口径26.9cm、口縁部は肥厚し上端は水平である。胴部は張らない。	口縁部ヨコナデ、胴部外面は、ナデ後、ヨコ方向のヘラ研磨、内面はナデ?	色調黄褐色、胎土は砂粒を若干含む焼成やや軟質	
130	"	甕形土器口縁部、口径20.4cm、口は縁「く」字状に外反、端部はつまみ上げ状。胴部は張らない。	口縁部ヨコナデ、他はナデ	色調黄褐色、胎土に輝石、長石粒を含みやや軟質。	
131	"	壺形土器口縁部、小片から復元口縁は逆L字状に外反する。	口縁外面はヨコナデ、頸部外面と内面全体は、ナデの後ヘラ研磨。	色調黄褐色、胎土輝石、長石粒などの砂粒含む、焼成は堅緻	
132	A-1 集石11	甕形土器口縁部、小片から復元口縁は「く」字状に外反す。	口縁部ナデ、胴部外面は斜めタテ方向の細いハケ内面平滑ナデ仕上げ	色調黄褐色、胎土輝石、長石などの砂粒を含む。焼成は堅緻、口縁部のみ丹塗り	
133	"	長頸壺形土器の口縁部、口縁部は直線的にのびる。口縁下位に三角突帯をつける。	口縁～突帯付近までヨコナデ、頸部内外面ナデ	色調赤黄褐色、胎土輝石粒などを含む堅	
134	B-2 集石12	壺形土器底部	胴部外面はタテハケ目、内面はタテ方向のヘラ削り	色調黄褐色、胎土は長石粒が多く輝石粒も含む、やや軟質	
135	B-2 第2土器群	脚付鉢形土器?の口縁、小片で復元、口縁部は内傾し逆L字形口縁の名残をみる。	口縁部ヨコナデ、他はナデ調整。	口縁～胴部外面は丹塗り、色調黄褐色、胎土輝石粒などの細粒を含む、焼成は堅緻。	
136	"	壺形土器、口径14.0cm、高さ13.7cm、口縁は短く「く」の字に外反。口縁下部に焼成前の円孔2個を二対。胴部下半に焼成後の穿孔、底部は平底	口縁部ヨコナデ、胴部外面はていねいなヘラ研磨内面上半ナデ、下半ナデ平滑仕上げ	色調茶褐色、胎土は輝石砂粒など少量含む、焼成は堅緻	17
137	"	壺形土器下半、胴部はやや張り底部は平底である。	内外面ともにナデ	色調黄褐色、胎土は輝石長石粒や大きな砂粒を含む、焼成堅緻	
138	B-2 第1土器群	高坏形土器、口縁は鋤先状を呈す。坏部はやや深めである。	口縁部ヨコナデ、他は内外面ナデ。	色調黄褐色、胎土は7mm大の籾粒も含むがおおむね良好。やや軟質	
139	"	高坏形土器、口縁部は、鋤先状の平坦口縁、坏部は深くなる。	口縁外面のみヨコナデ、他は全面ヘラ研磨。	色調褐色、胎土は輝石などを主に若干ではあるが雲母も含む、堅緻	
140	"	高坏形土器、口径26.4cm、高さ20.6cm、口縁は平坦な鋤先状口縁、胴部下半に焼成後の穿孔。脚部は大きく開く。	口縁部ヨコナデ坏・脚部外面、坏部内面は、ていねいなヘラミガキ、脚柱部内面シボリ、他はナデ	色調茶褐色、胎土は良好、焼成は堅緻	17
141	"	広口壺形土器、口径23.7cm、高さ35.8cm、口縁部はラッパ状に広がる。端部をつまみ上げる。胴部は上位で張り下半に穿孔あり。底部は平底	口縁部ヨコナデ、頸部内外面はナデ、胴部外面上半～下半はていねいなヘラ研磨内面は丁寧なナデ	色調茶色、胎土は長石粒を含むがおおむね良好、焼成は堅緻	18



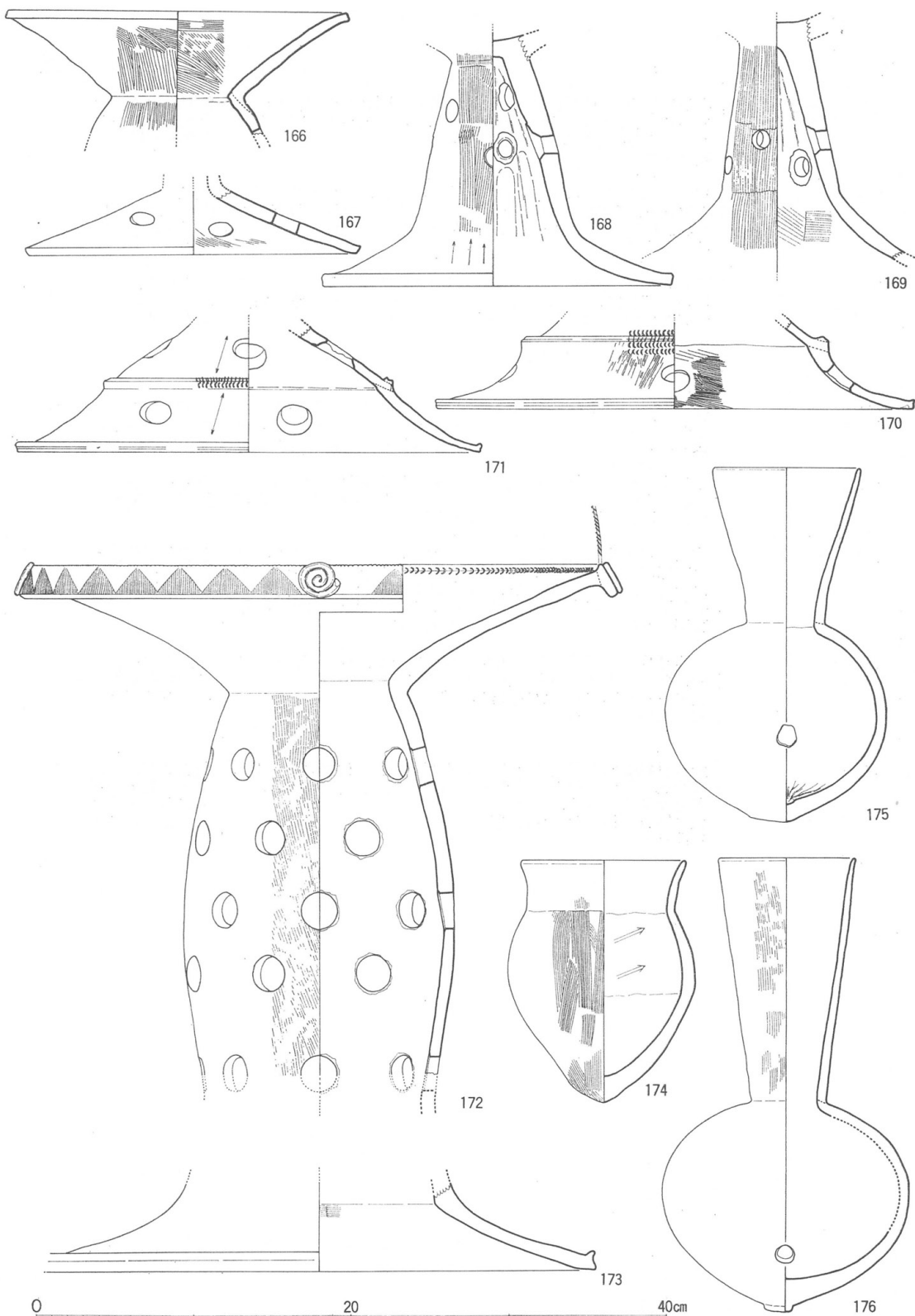
第33图 2区出土土器实测图(6) (1/4)

番号	出土位置	形態	手法	胎土・色調	図版
142	B-2 集石14	壺形土器口縁、鋤先状口縁で端部は方形に肥厚する。上面に円形浮文をつける。	口縁外面はヨコナデ他は不明	色調黄褐色、胎土輝石砂粒の他礫粒も若干含む、やや軟質	
143	〃	脚台付鉢形土器？小片である。口縁部は断面逆L字状をなす。	口縁部はヨコナデ他はナデ	口縁外面下に丹塗り、色調黄褐色、輝石粒などを含む、やや軟質	
144	B-2 集石14	高坏形土器、小片であり口縁部は平坦な鋤先状口縁で端部は尖り気味に丸くおさめる。	口縁部上面はヘラ研磨、他はナデ	口縁上面は丹塗り色調黄褐色、胎土は輝石粒を含み良好、堅緻	
145	〃	高坏形土器、口径31cm、口縁部は平坦な鋤先状口縁をなす、坏部はやや深い。	口縁部内面ヨコナデ、上面胴～部にかけては、ナデ後にヘラ研磨、内面も同様	色調は明茶褐色胎土は長石などを含むが良好、焼成は堅緻	
146	〃	壺形土器口縁部、小片。鋤先状口縁部は平坦で上面に円形浮文を付す。	内外共にヨコナデ	色調赤褐色、胎土は輝石粒などを含み良好、焼成は堅緻	
147	C-2 集石8周辺	高坏形土器口縁部、小片である。口縁部は、平坦な鋤先状口縁	全面、ナデ後ヨコ方向のヘラ研磨	色調明茶褐色、胎土輝石粒を含み良好、焼成堅緻	
148	C-2 集石9	壺形土器口縁部、口縁部はゆるやかに外反し端部はわずかにつまみ上げる。	口縁部ヨコナデ、胴部外面荒いハケ、内面ヨコナデ	色調黄褐色、胎土は輝石を含み良好、焼成堅緻	
149	B-3 集石22	下城タイプの甕形土器、口縁部は直線的にのび断面三角の刻目突帯を配す。	口縁上面突帯付近までヨコナデ、胴部外面はタテハケ。内面は上半ガヨコハケ下半はヨコナデ	色調黄褐色、胎土は輝石を含み良好、焼成堅緻	
150	〃	甕形土器、底部、底部は厚く若干上げ底気味である。	上半は縦方向のハケ、底部付近はヨコナデ。内面ナデ	色調茶褐色、胎土輝石等を含み良好、焼成堅緻	
151	B-2 表採	壺形土器、口径16.0cm、口縁部は「く」字状を呈し端部はつまみ上げている。胴部は余り張らず長胴	口縁部はヨコナデ、胴部上半外面は細いタテハケ、中位はヨコハケ、下半は斜め方向のハケである。内面は、頸部2cm下よりヘラズリ	色調黄褐色、スス付着、胎土は輝石、長石などを含み良好、焼成は堅緻	
152	B-2 表採	下城タイプの甕形土器、口縁は直線的にのび二条の三角刻目突帯をめぐらす。	口縁上面から突帯付近までヨコナデ、外通はタテハケ内面は荒いヨコハケの後ナデ	色調明茶褐色、胎土は輝石粒、長石を含むが、良好、堅緻	
153	表採	二重口縁壺形土器、頸部は垂直に立ち、口縁部は外方の開く胴部は球形を呈す	内外面ともにヘラ研磨	色調赤褐色、胎土は砂粒を含まず精良、堅緻	18
154	B-2 集石7	壺形土器口縁部、内湾気味に垂直に立ち上がり、端部は方形、全面に櫛描波状文を施す。	口縁端部上面ヨコナデ、頸部荒いハケ目、内面ハケ後にナデ。	黄褐色、輝石粒長石などの細粒を多混、堅	
155	B-2 集石13	壺形土器口縁部、口径15.5cm、口縁部は短かく逆「く」字状を呈し、櫛描波状文を施す、頸部から肩になだらかに連続	口縁部頸部上半外面はヨコナデ頸部下半～胴部にかけてはハケ口縁内面はヨコハケ他はナデ調整	色調黄褐色、胎土は3～5mm大の長石粒が目立つ、焼成堅緻	
156	表採	壺形土器、口径15.7cm。口縁部はゆるやかに外反し端部は下方へたれる。胴部は球形を呈す。口縁端面と胴部に半截竹管によって文様を施す。	口縁部ヨコナデ、頸部～胴部外面はヘラ研磨。内面はナデ。肩部の水平平行線にそって、半截竹管の木口による水滴状の押引きあり	色調茶褐色、胎土は大粒の砂粒を含み、焼成は堅緻	
157	表採	壺形土器口縁部、口縁部は鋤先状で端部は下方へ垂れる。口縁上面に2個一対の円形浮文、外面に「ハ」字状に刻目を入れる。	口縁部ヨコナデ、他はヨコナデ内面は荒いハケ	色調黄褐色、胎土は輝石長石を含み良好、やや軟質	



第34图 2区出土土器实测图(7) (1/4)

番号	出土位置	形態	手法	胎土・色調	図版
158	C-2 第5土器群	小型壺形土器、口径10.7cm、高さ9.2cm、口縁は朝顔状に開く。胴部ははり、底部は上げ底気味の平底。	口縁部外面ヨコナデ、その他はハケ目の後ヘラ研磨。内面ナデ。	色調赤褐色、胎土は輝石・長石を含み良好、堅緻である。	18
159	〃	無頸壺形土器、口径6.0cm、高さ14.6cm、口縁と胴部の境はない。胴部は張り、底部はいびつな平底。	外面はていねいなヘラ研磨、内面はナデ、口縁と胴部のつなぎ目にシボリ痕	色調赤褐色、胎土は輝石、長石、石英を含む、焼成堅緻	
160	〃	下城タイプの甕形土器、口径14.6cm高さ13.0cm。口縁部は直線的にのび端部はつまみ上げる。口縁下部に垂れ下がり気味の三角突帯をつけ、口縁・突帯に同時に刻目を付す	口縁部内外面ともにヨコナデ突帯下からはハケ調整。内面ナデ。	色調茶色、胎土は砂粒を含む、焼成堅緻	18
161	〃	壺形土器、口縁部「く」字に外反、胴は丸く張り、底部丸底である。	口縁部ヨコナデ、胴部上半はハケ後ナデ、下半はナデ。内面中位はヘラ研磨、他はナデ	色調黄褐色、胎土に砂粒を多く含む。焼成堅緻	18
162	〃	壺形土器底部、胴部は長胴で、下半に焼成後の穿孔あり。底部は平底。	胴部上半外面はタテ方向のハケ目下半はヘラ研磨、内面はナデ。	黄褐色、胎土は長石砂粒を多く含む。焼成堅緻	
163	〃	広口壺形土器は胴部中央欠損、口縁部はラッパ状に拡がり端はつまみ上げる。胴部は肩が張り下半に焼成後の穿孔あり。底部は平底。	口縁部はヨコナデ、頸部は4ヶ所に暗文状のヘラナデ、胴部はていねいなヘラ研磨。内面ナデ、下半は一部にヘラ研磨痕あり。	色調黄褐色、胎土は砂粒を若干含む。焼成堅緻	
164	〃	脚台部片、脚部は短かく直線的に開く。上半に小形の台形状の透しを開ける。鉢底部は粘土充填法である。	外面はハケ。接合部はヨコナデ、内面はナデ	色調黄褐色、胎土砂粒を多く含む、焼成堅緻	
165	〃	脚台付鉢脚部と考えられる。接合部は断面三角の突帯を3条めぐらす。脚部は、ラッパ状に開き、長い台形状の透しを開ける。	外面突帯付近はヨコナデ他はヘラミガキ、内面はナデ。	色調黄褐色、胎土は石英・長石・輝石などを含むが良好。焼成堅緻	18



第35图 2区出土土器实测图(8) (1/4)

番号	出土位置	形態	手法	胎土・色調	図版
166	G地点 表採	器台形土器、口径21.5cm、受け部は「く」字状に鋭く外反する。筒部はエンタシス状にふくらむ。上半に焼成前の円孔が見られる。	受け部口縁はヨコナデ、他の外面はハケ調整。受部内面はハケ、脚柱部はナデ。	色調黄茶色、胎土に石英砂粒を多く含む、焼成は堅緻	
167	〃	器台形土器の基部、径21.0cm、筒部は細いと考えられ急に裾広がりになる中位に円孔を四個配す。	外面は、ヘラ研磨風にナデ磨き？。内面はハケのあとナデ磨き	色調黄茶色、胎土に大粒石英砂粒を多く含む、焼成は堅緻	
168	〃	高杯形土器脚部、脚柱部は若干丸みを持ち、裾部は「ハ」字状に広がる。脚柱部上半に上下交互に円孔を8個開ける。	脚柱部外面は細かいタテハケ目、裾部はヘラ研磨。内面脚柱部はシボリ他はナデ	色調茶褐色、胎土に輝石や大粒の石英を含む、焼成は堅緻	
169	〃	高杯形土器脚部、円孔が筒部下半に上下交互に6個開ける。	脚柱部～裾部外面はハケ目裾部内面は荒いハケ、脚柱部はナデでシボリ痕あり	色調黄褐色、胎土に大粒の石英砂粒を含む、焼成は堅緻	
170	G地点 表採 170～176は 同一地点	器形は170とほぼ同じ、屈曲部突帯に沈線をめぐらし刻目を配す。その上下に逆C状の半截竹管刺突文を二段配す	外面は器面が荒れているため不明、内面は裾端部は極細のハケ、裾部はハケ目のチナデ	色調黄褐色、胎土に大粒の石英粒を含む。焼成堅緻	18
171	〃	器台形土器の裾部？裾部はやや外ぶくらみになり、裾端への屈曲部には突帯をめぐらす。外湾する脚端部は外方へ大きく開き、端部はつまみ上げる。裾部に円孔を四個、屈曲部は、半截竹管による刺突文を逆C状と直線状につけている。屈曲部にも円孔を四つつける。	外面はていねいなヘラ研磨内面はヨコナデの後ナデミガキ？	色調黄褐色、胎土に大粒の石英粒を含む。焼成は堅緻	18
172	〃	大型の器台形土器で裾部は一部欠損、口径38.0cm、受部は、胴部から急に屈曲し外方に広がる。口縁端部は方形のたがをめぐらし側面に鋸歯文をヘラ描して二個一對の渦状文を四方に配す。口縁端には刻目と半截竹管による逆C字状の押捺文を施す。胴部はエンタシス状にふくらみ全面に円孔を配す	受け部外面は不明、内面はナデ。胴部はハケ目である	色調黄茶色、胎土は石英の大粒を含む、焼成堅緻	18
173	〃	172の器台の脚部になる。裾は直線的に大きく開き上端部を強くつまみ上げる。	端部はヨコナデ、他は内外面ともにハケ後ナデ。	172にと同じ	18
174	〃	甕形土器、口径10.6cm、高さ15.4cm、口縁部は直立する底部は尖底気味の平底	口縁部ヨコナデ、胴部外面はハケ、内面はヘラケズリ	色調淡黄茶色、胎土は輝石、石英粒を含む、焼成は堅緻	18
175	〃	長頸壺形土器、高さ22.5cm、口縁部は長く直線的にのびる。端部は丸い。胴部は球形で底部は平底気味の丸底。	外面は全面ヘラ研磨、内面ナデ、内面底部にシボリ痕あり	色調黄茶色、胎土は石英などの砂粒を含む。焼成は堅緻	18
176	〃	長頸壺形土器、口径8.8cm、高さ28.9cm、口縁部は長く直線的にのび端部は若干外反する。胴部は球形で、底部は小円形突出底	口縁部は、ヨコナデ、その他外面はハケの後ナデ磨き内面は不明。	色調黄茶色、胎土は石英砂粒を多く含む、焼成は堅緻	18



### 3 祭祀遺物

出土位置はG地点で、1区および2区の調査区の北約36mである。不用意な発掘であったため、遺構の状態あるいは出土状況についての詳細は残念ながら不明である。工事者によると現地表面約60cmほどのところからまとまって出土したらしく、指摘する位置の砂層断面に幅20cmほどのやや黒色を呈する楕円形の部分が認められた。とくに埋置するための施設をつくったり、容器に入れるなどということとはしなかったらしい。

出土した遺物は手づくね土器を含めて形態上5種類におよぶが、祭祀の性格や時期を明確に示す遺物に乏しい。遺物は次のとおりである。

#### ① 人形 (1~5)

7個分ある。このうちほぼ全形のわかるものは3個で、全長4.5~6cmの手づくねである。胴部に頭・手・足とみられる突起をつまみ出しただけのごく簡単なつくりで、目・口や指など細部の表現、男女の区別はない。胎土はすべて砂粒を含まない粘土を使用し、黄茶色の堅い焼成である。

#### ② 突起付円板 (6~9)

完形品がないため全形が不明であるが、不整形の円板の周囲から5~6の突起をつまみ出し、その突起を同じ側に屈曲させている。突起を屈曲させた側と反対の円板面には無難作に篋描した格子目がある。人形同様、突起部やその他の部分にさらに細かい表現をした様子はない。胎土・色調・焼成とも人形と変わるところはない。破片を含め4個分がある。

#### ③ 円板 (10~14)

断面凸レンズ状にふくらむ円板で、直径5~6.5cmをはかる。表面に篋描きの格子目を施すが、片面のみ行うものと、両面に行うものとの2種類がある。出土数は前者が2個、後者が4個分ある。篋描き格子目の数や形についてとくに規画性は認められないが、片面のみ施すものの方が線が太く、両面格子の線は細いことから両者の区別は意識されていたものとみられる。胎土・色調・焼成は人形と同じである。

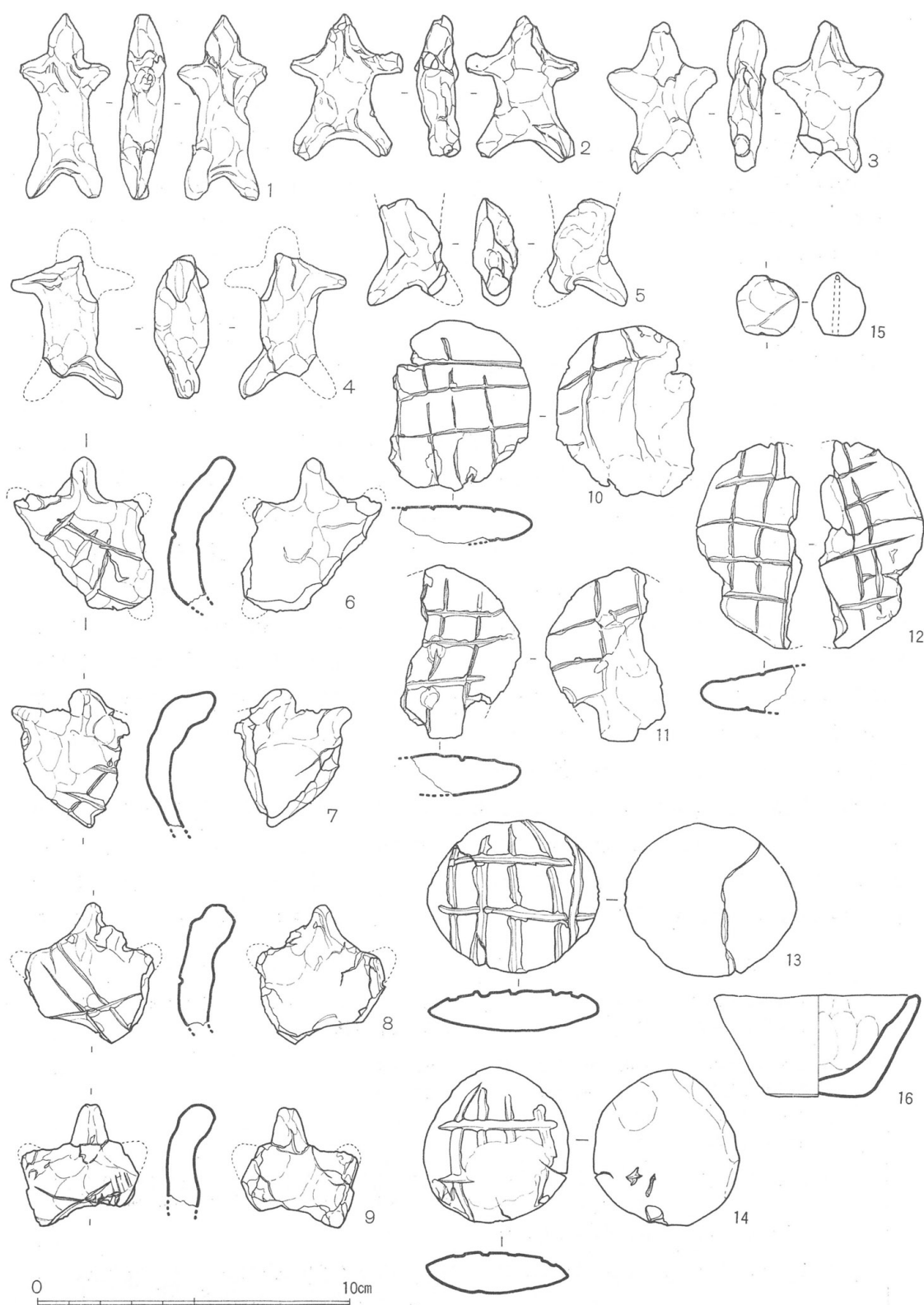
#### ④ 土製玉 (15)

直径2cmほどの玉で表面は凹凸がある。1.5mmほどの貫通孔がある。出土数は1個である。

#### ⑤ 手づくね土器 (16)

いずれも破片であるが小形の粗製土器が2個ある。16は平底に外傾する短かい直線的な体部をもつもので胎土に大粒の砂粒を含んでいる。焼成は堅。他の1つは図示できなかったが、ほぼ同じ程度の大きさを持ち丸底で内湾気味の体部をもつ。胎土・色調・焼成等は人形など酷似している。

以上の遺物のうち①、④、⑤についてはそれぞれ何を模したものか容易に察しがつくが、②および③については類例に乏しくには決定し難い。③に類似した資料としては福岡県朝倉郡八並出土資料があるが、そこでは銅鏡を模したものとしている。銅鏡の土製模造品は一般に鈕を表出する場合が多く、本例のように片面あるいは両面を格子目状に刻むのは稀である。また、もし③が銅鏡を模したものとすれば②は鈴鏡を模したものと考えることもできようが、突出部を屈曲させている点疑問も残る。



第36図 祭祀遺物 (1/2)

### Ⅲ ま と め

前述のように浜遺跡は海岸砂丘上に営まれた埋葬遺構とそれに付随した多数の供献土器群を中心とする遺跡である。これらの遺構は、土器群の示す年代観から弥生中期から古墳前期までのきわめて長期間にわたるもので、埋葬形態も土壙・壺棺・石棺とバラエティに富んでいる。しかし、これら三種類の埋葬形態が各時期に混在してつくられたものではなく、大まかには時期的変遷をたどり得る。すなわち 後述するように出土した供献土器による限り調査区の各遺構の年代はⅠ～Ⅳ期に大別することが可能である。そして、土壙墓は一応各時期を通じて営まれたとみられるものの、Ⅲ期には壺棺が、Ⅳ期には石棺が登場する。これらのうちとくに石棺群の配置は明らかに海岸線から後退する位置を占めており、この傾向はすでに壺棺の配置からも看取される。このことは直接的には埋葬施設の採用とその大形化にともない前代墓との重複ないしは破壊を避ける目的で行なわれたとみることができようが、そのこと自体集団内部における階層的分化を反映するものであろう。とりわけ、1号～3号石棺については2号・3号石棺間の集石遺構を含めて相互に密接な関係があるとみられ、これらの被葬者は小集団内部の指導的立場にある人物とみられよう。

また、遺構解説のなかで集石あるいは列石としたものの多くは土壙上面の覆い石ないしは埋葬位置の表示として理解した。今回の調査で集石下の土壙墓を確認したものはないが壺棺・石棺などにみられることから砂丘という立地条件とも合わせて、埋葬した遺骸の直接的保護施設をもたない土壙の場合にはとくに上面保護の必要性があろう。使用された大量の礫は大在付近にはなく、佐賀関半島突端周辺に産する石英ないしは片岩系統の円礫である。この種の円礫は約4 Kmほど西に所在する飛山横穴群<sup>(1)</sup>（6世紀後半）においても床面の敷石として用いられており、なめらかな表面で白い光沢をもつこれらの石のもつ清浄感を愛好したものとみられる。

つぎに浜遺跡出土の多量の土器については、東九州の海岸部の土器の様相を知る好資料で今回の報告の中心部分をなすが、それが埋葬遺跡にともなう供献土器であるという点で、住居跡出土資料<sup>(2)</sup>とそのまま対比することはやや問題があろうが、ごく大まかに四期に分類した。この場合あくまであいまいな資料をさけ、かつ出土した土器群を単位として時期設定をする立場をとり、これに形態

	土 器 群	主 要 土 器	土 器 の 主 な 特 徴
Ⅰ	1区第2土器群 1区第1土器群	18～20 21、22	半截竹管による施文を多用する下城タイプの壺形土器 脚台付鉢形土器
Ⅱ	2区第1土器群 2区第11土器群 2区第12土器群 2区第22土器群	138、139、140、141 113、114、115 93 96	須玖式土器 脚台付壺土器
Ⅲ	1区第7土器群 1区第4土器群	54、55、58、59、60 61、62、64 40、41、42、43、44	坏部立ち上りが長くて外反しつつ大きく開く高坏、安国寺タイプの二重口縁壺形土器は口縁部が高く直立する。
Ⅳ	1区第1土器群	8、9、10、11、12 13、14、16、17	茶臼山古墳タイプの二重口縁壺形土器、鼓形器台、坏部が直線的に立ち上る高坏、球形胴部の甕形土器のセットに在地系土器の組合せ。

的特徴からは時期を明確にすることのできる若干の資料を加えた。

I期はほぼ中期の前半に相当するもので、下城タイプの壺形土器の形態を明らかにできた。この時期の半截竹管文を多用する施文法は武蔵町熊尾遺跡<sup>(3)</sup>においてほぼ単純資料を得ているが壺形土器の形態はやや肩部の張るものが多く、口頸部も短かく外反する特徴をもっている。また、この時期に脚台付鉢形土器が出現することは注目される。48、49もこの時期に含まれるものであろう<sup>(4)</sup>。

II期はほぼ中期の中～後半に相当するもので、一部後期初頭のものを含む。土器の主体は北部九州系の土器が中心を占めるが、後半には東瀬戸内各地域の土器の影響が顕著に認められる。このことは、とくにこの時期に浜遺跡に各地の土器の影響が入ってきたというよりむしろ、東瀬戸内地域の文化の底を流れる共通性としてみるべきであろう。51、70、90、91、75、76、72などがその一群としてあげられるが頸部付近から肩部にかけて多くの突帯をつけ、円形あるいは棒状小浮文を施す鋤先状口縁壺形土器は大野川上中流地域で後期前～中頃にかけて盛行する典型的な壺形土器の祖形となったものとして注目される。このタイプの土器は国東町安国寺遺跡<sup>(6)</sup>、武蔵町内田遺跡<sup>(7)</sup>などでも出土している。

III期は<sup>(8)</sup>大分市守岡遺跡の19号住居跡出土資料を標識とする守岡Ⅲ式にほぼ相当するものと考えている。守岡Ⅲ式は在地系土器と庄内式（新）の特徴を有する甕形土器・吉備地方の酒津系とみられる二重口縁壺形土器が共伴することから一応布留式に先行する時期設定が行なわれている。これに相当する土器群を1区第7土器群および1区第4土器群・G地点出土土器群と考えている。またやや新しい様相を示す一群として段血状の坏部を有する高坏(122)と甕形土器(124)のセットもこれに属しよう。

IV期は1区3号石棺周辺出土の土器群である。茶臼山古墳タイプの二重口縁壺形土器との共伴資料である。いわゆる安国寺タイプの二重口縁壺形土器も大きな形態変化することなしにこの時期まで残るものとみとめられる。口縁部の櫛描波状文はすでになく頸部境目の三角突帯もきわめて形骸化しているが、口縁部の立ち上りは高く端部のつくりはシャープである。8および9はやや古相を残しているものの全体として在地系土器との組合わせは守岡Ⅲ式との連関からも納得のいく一括資料であり、今後この地域の標識となり得るものである。

以上出土土器の時期変遷を大まかに述べたが、II期とIII期の間に位置すべき後期の資料がきわめて希薄なことが注意される。それが調査地点の選定の問題によるものなのか、あるいはこの地域に特有の問題を内包するものなのか現在の時点では速断することはできない。今後の課題として残したい。ところで、今回の考古学的調査の結果から直接的に浜遺跡に墓地を営んだ人々、なかんずく「アマベ」との関連について多くを語る資料はない。彼らが海洋での活発な活動を示す証として、各地の土器文化の影響があるというならばそれは武蔵町の内田遺跡や熊尾遺跡また国東町安国寺遺跡についてもいえることで、むしろ海岸地帯にある遺跡に通有の現象とみられないこともない。この地域の人々を考古学的に「アマベ」として特徴づける資料としてはやはり築山古墳、亀塚古墳、臼塚古墳といった大形前方後円墳<sup>(9)</sup>においてではなく、従ってその成立の背景が鋭となるだろう。

## 参考文献

- (1) 真野和夫・渋谷忠章「飛山」大分県教育委員会 大分県文化財調査報告 第28輯 1973
- (2) 例えば大分市の平野部の集落遺跡として雄城ノ台遺跡がある。雄城ノ台遺跡は大分県教育委員会が1971年から1974年まで7次にわたって調査を実施し、弥生前期末から古墳前期にかけての豊富な土器資料がある。
- (3) 海岸に面した舌状丘先端の集落跡で、姫島産黒曜石の加工場とみられる遺構も発見された。半截竹管による二本単位の平行線のほかに三本単位の波状文もわずかに存在する。
- (4) 宇佐市野口遺跡では1980年の調査で埋葬にともなう祭祀土器の一括のなかにみられ、組合せから中期前半と判断された（高橋徹氏教示）。浜遺跡出土資料と比較すると鉢部のふくらみがなく、脚裾が外湾せず、に直線的であるなど細部に若干の相違がみられる。浜出土資料が若干後出する可能性はあろう。
- (5) 清水宗昭、高橋徹ほか「荻台地の遺跡Ⅳ」荻町教育委員会 1979  
清水宗昭、坂本嘉弘、牧尾義則、羽田野光洋「大野原の遺跡」大野町教育委員会 1980
- (6) 鏡山猛、賀川光夫ほか「大分県国東町安国寺弥生式遺跡の調査」九州総合文化研究所 1958
- (7) 内田遺跡は茶臼山古墳タイプの二重口縁壺形土器や段皿状に屈曲する坏部をもつ高坏などの土師器類をともなう埋葬遺構がよく知られているが、それとは別に多数の弥生後期の土器が出土している。武蔵町教育委員会蔵
- (8) 後藤宗俊・杉崎重臣・羽田野光洋「守岡遺跡調査概報」大分市教育委員会 1979  
羽田野光洋「東九州における弥生式土器研究Ⅰ」『古文化談叢』第5集 1978
- (9) 真野和夫「古墳時代の豪族」『大分の歴史1』大分合同新聞 1976

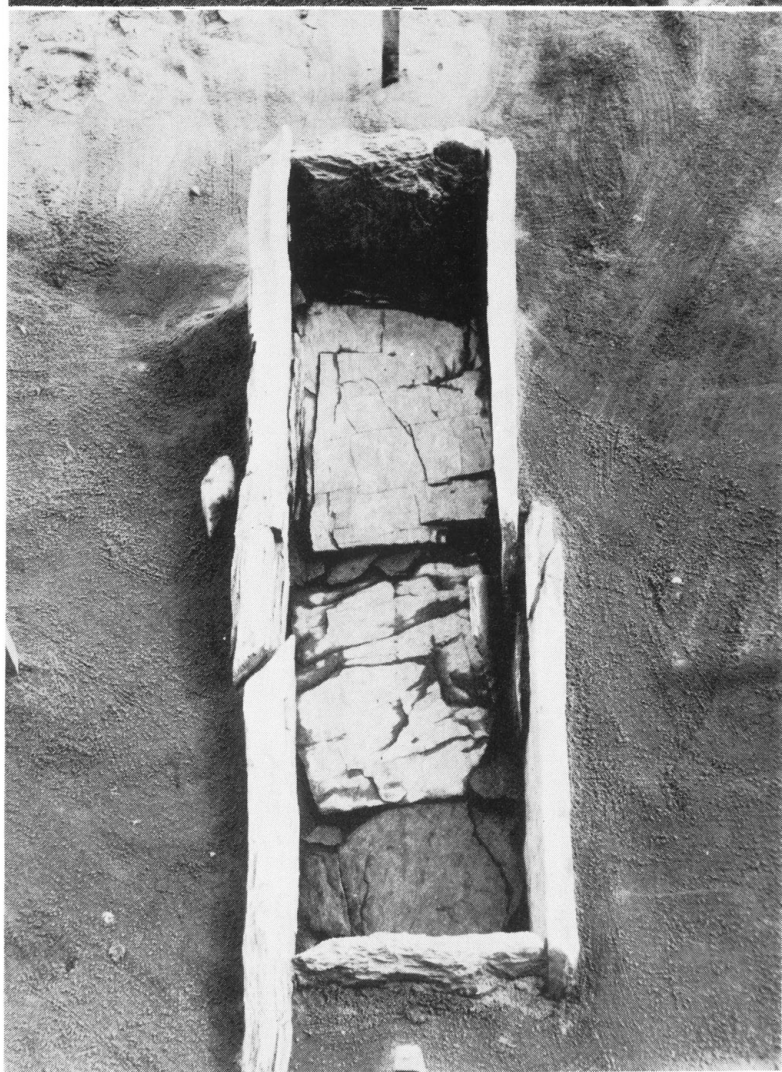
# PLATE



遺構(1)  
一区



↑ 2号石棺 (東より)



← 2号石棺内部





↑ 3号石棺 (東より)



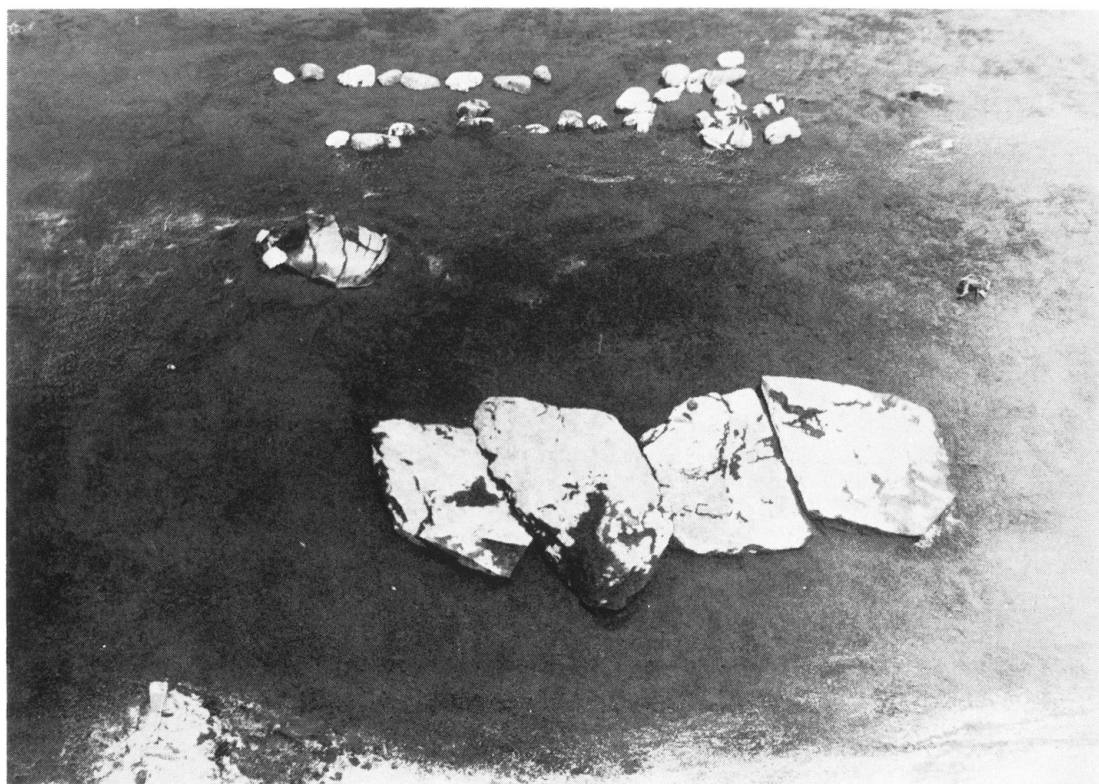
← 3号石棺内部



3号壺棺（中央上部）と4号石棺（手前）（東より）



4号石棺内部



5号石棺（南より）



5号石棺内部





第1集石遺構（東より）



同上壺形土器出土状態

遺構(6)  
一区



1区第2集石遺構(西より)  
←

第3土器群出土状態↓



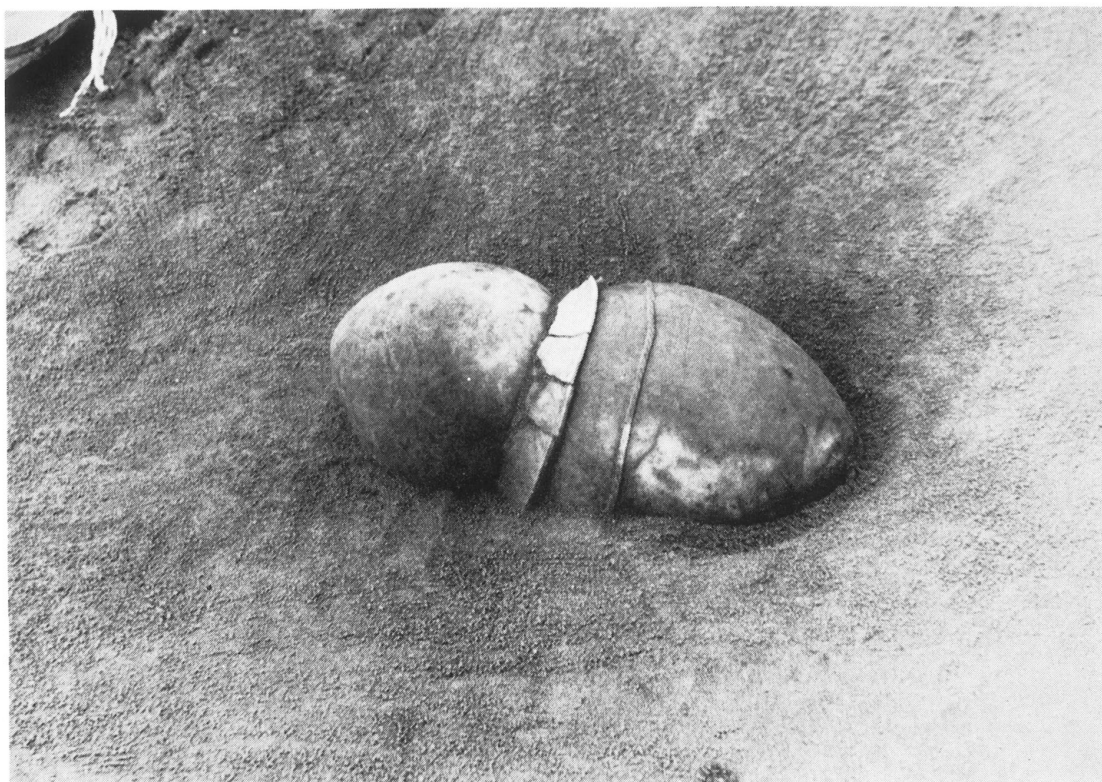


第 4 土器群出土状態



第 5 土器群出土状態





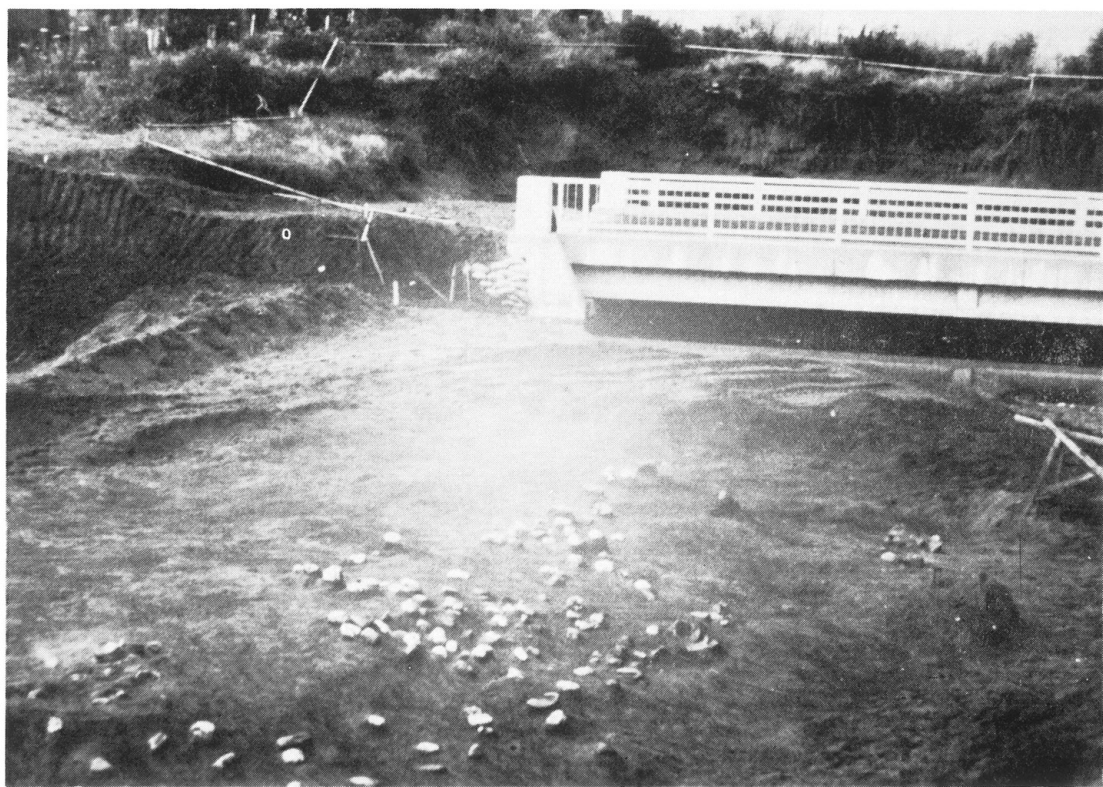
2号壺棺出土状態



3号壺棺出土状態



2区全景（西から）



2区全景（北から）





B-2 集石13主体部



同 上

遺構(1) 二区・G地点遺物出土状態

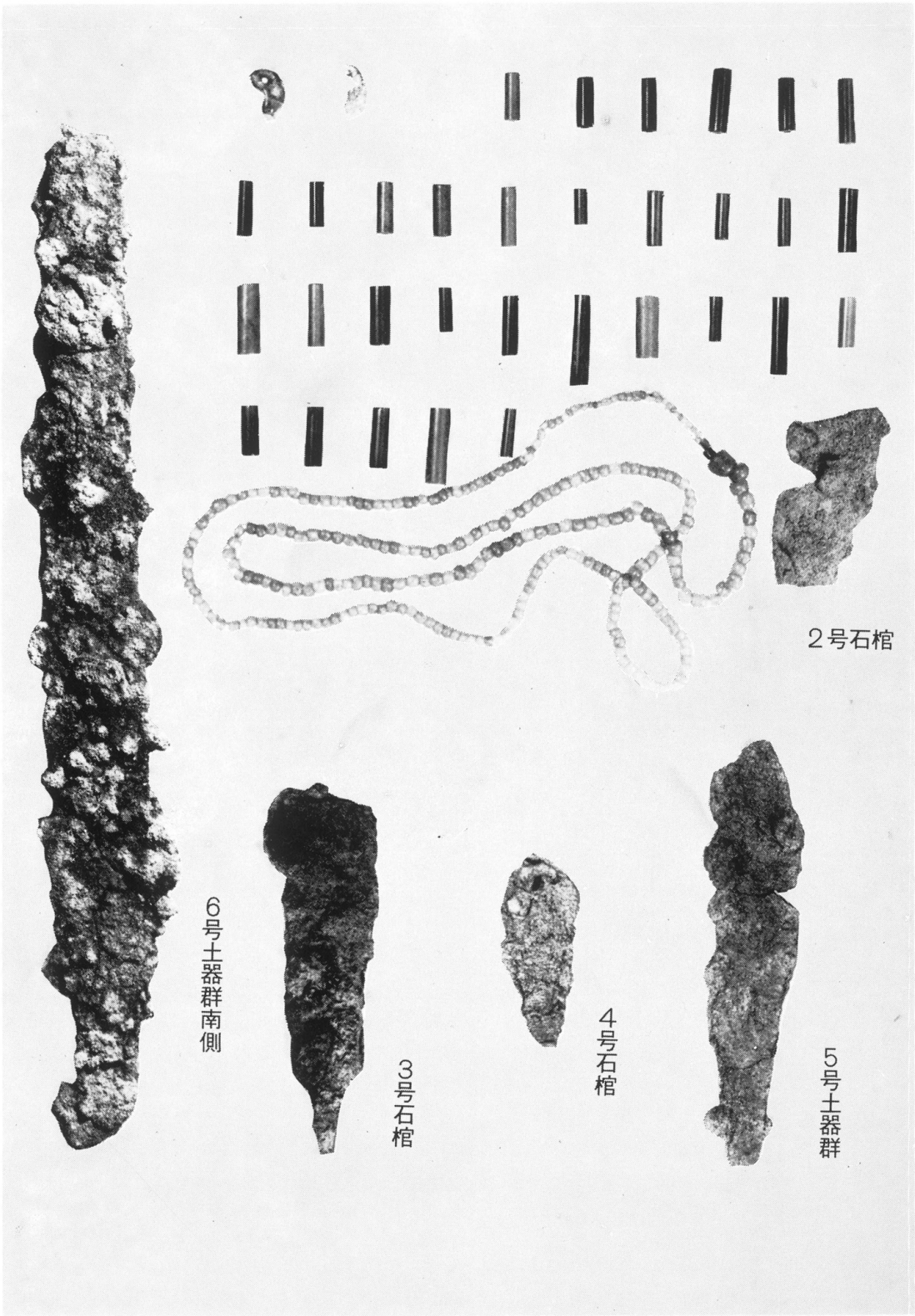


C-2区第5土器群出土状態  
←

G地点土器出土状態  
↓



遺物(1)  
玉類・鉄器



2号石棺

6号土器群南側

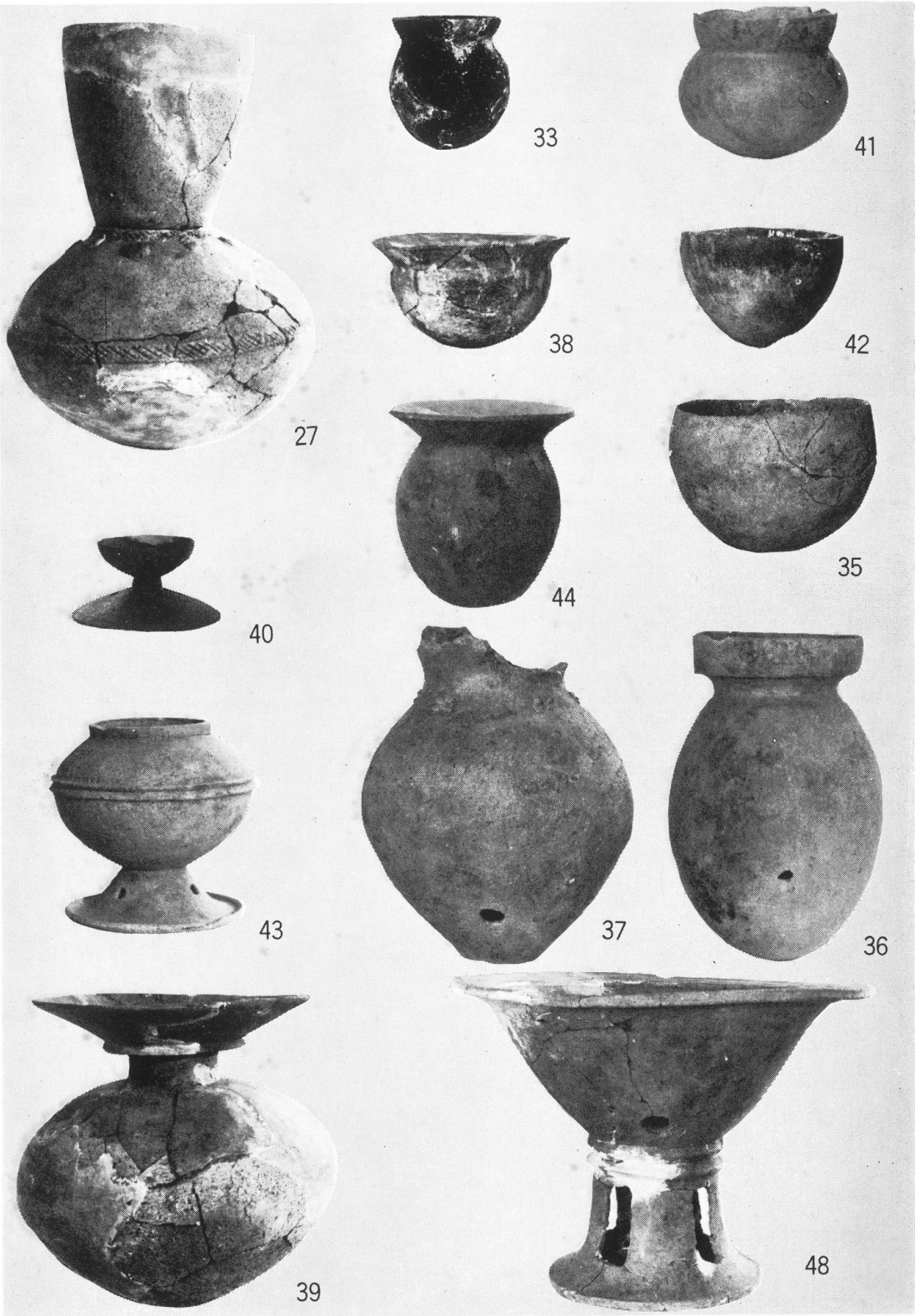
3号石棺

4号石棺

5号土器群



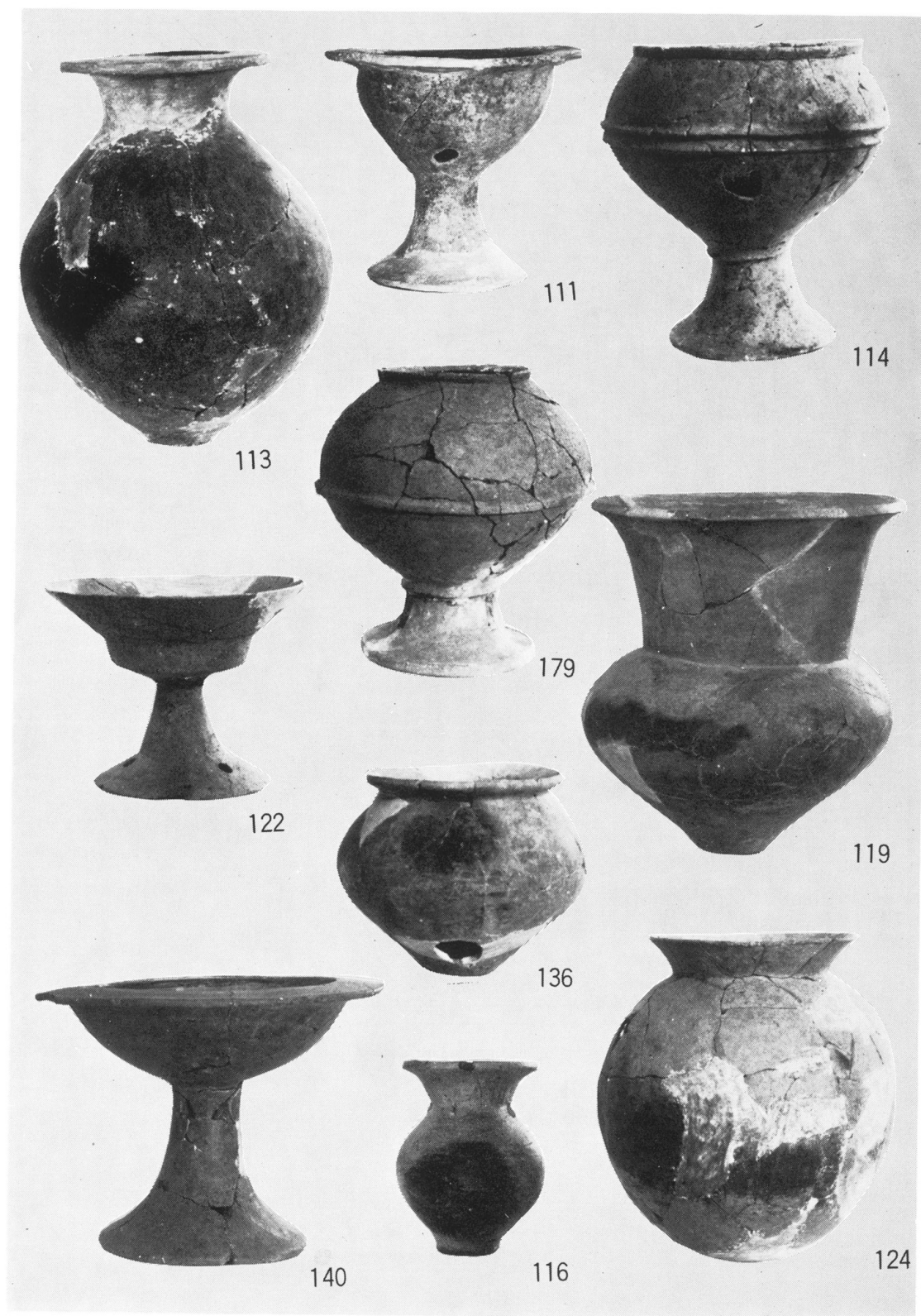
















141



153



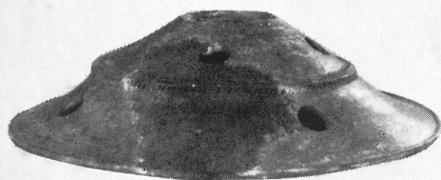
158



160



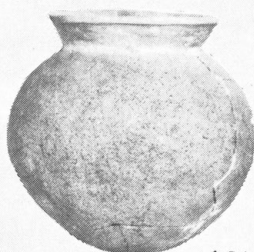
174



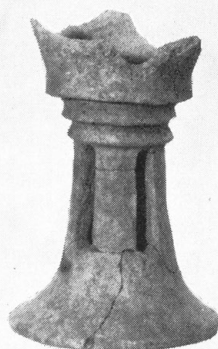
171



170



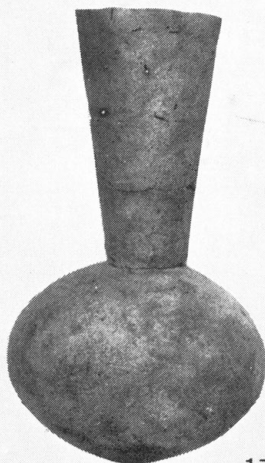
161



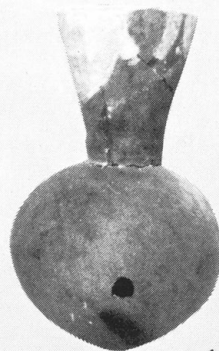
165



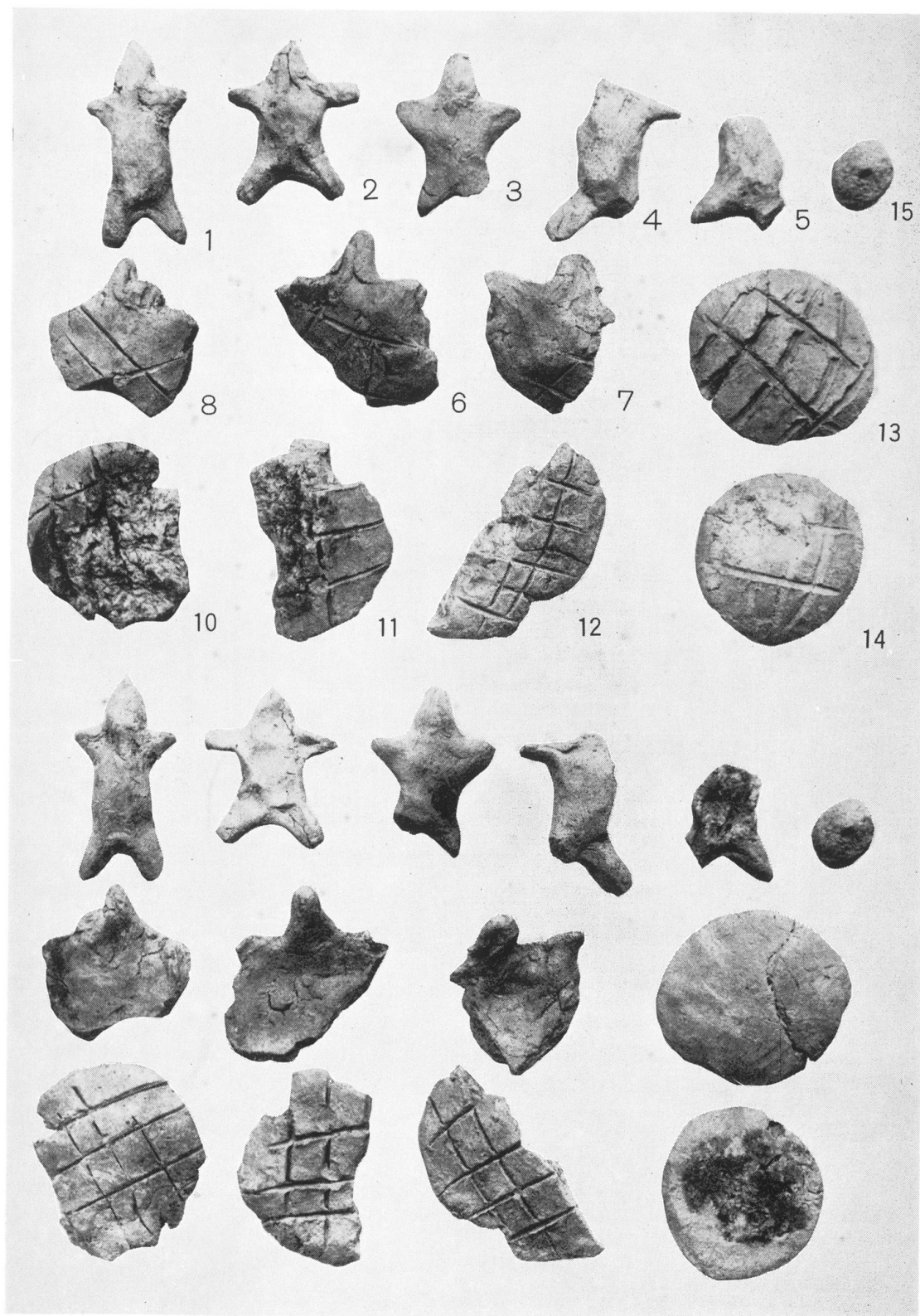
172



176



175





1

2

3

浜遺跡別付図

A

B

O<sub>2</sub>O<sub>1</sub>

C

D

E

浜遺跡遺構遺物配置図

0 5 10m

---

浜 遺 跡

大分県文化財調査報告

第 48 輯

昭和55年3月

発 行 大 分 県 教 育 委 員 会  
大分市府内町3-10-1

印 刷 日 の 丸 印 刷 株 式 会 社  
別府市中央町9番15号

---

